工ト A78

百家說林

卷八

兎園小說

兎園小說とし。瀧澤馬琴山崎北峯等の發意にて。文政八年乙酉のとし。毎月一回互に奇事異聞を書記し來りて披講し。是年正月海棠庵の發會より。十二月著作堂の集會に終る。毎會の記事を輯めて一部十二卷となせるものなり。兎園冊子といへること五代史に見え。鄉校俚儒。教田夫牧子之所誦也とあり。この書の題名も此意より取れる者ならんか。會合諸子は左の如し

著作堂　瀧澤馬琴　嘉永元年十一月歿年八十二略傳既に出でたり

好問堂　山崎美成字は文卿通稱は新兵衛北峯と號す下谷長者町の藥商なり是年十月海棠庵の例會に馬琴と文學上の口論をし兩人の間永く絶交したりとぞ文久三年七月六十七にて歿す

海棠庵　關思亮は源吾と稱し東陽と號を書家關其寧の孫なり天保元年九月歿す年三十六

輪池堂　屋代弘賢通稱は太郎のち銓文と改む幕府の小吏なり俸祿十五俵御臺所人より起り十二年間に御右筆格となり後本役となりて祿百石を賜はる天保十二年五月八十四歳にて歿を博識にして藏書に富めるは世の通く知る所なり

国立国会図書館 25.3.31
112247

松蘿館　西原好和通稱は新右衛門立花侯の留守居なり是年三月其藩柳河より赴きしかば四月以後は此會より出てゝ元来好事家にて且當時留守居役の風習として驕奢遊蕩を競ひしが文化十二年四月幕府より風聞不宜國元蟄居の譴責を受けて歸國し天保のはじめ歿せりといふ

麻布學究　大鄕良則字は伯儀通稱は金藏信齋と號す越前鯖江藩士なり林祭酒に學びて松崎退藏(憺堂)葛西謙藏(因是)佐藤捨藏(一齋)等と林門五藏の稱あり(一藏は其人を忘る)文化の初め師命を以て學舍を麻布の古川端に開く因て城南讀書樓と稱す弘化元年十月歿す

龍珠館　桑山修理幕府旗下の士なり祿千二百石にて屋舗は本所三つ目通り富川町にあり此人は耽奇會の發起人なり

文寶堂　龜屋久右衛門本姓實名共に詳ならゝ飯田町に住みて藥種を商ふ後に二代目蜀山人の號を襲げり文政十二年三月歿す年六十二歲

謖園　荻生維則字は式卿本姓は淺井氏なるが物徂徠の孫鳳鳴の養子となり年二十餘にして郷山藩の儒官を襲ぎ家の通稱惣右衛門を稱ゝ文政十年正月徂徠百年忌に大に都下の文學雅藻の士を會せしといふ歿年未詳

遯齋　清水正德は通稱俊藏號を赤城といふ上野の人にして經學及ひ兵學に通曉せり嘉永元年五月八十三歲にて歿す祭ゝる林門五藏の一人若くは此人か

乾齋　中井豐民は太田錦城の門人なりといふ其出處經歷いまだ詳ならゝ後考を待つ

琴嶺　瀧澤興繼は宗伯と稱ゝ馬琴の男なり松前侯の醫員にて天保六年五月歿す年三十八

以上十二人を本員とす

青李庵　角鹿氏京師人　晁樹　西原氏柳河人

以上二人は客員なり角鹿氏は著作堂の紹介にて西原氏は松蘿館の親族なりとぞ

この兎園小說は本篇十二卷に外集別集餘錄を幷せ總て二十卷を全本とす其本書は著作堂に傳へたりしが天保十四年の歲末に臨み故ありて伊勢の人小津桂窓に金五圓にて讓りたりしよし馬琴が日記に見ゆ余が藏本は疊翠軒藏書の朱印あり此藏主は幕府旗下の士石川左金吾(祿三千石麻布古川町に邸あり)にて馬琴と交り殊に親しく八犬

傳弟九輯の序ニ。琴籟閑人とあるハ即ちこの人なり。天保十二年六月卒をと聞けば。桂窓ニ譲らざる以前ニ於て。全部を寫し置きたる者なるべし。余の藏書となりて既ニ十餘年なり。さて此書ハ。抄略の本。まゝ世ニ傳てりたれど。全本のものいと稀なるよし。伊勢の本ハ今尚小津の家ニ存せりや否やさだかならぞ。家藏の完本なるハ殊ニ珍らしとて。年ごろ朋友の中ニもててやされたり。前年馬琴の外孫なる渥美正幹子ニ借し與へたりしが。子ハ全くこれを寫したりとぞ。又書中ニて馬琴の手記ニかゝる者を抄出して。同子が編纂せる曲亭雜記ニも載せたり。此度吉川より百家說林の中ニ加へたしと乞ハれければ。曽て篇中諸子の傳記をも見聞ニ隨ひ書き留め置けるもの。詳略のまゝ巻首ニ掲げ。且此書の来歴をも附記して授けぬ

明治二十四年七月　　如電居士　大槻修二誌

兎園小說目錄

○第一集 文政八年乙酉春正月十四日於海棠庵發會　海棠庵　一頁
○沼津驛和田氏女兒の消息　好問堂　三頁
○禁裏萬歲御式　輪池堂　五頁
○吉兆　松蘿館　六頁
○伊香保の額論　文寶堂　十一頁
○神主長屋惣八が事　著作堂　十二頁
○ひやうし考并ニ圖說　仝　廿一頁
○百姓幸助身代り如來の記
○第二集 乙酉春二月八日於海棠庵集會　輪池堂　廿五頁
○神靈　仝　廿七頁
○賢女　好問堂　廿八頁
○多摩郡貝取村堀起の古碑

○隱語　好問堂　廿九頁
○蚘蟲圖　仝　廿三頁
○好問質疑　仝　廿四頁
○まみ穴。まみといふ獸の和名考。并ねこま。いたち和名考 附奇病の評　著作堂　廿九頁
○駿河町越後屋替紋合印の事　文寶堂　五十一頁
○銀河織女に似たる事　仝　五十二頁
○元文五年の暦のてし書　仝　五十二頁
○藤代村八歳の女子の子を産みし時の進達書　海棠庵　五十三頁
○兩頭蛇并圖　仝　五十五頁
○第三集 乙酉春三月朔於著作堂集會席上披講如例　著作堂　五十七頁
○五馬　三馬　二馬　好問堂　七十四頁
○於竹大日如來緣起の辨　文寶堂　七十九頁
○安宅丸御船つくられし時の漆の事　仝　八十一頁
○高松邸中厩失火の事　松蘿館　八十二頁
○山王靈聖　輪池堂　八十六頁
○深木正信　仝　八十七頁
○むじなたぬき并に熊の月の輪　海棠庵　八十七頁
○猫虎相似 附錄　好問堂　八十九頁
○猫虎相似の批評　著作堂　八十九頁
○第四集 乙酉夏四月朔於海棠庵集會席上披講如例　著作堂　九十一頁
○七ふしぎ　海棠庵　九十九頁
○建治の古碑并に武市兄弟　輪池堂　百三頁
○身代觀音　仝　百五頁
○耳の垢取　好問堂　百七頁
○風神圖說　乾齋　百十頁
○虹霓　伊勢踊　琵琶笛　奇疾

兎園小說第五集目錄 終

○虛無僧定法　文寶堂　百十三頁
○夢の朝顏　仝　百十九頁
○駒込富士來歷 一錢職分由緒附草加屋安兵衛姐之事　仝　百廿一頁
○第五集 乙酉夏五月朔於好問堂集會各披講了　好問堂　百廿六頁
○古狸の筆跡　著作堂　百三十頁
○老狸書畫譚餘

兎園

小說

瀧澤馬琴等編

海棠庵錄

○文政六年の夏の末。駿州沼津驛和田傳兵衛といふものへ。娘より遣しゝふみの寫

豆州岩地村と申す所の獵師の子。齋藤重藏と申すもの。十四歳のとき。兄と共ゴなりハひのため。家出いたし。ちひたけを作り。其商賣ゴて處々ありき候處。おもひ候やうゴもなく。兄ハ三四年をぎて。弟ををてゝ國ゴ歸り。ふた親ともゴ暮しをりしハ。三十年ちかき前の年ゴ御坐候。然るゴ。去年豐後國岡（中川侯の城下）と申を所より。私方名あてゴて。金子廿五兩岩地へ遣され候樣ゴとたのみこし候。私方ゴてハ。一切存ぜぬこと故。とるゝ〳〵と豐後より岩地へいかなる緣ある人ゴやと。早速書狀を出だし。飛脚をよび。相渡し遣申候處。その人のゝなしゴて。始めて相ゴかり。十四歳のとき。家出いたしゝ重藏のよし。岩地村ゴてハ。三十年むかり便なき人より。かく書狀并ゴ金子まで贈りし事なれば。夢かとむかり悅び披き見るゴ。豐後國ゴいたり。椎茸の製作をならぬ所へつくりかたを教へ。國益なりとて。

御領主の御かゝえゝなり。年毎ゝ七拾兩の金を賜ゝり。岡の岳山と云ふ所ゝて。大造ゝ家を建て。追々仕合よく。三百餘人召つかひのもの有之。日々しひたけをつくり。串ゝさしやきて。大坂ゝ出だし。春と秋とゝ二萬兩餘もとりいるゝ身上ゝなりし事。書載御坐候よし。當年五月上旬。亦從豐後より當地ゆきの金子百兩。私方へたのみこし候。いゝち村ゝ。至りて邊土ゝて。家もやうやく廿軒ばかりゆゑ。村中こぞりて稱譽いたし候よし。只今ゝ重藏母ばかりゝ御坐候。當六月右重藏妻と共ゝ母ゝあひゝ參り。氏神へ唐木綿の大幟をあげ候よし。誠ゝめで度珍しき事ゆゑ。あら〳〵申上候

かの重藏と申す人。當年四十三歳ゝなり。只今ゝてゝ山の中へ家を建て。その家つくりの大そう三百餘の手人をつかひ。自身ゝ日々椎背を作り候所を見廻り候ゝ。のりかけ馬ゝてあるき候よし。妻ゝ阿州のものゝよし。領主より苗字帶刀上下御免あり。まことゝ重藏もとゝゝ獵師の子ゝて。細きけむりもたてかねし身の。わづかゝ二三十年ゝかくなり出ぞ候事。天運ゝかなひ候ものゝ御座候

和田たち

せき御ふたかた樣

右傳聞原本のまゝゝあるしつ

乙酉孟春關　思亮

好問堂錄

○禁裏萬歳之御式

此時所司代より警固出役等もなし。又諸人拜見もならざりし故。彼地ゝおいても誰も存じ申ものもの覺なし。此ゝ記すも亦その大概のみ

京都住　萬歳　小泉豐後

毎年正月四日紫宸殿の御庭ゝて舞ふ

裝束ゝ三位烏帽子。此烏帽子ゝ古へより給りしよし申し傳ふ　大紋着。但し下ゝ半袴のことく裾短し　脇ゝ紅の兩面の小袖。尤無紋　下ゝ白無垢を着。小さ刀を帶を。舞ふ時ゝ兩人とも脇袖なり。歳若ゝ萬歳烏帽子素襖を着。但下ゝ半袴の如く裾短し　纖慰斗目。紋ゝ丸の内ゝ笹龍膽則小泉の家の紋なりとぞ　を着。刀脇差を帶を。牧羯鼓中啓を持。但豐後ゝ羯鼓を持ちて。手ゝてこれを打つ。歳若ゝゝいづれも持たゞして舞地なり　唄ひものゝ。委敷ゝあれど。大かた三番叟の舞ゝ似よりしか。始ゝゝ

「トウ〳〵タラリ〳〵ラフ

其次ゝ。一本の柱より十二のもしらと申を。神々の御名を申し終りて

德若ゝ御代萬歳と。枝も榮え益しまを愛敬ありける。あら玉の年立ちかへる日の朝日より。水も若やぎ。木の芽咲き榮えけるゝ。誠ゝ目出たう候ける

北面の武士大紋長袴ゝて。御階の左ゝありて。（附たり小さ刀を帯び扇孔を用ふ）

勇みませいと大音ゝて申す

其後。うたひ候ゝ空穗の猿の舞ゝ。うたひ申を唱ゝ似より候樣ゝ見ゆ。又太子御誕生の事あり。そのあとゝ年々承り（ホのまゝ）候事ゝ承りし

五位殿上人中啓を持參候て。御階六段目（御階十二段あり）ゝて北面へ御渡し。北面より豊後へ被下候。弓場殿（此所土間ゆゑ為ゑしく）ゝて休息仕。御料理御酒。御鏡餅頂戴仕。勘解由使青銅拾貳貫文。米一石持參ゝて。中啓と取替ゝ相成るなり

中宮樣へ參り候とき。御庭ゝて女嬬と見えて。白小袖ゝ袴を着。檜扇ゝて顔をかくし御階の上ゝて

いさみませいと。大音ゝて申すと

御翠簾の内。大勢の女中の聲ゝて。笑ひ候事御庭まで聞え。女嬬もてやくかけごゑ申すあり

頂戴ものゝ。御翠簾の内より。段々紙ゝ鳥目其外色々ものをなげ出だされ。頂戴仕候。その内ゝ金壹分五つ五色の糸ゝてよくからみたる一つ御坐候。是ゝ中宮樣より賜候歟。其外。院の御所がた。右之通りなり。宮方公家方へゝ。御召御坐候得共。御問これなきときゝ。まゐり不申候といへり（附たり。祭あしゝて草履をもけり）

右者ある人の覺えし趣を書き付け侍りしとて。おこせたるをこゝゝにしるす

右一條これを友人の筆記中ゝ得たり

文政乙酉上元前一日

山崎美成錄

○吉兆

輪池堂

小田原侯ゝ。むかしより吉事ある毎ゝ。必城の櫓ゝ。鯛一打すゑてあり。今の侯ゝ至りて。あるとき五六寸の鯛二枚あがりてあり。家臣これを見て。例の吉瑞なりとて。とりおろして侯ゝたてまつりしかば。料理せしめてめしけるゝ。たしてめし狀到來して。顯職を得給ひき。是人間わざゝあらぜ。かの人の所爲ならんといへり。又御先手頭山本原八郎ゝ。家の紋鳥居ゝ鴉なり。吉事あらん前ゝゝ。鴉の來集まるとあり。もとゝ新御番ゝてありしが。鴉一羽家の内ゝ飛び入りし事有り。いかなることゝかと思ひあやしみける程ゝ。やがて

組頭になりけり。そのゝち又五六羽庭上にゐたることあり。吉兆なるべしといひあへる程に。西丸小十人頭にをゝみたり。去年の冬。御先手になる前には。二十あまり来つゝ馴れたりといへり。これをおもふに白澤圖に。野鳥入屋。鬼名不穴（一作石嵐）と見えて。怪とせしも一概には信じがたし。予はじめ國鏡の手傳に出でし時は。母の忌日にめしし狀到来し。御加増のときも母の忌日にめしけるなり。この母は。予が十歳の時身まかりしが。その遺言を守りて。日夜觀じをるゆゑ。相感ぜる所ありしにや。この事を記しゝ文を。故（モト）の吉田侯見させ給ひて。感心のよし仰せ下されし。されば親の守りは。現世のみならぜなき後までもかくあれば。おろかなる思ひそと。わかき人に常にいひきかをことなり

弘賢識

松蘿館述

文政八年正月十四日

○伊香保の額論

文政六年の事なりき。上毛高崎のほとりを徘徊し。一刀流の劒術者に。千葉周作といふものあり。その伎。鬼神にひとしといひもてふらして。弟子を集め威を逞しくをる程に。おなじ州なる引間村に。浦八といふものありて。これと交ること淺からぜ。そが中には。念流破門の弟子さへあるをかたらひつゝ。その年の四月八日に。伊香保の湯前の藥師堂に。門人等の姓名を悉く識したる額を掛け奉らんとて。しめしあはをることありけり

この周作は。浪人なれども。實は若州小濱の家臣にて。由緒も正しく。且劒術の名人なれば。公儀にもあろしめされ。執政がたの御免を蒙りて。諸國修行に出でたれば。此度額奉納の事なども。御内意を受けたりと偽りけるとぞ

この事同州馬庭の念流に。志厚かりける若ものども傳へ聞きて。恐るゝこと大かたならぜ。こはまたく念流を侮りたることゝろより。かゝるわざをばするならん。抑馬庭村なる念流は。天正年中より相續して。師家に代々達人出でその術を學ぶもの。今もなほ千人に下らぜ。他郷より。来つるもの。いかむかりの事やある。われ〳〵が手なみの程を見しらせぜばあるべからぜと。竊に示し合はするのみ。師家（樋口十郎左衛門と云ふ）へは。絶えてこの事をつげしらせず。その中にも赤堀なる本間仙太郎は。その身のとり立てたる身子凡六七十人を將て。伊香保の宿に推し登り。東は平塚田部井の郷黨榮八が子（名を忘る）十五歳。なほ少年なりけれども。このものを頭として。大竹新兵衛つきしたがふ。この一むれは。四五十人おなじ所へ馳せつどふ。この餘。吾妻の里人等向寄（モヨリ）〳〵々々に頭を立てゝ。みな劣らじとぞ集りける。されば。この伊香保の宿に。湯亭十二軒あるを。すべて大屋と唱へたり。その他くさぐさの商人

等い。彼十二軒の支配を受けて。世ゐたりをるとなん。その大屋なるものゝ小博武太夫と呼ばるゝい。こたび千葉周作が額奉納の宿なれば。只この所をのみ除きて。その餘の湯亭十一軒を。みな借り盡して宿とせり。このよし馬庭ゐ聞えしかば。樋口いいたく驚きながら。今さらとゞめんよしのなければ。内弟子なんどを引きいれて。車の進退制止のため。伊香保をさしてゆく程ゐ。これを見。これを聞くともがらい。をい馬庭の先生も乘り出だし給ふいとて。なほあちこちよりてせ出でゝ。いかほの宿ゐ集まるもの大凡七百餘人ゐ及べり。かゝりし程ゐ。七日ゐなりぬ。この日千葉周作い。弟子どもをあまた將て。伊香保をさして來る程ゐ。かの人この體たらくをその途ゐして聞きしかば。さうなくいをゝみかねて。その夜い野宿ゐたりとぞ。五日六日のころよりも。罵りさゐざし事なれば。岩鼻の御陣屋へも大かたならぬ聞えゐけん。御代官より差紙もて。新町宿なる本陣と宿役人を召しよせて。その顛末をたづね給ひ。又伊香保なる周作が宿のあるじ武太夫をも召しよせて。これ彼ゐ問亂し給ひ。額奉納をとゞむべき旨を仰せわたされたりければ。事忽ゐ無異ゐ屬して。鎮まるゐ似たれども。千葉かたゐても。亦怒りてかくいこたびの催を妨したる。樋口の奴原捨ておくべきゐあらぬとて。引間村なる浦八が宿所ゐみな〳〵集りて。談合評議區々なるよし。伊香保へ告ぐるものありければ。樋口も今この時ゐ至りて。一あしも引くべからぬ。各覺悟あるべしとて。なほも伊香保の宿ゐをり。敵推しよせて亂妨せば擊ち果たさんこと勿論なり。あかれども。こなたよりてやりて手ざしすべからぬとぞいと嚴重ゐ下知しけり。そじめい只穩便ゐ制せられたるのみなりしゐ。今この指圖をうけしより。おの〳〵得たりかしこしとて。先一番ゐ赤堀の仙太郎が。ぬむ玉の夜の月あるしゐとて。白布の鉢巻ゐおなじ色なる襷して。樽を床几ゐ尻うちかけて。わが弟子どもを左右ゐ從へ。敵や寄すると待ちたりける。その時の面。まゝひげゐ一軍の大將めきて。いと物々しく見えたりとて。人々後ゐいひ出でゝ。互ゐ笑ひけりとなん。かくて樋口を本陣として各すみとり紙をもてあひじるしとし。合圖を定め。列を正して。用意とり〳〵なしける程ゐ。その日も既ゐくれしかば。あちこちの山林ゐ。鐵砲をうち響かせ。ほら貝を鳴らしつゝ。推しよせ來つべき勢あり。事大變ゐなりもやせんと思いざるものなかりけり。かゝりける程ゐ。岩鼻なる御代官所より人を出だし。制止をかへて。雙方をおし鎮め。和睦させんとし給ふものから。大勢の事ゐして。思ひ込みたる事なれば。速ゐうけ引かぬ。互ゐ些もひかぬして。八日九日と過ぐる程ゐ。御代官より嚴密ゐ制し給うて。あば〳〵なれば。雙方や

うやく納得して。十日ゝ伊香保を引き退きて。おの〳〵家路ゝかへりきとぞ

因ゝいふ。伊香保の宿ゝ。八左衛門といふものあり「こゝ武太夫と同家なり。八左衛門ゝ既ゝ沒して。この時後家もちの世帯なりしゝ。いとかひ〳〵しき婦人なれば。手むやく家財を取りかたつけて。みづから際なく立ちめぐり。手代下女等ゝいひつけて。手ごろの石を多く拾ゝせ。是を二階ゝつみのぼせ。又灰を紙ゝ包みて。木鉢などゝあまた入れおき。かゝる折ゝゝ間者などのしのびよることあるものなれば。みな油斷をべからぎとて。庭の水の蔭。雪隱までもうちめぐりけりとなん。又門久津村なる左市といふものゝ。去年十月江戸四谷ゝて。親の仇安兵衛を擊ちとりたる宇市が養父なり。此ものも樋口の弟子なりければ。かの日。伊香保のむれゝあり。そのとき先生ゝむかひていふやう。此たびの先陣ゝ。其ゝ仰せ付けられ下さるべし。劒術未熟ゝ候へば。先輩をうち越えて憚あるゝ似たれども。死ゝくらべをせん時ゝ至らば。某ゝ及ぶもの一人も候ゝじとて。廣言を吐きしとぞ

抑。樋口念流の初祖ゝ。應永のころ。相馬四郎義定より傳へ來て。七代永祿のころ友松兵庫頭氏宗の門人樋口又四郎定次。皆傳へて今の樋口定雄まで九代。上毛馬庭村ゝ在住して。世々劒術をもて家聲を落さぎ。世ゝ稀なるべき名家なり。定雄ゝ予と同甲子ゝて。今茲六十五歳。なほ壯鑠たり。予嘗てこの門ゝ入りて。劒法を學びし故ゝ。件の事の趣ゝ上毛なる同門人より傳へ聞きたるをしるものみ。今この昇平の世ゝ。輕薄浮靡のともがらの。義を捨て利ゝ走れるも多かる中ゝ。かゝる愉快の事もありきと。おろ〳〵思ひ出づるゝも。老のねざめを慰めたり。さてもこれらの事の趣ゝ。そのむじめゝけしかりしゝ。おもひしよりゝ後いと安く。萬死を出でゝ一生得たる。果ゝ笑ひのたねゝぞなりける。こゝ初春のむしゝめでたし〳〵といふべからん

文政八年の春正月　　桜江しるを

文寶堂

○神主長屋惣八が事

淺草元鳥越明神前ゝ。神主長屋といふあり。此長屋をあづかり守れる惣八といふもの。年ごろ多病なるゝより。くをしの匙をつくせども。させるゑるしのなかりしかば。ある人のをゝむるまゝ〳〵。俄ゝ宗旨を改めて。日蓮ゝなりてけり。このもの元來淨土宗ゝて。その菩提所ゝ。淺草なる小揚町の淨念寺なりければ。ある日病の間ある折ゝ。淨念寺ゝ赴きて。やつがり長病祈禳の爲ゝ。日蓮宗ゝあらばやと思ひさだめ候。しかれども。改宗ゝ只ゝが

夫婦のみにして。子どもらにさる望もなし。かゝればかれらにいつ〳〵までも貴寺を菩提にこそたのみ奉るなれ。この義をうけ引き給へかしと。亦他事もなくまうさゝを。住持に聞きて。一議に及ばず。いにるゝ趣こゝろ得たり。更に仔細あるべからぬと答へられたりければ。惣八ふかく歡びて。しからば今よりやつがりらに。何がし寺（寺號を忘れたり）を菩提所にたのみ侍らんとて。まかり出にけり。是より法華を信仰して。題目をのみ唱へしかども。病にいよ〳〵おもりつゝ。ふるとし（文政七年）の大つごもりまに。ときてあやふく見えけるに。みづから淨念寺に赴きて。過ぎつる比。ちかゝ〳〵と申して改宗したれども。病におなじやうに侍り。かゝればいかではじめのごとくみてらに葬り給はれかし。やつがりくをしの力にも及ばぬ。今によみぢに赴き侍れば。又さらに此事をたのみ奉らん爲に。病苦を忍びてまゐりぬといひ果てゝ。いでゝゆきけり。住持は竊にあやしみて。そのゆふべ人を遣して。惣八がりといせしに。惣八はきのふ夕つがたに身まかりぬと聞えけり。住持も聞きて。且おどろき。さては來るはかの者のなき魂にこそありけれとて。いとゞ不便に思ひつゝ。をなはちかれが願のまゝ〳〵。淨念寺に葬りぬ。これ今茲（文政八年）正月二日の事にぞ有りける。

文寶堂識

○ひやうし考

著作堂手稿

定家卿鷹三百首。「武藏野の駒に付けつゝ引く繩の打ちならびたる小鷹犬かな」といふ歌の注に。關東は馬上にてつかふにくつゝの音高ければ。鳥よせぬゆゑひやうしといふ木をあてゝ。棄つるとなり。引繩とは。犬のやり繩の事。口のとまりたる犬なれば。鷹にならへるといふかと見えたり。（この書。第一春。第二夏。第三秋。右の歌は小鷹の部。第二首にあり）此ひやうしといふものを。こゝろ得がたく思ひしに。與の松前にては。馬に轡をもちひぬ。ひやうしといふものをかけて。乘るとありと傳へ聞きしかば。このごろ與繼をもて。松前老君に問ひまつりしに。老君すなはち家臣舩尾吉藏といふものに。ひやうし一具をつくらせ。手簡一通をそへて。たまはせしその書に云く

此ひやうし拵候は。舊領松前より西在五里となれ候て。エラマチ村の百姓なり。村役にて。一ト年中間奉公に出候。然る處。築川へ引取候節より。故郷へ不歸。當年迄江戸屋敷に勤居候。下々ながら志有之者故。當春取立大小さゝせ候身分にいたし候。當時は舩尾吉藏と申候。此もの。村方に居候時は。馬十二むかり持ち。これを渡世にいたし候。當地へ參り候は。三十一歳のときなり。當年は四十歳になり候。古風の荒

ものとて。馬に乘り候い。裸馬子供の時より得ものなり。山谷を馬場同樣にこゝろ得候ものなり。此ものに拵させ候故正真なり

ひやうしい。イタヤといふ木にて造る。繩いシナをよりて用ふ。イタヤもシナもこゝ許に無之故。麻にてよらせ候

ひやうしの事。これによりてもじめてつぢらかなる說を得たり。今そのものを展覽に備ふるをもて。こゝに圖せず。諸君圖せんとならば。席上にてもうつし易かるべし。おもふに馬にひやうしをかくること。定家卿のころまでい。松前のみならで。關東にていのこしありけんかし。よりて又按ずるに。義經記。土佐坊夜うちの段に。草摺のところなるひやうし。鎧の札よきに云々といふこと見えたり。平義器談下卷に。これを引きてひやうし鎧。つまびらかならず。是い譽めたる詞にて。威毛などのことにいあらず。是い辨慶が馬に乘りて。土佐坊を召しにゆくときの有樣をいふなり。草摺のところなるといふによりて見れば。馬のあゆむにつれて。ひやうしよく草摺の鳴音あるをいへるにや。古の鎧い草摺の裏に。草をも布をもあてねば。馬のあゆむにつれて。草摺おどりて音あるべしといいれたれども。此ひやうしも。馬の足搔の拍子にいあらで。馬にいひやうしをかけ。さて又鎧い札よきを

着たる。辨慶がありさまをいへるもの歟。さらずば。當時鎧の草摺を馬のひやうしに摸したる威しざまありて。それをひやうし鎧といひしかもしるべからず。いづれにまれ。安齋翁は。馬にひやうしをかけたることをしらずやありけん。そい千慮の一失なるべし。扨かの鷹三百首にも。義經記にも。ひやうしとのみありて。正字詳ならず。眞名にい鑣子と書くべきにや。よのつねなるをくつわといひ。木鑣をひやうし（即鑣子也）といひけん。關東の方言なるべし。されども。軍陣夜討のをり。人まら枚を含むといへば。馬にい必ずこのひやうしい。關東にのみ限るべきにあらねども。關東にていい。軍陣夜討の時ならでも。鷹狩などの折。多く馬に是をかけたるなるべし。野作人（エソ）い。今も裸馬に乘る故に。馬にいひやうしをかくるといへり。當初關東騎馬の形勢。これらによりてしるべし

ついでにいふ。南留別志五に。火の用心とよぶい。火あやうしといふことなり。本朝文粹に見ゆ。拍子木も火危木なりといへり。夜行翁い。和名。火アヤフレ和名鈔にも見えたれど。ひやうし木を火危木なりといいれしい信じがたし。易繫辭下傳に。重門擊柝。以待暴客。蓋取諸豫と見えたる。柝いひやうし木なり。こい唐山の制度なるものから。天朝にても。いましべよりかゝる例いあるべし。しかれば。ひやうし木を夜行翁の擊つものとのみせんい

非なり。そのかたち元来馬のひやうしに似たれば。やがて鑣子木といへる俗語ならん。物にハ柳子木とも書きたり。これらハ後世文字ひらけしより。字をあてたるなり。愚按も必といしがたけれども。こハ試にいふのみ

右の考ハ。拙著玄同放言禽獸部。名馬の條下にしるしつけんと思うて久し。しかれども。その書。いまだ稿を續がざりければ。こゝに略抄す。遺漏。なほあるべし。早春俗事蝟集して。筆をとるいとまなきを。けふのまとゐにものせんとて。已牌より机案にむかひて。晡午にいたり稿し果てたり。かの兵貴拙速。不貴久而後巧といへることのこゝろにも似たらんかと。そゞろに自笑して。毫をとゞむ。時に乙酉春正月十四日なり。

瀧澤解識

鑣子の事。その圖なくば。この書を見ん人の思ひまどふこともあるべし。程經て不圖そのよしを思ひ出でつゝ。追て載するもの。左の如し

一ひやうしの事。松前にていタヤをして造るといふ

イタヤハ。漢名いまだ考へ得ず。木蘭の和名イタヤといへり。木蘭。即。木蓮なり。これ歟。猶たづぬべし

長さ曲尺にて八寸六分。横幅上にて一寸三分弱。下にて一寸六分。綱をとほす穴三つ。そのうち。上と中央の穴ハ方なり。中央の穴ハ。少し大きし。下の穴ハ圓なり

表ハ中を高くす。裏ハ平齊なり。裏のかたハ馬の頰にあつればなり。但木の厚さ上の方にて五分なり。端にてハ二分五厘

一木環二つ造る所の木左の如し

内一つハそのかたち半扁なり。長さ貳寸壹分扁の肩あり。下まで一寸五分。綱をとほすを穴の長さ壹寸。横六分なり。又一つハそのかたち方なり。長さ二寸六分。横幅一寸二分。木の厚さ各五分。綱をとほす穴二つ。その穴の徑り六分。穴の四方をくりてなだらかにす。綱の摺れてきれぬ爲なり

一うなぢ綱。長さ二尺四寸餘。但。これをわがねてふたつにして。長さ各壹尺二寸餘。むすびめふたつあり

一手綱の長さ木環より別につくるもの。およそ七尺九寸。上のひやうしを貫くもの。長さ壹尺九寸許。これらの綱ハ一すぢづゝなり

一上の方。ひやうしを繫く綱ハふるき絹の裂をもて。綱をわけて。是をまく馬の鼻つらにあたるところをおるによりて

一左右へひらくこと三寸八分。この他ハすべて圖中に見えたり

ひやう一全図

此処馬の鼻つらふあつるをもてきぬの裂みくまくをりまたやうハ別ふでふ図一たり

此索ハ先一下の索のふくびと二をもつて用ふ故なりへづれも右ふおふ

馬ふくろふ出られバ引きつめ短ゝ引れバのをもべ一盈縮脩短このところを解て自由ふを

此処をふハち馬の項ふかくる次の図をえて去るべ一

此索ハふとと一二をもちともふ大てん一寸めぐり也

鏡子を馬ふかくる事かくの如一

ひやう一寸尺細注

つゝふとところ各曲尺をもてきこの他もみふこれふ倣ふ

同木環図

厚ミ五分弱 上下相全シ 一寸五分

二寸五分

厚ミ五分

二寸六分

穴の径り六分二ツともふ相同シ但シ四方をノリて細のきれぬあふべ

同ひやう一の穴図

厚ミ中ニテ五分 端ニテ二分五厘

左右ひろくと三寸六分

此処ひやうあつ一入る

むすびやう入全図を見てさるべ一

此間のアキ五分弱

長サ八寸六分

此穴中央

厚ミ中ニテ六分 端ニテ四分

此間六分

同ひやう一綱寸尺

長サひやう一の穴まで一尺二寸余

長サひやうしの穴まで一尺二寸余

此結びめの間寸六分左右相全シ

此結びめの乃一寸

此結びめの乃一寸

ひやう

中央

ひやう

中央

但此長短馬の小大肥痩ふよりて、盈縮あるべ一

右の内。中二つの木環にさのみ必用のものにあらぢ。こに只綱のむすぼれぬ爲。又よりのもどらぬ爲なりといふ。しからば。これも有用のものなり。必なくばあるべからぢ

このひやうしの圖說に。拙著玄同放言第三集に載をべきものなり。この故にしばらく帳中の秘とすといへども。同好親友の爲に。こゝにかさねて略抄す諸君ねがはくばこの義をもて。他見をゆるかりたまはせといふ

著作堂解再識

乙酉夏肆月初四

北海隨筆に云。楓を蝦夷人はタラベニと云ふ。松前にてはイタヤといふ。本邦の楓より大葉なりといへり。（下卷奏言の條に見えたり）これにてイタヤは楓なるよしをしるものから。猶心もとなければ。このごろ松前の醫官牧村右門訪來せし折。この一條を擧げて質問せしに。牧村が云。イタヤは即楓の事なり。その葉はよのつねの楓より大きし。その樹は松前に多くあり。蝦夷の地はいよ〳〵多かり。よりて松前にて薪にすなるは。皆イタヤなりといへり。よりておもふに。大和本草に。その葉を圖したる大機（オホカヘデ）のたぐひなるべし。又ひやうしの綱によるといふシナの事をたづねしに。牧村が云。シナといへるも木の皮なり。その皮をもて索にすれば。麻よりもつよし。シナは松前にて。文字には板に作るものあり。當否はしらぢ侍りといへり（今按ずるに。正字通。板音柴駅。背上木以負物也。松即板板或作笈と。かゝれば。シナの木に板とかたと。その義にかなはじ。當に栲に作るべし）

○百姓幸助身代り如來の事

信濃國水内郡久保寺村
清助事
百姓　幸　助　申四十二歳

この幸助が（幸助は太田氏なり。その清助といひしは。文化中。江戸の高家につかへし時の名なり。よりて江戸にて。清助とよべり）叔父なりけるものゝ世にありし程。同村正覺院月輪寺（號紫慶山善光寺の行願所なり）へ。大般若經を寄進せんと思ひおこしつゝ。あちこちと券緣をたれども。田舍の事なれば。事ゆかぢ。纔に六七卷を寄進せし程にて。その身はまかりたり。これにより幸助は叔父の遺志を繼ぎて彼經を券緣せん爲に。今茲文政七年の秋。江戸に出でゝ白壁町（金八店）紙商人安兵衛といふものゝ家を旅宿にしつゝ。逗留數日におよびけり。その故郷を去るときに。善光寺へ參詣して。如來ををがみけり。其云云の願ありるにより。こたび江戸におもむかんとぞ。こが母は齡既に八十にあまれり。ねがふは願

成就して。かへり来ん日まで。母のつゝがなからん事を守らせ給へと。念じつゝ。ををいち阿彌陀の畫像一幅を買ひとりたり。かくて江戸に至りて。旅宿の棚に。件の佛像かけ奉りつゝ。日毎にをがみ。朝暮に燈明を揚げなどするに。その身他にゆきて。かへりの遲き日い。必御あかしをまゐらせ給へと。旅宿のあるじにたのみしかば。そのこゝろを得て。おかしてけり。かゝりし程に。九月晦日になりぬ。幸助いこの日。日本橋なる須原屋茂兵衛(ガリ)に赴きて買ひとりたりける。大般若經十卷むかりを脊おひつゝ。なほ元三大師の遷座ををがまんとて。東嚴山に參る程に。とゞ申の時むかりなりければ。參詣の群集みちさりあへず。辛うじてをがみ果てたるかへさに。雪踏の尻をふまれて。うつぶしに倒るゝ折。わがあとなりける武士の。彼も人におしたふされて臥したるうへに。まろばんとをる程に。脇ざしの刀鞘ゝしりぬけ出でゝ。幸助が肩のあたりへひらめき飛びて落ちたりけり。さりけれども幸に身を傷けらるゝに至らぎして。只。經卷をつゝみたる風呂敷の左の肩にあたりたる所い。切れたり。いと危かりきと思ふものから。身に恙なかりしかば。ふかく恐れつゝしむまでもなく。又そのかへさにあちこちとしる人がり立ちよりて。日くれて宿に歸りにけり。その黄昏に。宿なるあるじい彼幸助が。阿彌陀の佛像に御あかしをまゐらをるとて。不

圖仰き見つるに。佛像のかけものおのづからにまろびおちて。横たいりければ。いぶかりながらいそぎあげ見るに。かけ物いなかば斫られて。佛の肩より血流れたり。こいいかにとばかりに驚き怪むこと限なし。さてあるべきにあらざれば。辭れる人々にもつげしらせて。うちかたらふに。おい幸助がうへに凶事ありけんを。御佛の示させ給ふならん。されはとて迎の人をつかいさんにも。さしてゆくへい定かならぬを。いかゞいせん。なほも利益をねがふこそよかめれとて。ちかきほとりにをる法師を招ぎて。阿彌陀經をよませなどをる程に。幸助かへり来にければ。人みなその無異を祝して。云々と告げ知らするに。幸助聞きて且おどろき。且たふとみて。感涙を拭ひあへず。けふ上野にてありつる事云々なりと。說き示せば。扨いこの御佛の身がいりに立ち給ひしなりとて。人々ゑじめて靈驗利益の合期あたるをさとりきとぞ

いぬる十月十一日。神田平永町なる本屋山崎平八。あいたゞしくわが隱居に来て。文化中やつがれが手代なりける清助といふもの。こたみ信濃より来にたるに。一奇談侍るなり。その故い云々なりとて。上にあるしゝ趣を物がたりして。けふなん彼御佛を。人々にをがませんとて。清助を招ぎよせたり。いざゆきて見給へといふ。おかれどもおのれいまこと

とも思いざりしかば。まづこゝろみに老婆と下女とを遣して見せ。次にはせがれをつかはしたるに。相違あらぎといへり。よりて最後にゆきて見たるに。畫像い處々の俗家にある卽行の佛像にて。三尊の彌陀なり。左右に觀音勢至下にい月海長者夫婦の侍るもの。こい善光寺にて三四十文に賣り與ふといふ。田舍表具のかけ物なり。さてよく見るに。むかひて右のかた。表具のてづれより紙護毫をかけて。阿彌陀の肩さきまでよく切るゝ刃ものもて切りたるごとくてすに切れて。佛の肩より血のしたゞりし事一寸弱。横三四分なるべし。おのれが見つるときい。てや十日むかり經たれば。その血にくろみあり。いかに見ても血しほに紛れなし。奇なりといふべし。件のかけ物い。幸助が裏に。善光寺にて三十六銅にて受けて。もて來ぬるものなれば。いと新らしく見えたり。幽冥の事い。得て論ぎべくもあらぬを。かゝる奇特あるをおもふに。これ孝感のいたるところ歟。この事。彼此に聞えしかば。日毎にもてあるきてをがまする程に。一日の賽錢三四貫文づゝあり。これによりて大坂若經のたやすく成就をべきいきほひなるに。なほ十卷二十卷の施主たらんといふものあまたあり。十一月に至りてい。いや三百卷あまり買ひ得たりといふ。かゝれば程なく全部すべし。彼幸助い今なほ江戸にあり。逗留春をむかふといふ。うたがふものあらば渠が旅宿にゆきて問ふべし

文政七年甲申十一月十五日燈下識

神田老逸　隱譽簑笠居士

幸助い。甲申の冬より旅宿を轉じて。神田鍛冶町繪の具あき人。大坂屋庄八といふものに寓居を。又てじめに大般若經券緣の事を發起せし。幸助が叔父を淨泉坊といふ原是久保寺村正覺院の沙彌なりしとぞ。正覺院の現住を廣湯といふなり

○神靈

輪池堂

いぬる朔日。耽奇會に行かんとせし折から。若狹國の妙玄寺の住持釋義門坊ひ來ぬ。折あしくて遲刻せしい。本意なしとこゝろせかるゝに。何くれとかたらふ内に。今日の料になるべきことを聞き得たれば。それにて思ひのどめぬ。そも〳〵淺草報恩寺。もとい下總國飯沼に在り。開基を性信上人と云ふ。常陸國鹿島郡の產にて。在俗の時い。與四郎と云ひ。又惡四郎といふ。十八歳になりし時。法然上人に謁して。佛教をきかんと請ふ。上人親鸞をして教化せしめられしかば。たちまち發心して。剃髮染衣の身となり。親鸞左遷の時も隨身して。北國に在り。廿五年が間。かたいらを去らぜ。歸路に及びて。鸞師の命をうけて。飯

沼にゆき。この寺を建立せり。そのとしの冬。老翁来て聞法隨喜して。我は是飯沼の天神なり。師の爲に永く擁護をべしとのたまひき。天福元年正月十日。天滿宮禰宜が夢枕にたゝせ給ひ。師恩の爲にみたらしの鯉をとりて。報恩寺に贈るべしと告げ給ふによりて。鯉二口をとりておくる。性信聖人これをうけて。鏡もちひ二を奉りしより。恒例となれるとい物にも見え。世人もしりたる事なり。然るに。飯沼よりこゝにおくること用途少からぬを。禰宜等評議してやめむ事をこかり。二年申しおくりけるは。年ごとに費用たゞならぬを。其寺よりも初穂として。こがねにて備へ給へといふ。寺僧のこたへに。この贄神託よりおこりぬればさらに私の事にあらず。用途給しがたくば。やむるも心に任せらるべしとなり。禰宜等謀りしことなれば。さらばやめんとてやめたり。そのとし祭禮の日に。大木折れてあやまちなど有り。池の鯉も絶えにたれば。是たゞ事にあらぬ。神怒のとがめなるべしとて。おとゝし文政七年より。又もとの如くおくる事になりぬ。神威のいちしるきことあふぐにあまりあり。ことし正月十七日に。その鯉を料理せしとて。拙僧もまねかれて。賞味せし時。住持の歌よめとこれしかばよめる

千代にこそたてまつらめと飯沼の神は契をたがへざりけり」となん有りける

◎賢女

天文方高橋作左衛門。その父作左衛門。もとは浪花の同心なりしが。天學に長ぜしかば。無ねて登用せられしなり。いまだ浪花に在りし時。庭に大なる柿の樹あり。秋ごとにその實をうりて。若干のこがねを得しとぞ。然るにその邊の若者ども。夜にまぎれてぬをむこと數しらぬ。よりてその守りにあるじいもやをからで。夜もすがら見めぐりなどす。ある時番より歸りて見れば。さばかりの大木を根ざしより伐りたふしてあり。こはいかなることぞとおどろきあはてければ。妻のいふやう。はらはがきらせぬるなりと。何故にさはせしぞと咎めければ。さん候。ぬしは天學にて。必。家をおこさせ給ふべきさきざし見え侍り。されば夜ごとに屋根にのぼり。霄漢をうかゞひ。深更に至り。そのうへにこの樹の爲に精神をつえやし給ふはびんなき事なり。此木あらぬば本業專一にてよかるべしとおもひ侍るによりて。かくはしてからひしといひけるとぞ。いにしへの何がしらが妻にもおとらぬ女をぞ思はるゝ。これ今の作左衛門が母なり。さるに夫のこゝにめされし比は。よみの國にまかりし後なりき。かなしともかなしき事ならずや

文政八年二月初八

○武州多摩郡貝取村にて古牌を掘出せし話　　妙問堂記

予が友なる沙門春登。ある時訪ひ来りて。ものがたらふことの次にいへるは。去りし文政六年癸未三月。余が隣村多摩郡貝取村の百姓。雨後に家居のうしろなる山に登りて。薪を採らんとする處に。いかゞはしけん。片あし土中におち入ること。その深さ二三尺ばかりなりければ。いとあやしみて。其所を穿ちくだること。大よそ五六尺ほどにして。一大穴あり。空洞縱横二間餘もあらんとおぼしく。その傍に小穴あり。亦六七尺ばかり。めぐりに小溝をかまへて。漏水を通はす備とせり。その造作する埋樋。みな石塔婆をもてつくりまうけ長三四間。その數凡四五十基。みなぬき出でたり。年歴を撿するに。弘安元年より文明九年に至る。今を距ること五百三十有餘年。ほかれども。金字の梵籌猶存せり。惜らくは缺損の者半に過ぎ。且文字磨滅。多くはよむべからず。その中全形のもの二基を摺打してかへる。實に當時の質朴を見るに足るものなり。思ふに。當時足利持氏。成氏等の爭戰止む時なき比なれば。此邊上州北越の官道にて。民家その亂妨をおそれ。資財雜具などをかくしし所ならんといへり

春登は和學を好み。萬葉用字格をあらそしたり

○隱語（かくしことば）

唐土に市語あり。委巷叢談に見えたり（おほ彼邦に隱語謎語等あれど。予が猶集に載せたれば。こゝにはあらざる）吾邦の工商おの〳〵その職業によりて。隱語あり。屋根屋にて熱き飯と。冷飯とをまじへしをふる板まぜといひ。縫てく屋にて。から汁にむきみを入れたるを雪に千鳥といへり。これに似て非なるものあり。忌詞といひ。謎語（ナゾ）といひ。方言（クニコトバ）といひ。記號といふ。是なり。今その一二をいたゞ。忌詞は延喜式に。神言の内外の七言を載せたれどいとふるし。今も雨をおさぐり。（滑稽雜談）寢るをいねつむ（世事談綜）といふは。正月の忌詞なり。謎語は。鑷子（ケヌキ）を南方といへば。不毛の意なり。（毛吹草）豆腐に紅葉を付くるはかうえうとのこゝろなり。（俚言集覽）方言は出羽にて。アヰベチヤ。コイチヤ。ゴサモセチヤといひ。大和にて。テイテイゴザレ。ゾウハツチヤカタツカ。ケンズイ。エソマツリといへる類にて。なほ詳には越谷吾山の物類稱呼に。諸國にいへるを載せたり。この因にいはゞ。都下にて無賴の徒の常言を目して。センホウと云。愚なるをこれと云ひ。錢なきをひつてんといへるなど。舉ぐるに遑あらず。これ一種の方言ともいひつべし。記號は荒もの（フナヅ）に大へ（ダイヤウロコツ）△（カボリリウ）×（シヤク）▽（スケ）▽（キツ）▽▽久。茶及び烟草店に。ノ（ノツレ）○レ（ハルヒ）丸（ホウキチ）⊖（ノマウス）吉目中これらの記號をもて。數目をしるす。此類藥種屋。紙屋にても異なり。俗に是を通りふてうと云ふ。商

この中ヤミを漏せり

家各々別ゴ記號あるをもてなり。大路を魚或ハ野菜など荷ひ鬻るものゝ云ふもの。一をソク。ヨロヅもいへり二をブリ。三をキリ。四をダリ。五をガレン。又めともいへり六をロンジ。七をサイナン。八をバンドウ。九をガケといひ。一緡(ヒヤク)を一萬石。二緡五十錢を奴ともいへり。さて商賈ハもと利をもて世ゴたる業とをるものなれば。さる隱語もいで来るハ。自らの勢ゴて。和漢ともゴ人情の常なりけり。僧徒ゴ隱語あるハ又ふるし。東坡志林ゴ。僧謂酒爲(ニ)緑若湯。魚爲(ニ)水梭花。雞爲(ニ)鑽籬菜。といへり。また一休てなしゴ。一休和尚の蛸をもとめられて。千手觀音蛸手多と云ふ頌を作られしも。その比の隱語なるべし。今も酒を唐茶といひ。蛸を天蓋といひ。妓童(カゲマ)を善男子。衣服のなきものを誕生佛ともいへり。去りし比。山岡明阿の話とてきけるハ。甲斐の身延山の僧徒の隱語ゴ。女の事を花といへり。ある時一寺の門前を。女の通りけるを。僧の見て「よき花のとほるハ」といへば。一人の僧「たてぬか」といふ。答へて「花瘢がない」といひけるとかや。花瘢とハ。金の事なりとぞ。かねなくてハ心ゴまかせぬといへることなるべし。また盗賊の隱語とて。ある人のかたれるハ。土藏(ダ)を蝦といひ。犬を姑といへり。たとへば某の所ゴよき蝦あり。見ずやといへば。一人の賊いへらく。おのれさいつ頃。ゆきてあたり見んとおもふゴ。おうとめのいとやかましういひければ。折ゴろしとおもひてやみぬなどいへるとぞ。これらハ作りまうけしものゴもやあらんかし。されど。これらの事あへてなき事ともいひがたし。物ゴ見えたるハ。臥雲日件錄ゴ。盗賊中有(ニ)隱語。曰(ニ)止湯。曰(ニ)合沐。曰(ニ)錢湯。錢湯者不(レ)論貴賤。各領(レ)所盗。曰(ニ)合沐者。諸賊等分(ニ)其財。曰(ニ)止湯者。不(レ)論(ニ)多少。所盗歸(レ)賊中首也とある。を見れば。その来れることも亦久しと云ふべし。また劇場ゴてハ。趣向を世界といひ。意地わろきを皮肉といふ。茶屋ゴてハ。物を小がひゴをるを久松といひ。鹽を行德といへり。また遊女の隱語あり。ぬしとハ客人を始め敬をる人をいふ。さとゝハやぼと同意。さてりとハ月の不淨を云ふ。今ハ大かた行水といふ。げびさうとハさもしき事。おかんとハ正月中の節の食ものなり。まがきとハ塵(まゝ)と落間のあひだゴ立格子戸の所をいふと。寫本洞房語園ゴ見えたり。武野俗談後篇ゴ。契情遊女ハ。その家々ゴて。かくし詞。相詞。又ハふてう辭などありて。昔より客の聞きしらぬことを。女郎同士ハ。いひさやぐことゴて。外へハ何といふこと。しれゴからぬやうゴすることなり。松葉屋ゴてハ。聊も鄙しきふてう辭をつかハぎして。瀬川が作意ゴて。源氏六十帖なりといふ。風流の事なり。今ゴかハらぎその通りなり。その一二をだゴをるも。てゝき木とハ。間夫を云ふふてうなり。ありとハ見えてあハぬ君かなといふ歌の心なり。かゞり火とハ。や

りてといふ事なり。心の火を燒きたり。消したり。ものおもふと云ふ心なるべし。蓬生とね。たむこの事なり。夕顔とね。うらゝ采る客の事。よりてこそそれかとも見め。たそがれゝほの〳〵見ゆる花の夕顔といふこゝろなるべし。朝顔とね。後の朝のこと。雲隱れとね。きれた客の事。唐衣とねきのしやの事。奚とね錢のことなりとあり。柳里恭の獨寢といふ隨筆ゝ。女郎仲間ゝて。こよひねよい客じや。あしき客じやなどいひて。物がたるゝ。唐音ゝて云ひたきものなり。といひしなり。長崎ゝてね。内ゝなしや。此ごろねこちのおもねくね。何してやら。をつきりおとづれさへなく。さりとね。權平ごんにやくゑんとがりじややらひやうあどないてなしゝて。をまして置けりとぞ。その次ゝ。皆さまがた。客の前ゝて用ひ給うて。よき唐音のかたてし記して。こゝゝおく。嫖子。けいせいのことなり。面的不好。これねきつゝ顔むせのゝるいとなり。看々。あれと見よといふこと。弁茶采。茶をもてこいと云ふこと。酒兒。酒の事。老臉皮。つらのかねの厚いこと。未曾去。まだかへらぬといふことなどゝるされし。また閨中の隱語ゝ。をしのふをま。羽をならぶる鳥。鶴のあさり。帆引ぶね。つながぬ舟。月ごもり。さやの中山。甲斐がね。碓氷の山越。よろぎの磯ぶりなどいへることのありとしもきゝたれど。そのよし辨ふべからぬ。詳なる事ねに有職者ゝ就きて問ふべし。此くだりね。戯れゝ同じ類ひを記しつけて。けふのまとゐゝ諸君の笑具ゝ充つと云ふ

文政八年乙酉春二月八日

好問堂記

蛇蟲圖　奥州南部領蒲野沢村　兵八

此首の長五寸位　此所ロニ有之哉　申三十九歳

郷八寸位

長サ三寸程　豆ノ廻り大指位

長サ五寸位　長サ一尺五六寸有之　未程細多蛇の如

色黒く腹うと色牛の膝を用ひ候　処右之通ニ可有之哉

皮厚キこと魚の塩引の皮よりあつく。とぐめやうやくさゝと

市兵八文政六未年二月此より相煩。同七申年五月十七日。晩より悉痛甚敷。六月二十日

朝右之通之異物相出候。尤五月六日狂氣のごとく相成候。後水七八升呑候由

別紙

一當夏蒲野澤村書面之者。長々相煩居候而。別紙の通り之者相出る。今腔と不宜。此比脇野澤元良抔之療治を請申度由る而。此元へ罷出候る付。承り候處。右様之物。いまだ左之臍より下る有之由。元ゝ左右る在し處。右ゝ下り候趣。其病へ鍼を四五本相立候へば。病人くるしみ。鍼拔候得者。病ひ脊中之方へ隱れ候由る御坐候。先生方へ爲相見御承り可被成候。又一つ珍敷事ゝ。三上左五兵衛殿覺居候。てうまん病る御坐候。當三月朔日より初ゝ風邪る而引籠。夫より次第る腹大く相成。辺り居候處。當八月十一日比より臍出。その様にて引出居。同月二十日七時。ほそ相破れ。濁酒色の水へくらげやうのもの加り。あるひゝ玉子のふゝ〳〵の様のものも加り。其日一升ほど。翌日三四升。翌々日二升ほど。追々出候處。既る八升餘九升ぢかり相出。右ゝその破れ候處。腔と直り不申居候。是又爲御知申候得ゝ。先生方へ被相咄御承り可然候

右奇病二條。乙酉正月二十八日友人堀尚平る得たり　　美成識

○好問質疑

宋之愚人得燕石。藏之以爲寶。周客聞而往觀掩口。笑曰。此燕石也。主人大怒藏之愈固

美成のつて此故事の來處を搜索をる。淵鑑類函る。荀子を引き。佩文齋韻府る韓非子を引けり。故る本書るつきて撿するる。二書とも載せぢ。また瑯琊代醉篇る。闕子といへるものを引きて證とすれども。闕子といふ書名。他書るも引用のものありやしらねど。四庫全書總目。又古今の叢書る名目だる見えざれば。其書いづれの世。誰の撰といふことさだかならぢ。また此故事をのせて。湘中記。書言故事を引くといへども。古書るあらざれば。證とする足らぢ。こゝる於いておもふる。隋珠和璧の如きゝ。古書る多く見えたり。此故事古書る見えざれゝ。疑らくゝ。後世類書ひとたび謬りてしるしたより。遂るその謬を襲ひ來りて。世人も亦みだりる。その書名るよるとのみおもひたれど。文心雕龍を閲をる。魏氏以夜光爲怪石。宋客以燕礫爲寶珠。おの二事を引きてもて喻とす。此書ゝ梁の劉勰が撰をる所なれば。その來れるも亦ふるしと云ふべし。魏氏が故事ゝ。尹文子るいでたり。されば此故事も梁よりあがれる世のものる載せたる事ゝ疑ふべからぢ。いまだ何れの書る出づといふ事をしらぢ

正月十四日。此兎園會をひらきし日。海棠庵るて曲亭子ものがたらふ事の次る。此故事

解。迫て按ずるに。燕石の故事は。燕石雜志の撰あり。おもふに。その来處を詳にし給ふべし。願くば示し給へといひしが。後廿二日書牘の返しに。山海經を鈔出して贈らる。實に忠告の志いとうれしうなん。されど宋人の寶とせる故事にはあらぬ。おのれ委しくも物がたらぬ。勞し奉るの本意なさに。今おもふよしを右にしるし侍る

徹書記のころは。ことの外亂世なりしに。たはふれに歌をよみ給ひしより。さをらひ給ふとなり。その歌に

なか〳〵に見ぬもろこしの鳥はいてじ桐の葉落せ秋の夜の月

此うたの心は。いまの世の政事あしきにより。世がみだれし禁裡にう系置く桐は。鳳凰の来儀をまたん爲なるに。このやうなるまつりごとにては。鳳凰の来るねんはなし。桐の葉を打ちおとして。秋のよの月をさはりなくながめたるがよし。見ぬもろこしの鳥は鳳凰なり。此歌の底意は。君をそしれる歌なるにより。さそらひしとなり。去る程に。書記の謫處へ歌友達見まひけるに。七月十四日の歌とて。かたり給ひしうた

なか〳〵になきたまならばふる郷にかへらんものをけふの夕くれ

この歌の心は。命あるがつれなし。死にたらば。しやうりやうになりて。この夕にはかへ

るべきものをと。ふる里を戀ひしく思ひつる心ざし。いとあはれふかし。扨この歌。禁裏へきこえしかば。あはれに思しめして。めしかへされけりとなり

美成按ずるに。この故事人々常にいひ傳へ。日本古今人物史にも。徹書記傳に。曾以一首諷詠。而左遷洛外山科之地。又因一首之愁吟。而逢歸洛之喜といへるも。この歌の事なるべし。

なか〳〵の歌をさしていへるなり。又和歌詞徳抄にも見えたり。草根集には此歌見えず。出處を考ふるに。百物語月苅藻集などに載せたれど。この書の時代をおもふに。百物語に。烟草の禁ぜられしを。このころのやうに書きたれば。元和の撰といふべし。月苅藻集のてしめに。于時寛永庚寅春書之。佚本寛永午春とありとしるしたれば。寛永の比の記とおもはれたり。再びおもふに。百物語は。やゝふるしといへども。俗書なり。月苅藻集は。世人曾てあるべきものにあらず。いづれも来處は定めがたし。又賸草に。この事を載せて。「四の海をさまりがたきあるしにや。雲の上までのぼる白波 招月内裏へ盗人の入りたる時よめり。この類にて左遷せらる「なか〳〵になき身なりせば。ふるさとへ。かへらんものをけふの夕くれ。流罪の内に。孟蘭盆によめり。厳聞ありてあるれに思し召し召し歸さるとあるは。異なる傳にて。

初め罪を得し歌かいり。次のなか〳〵との歌も異同あり。此書をあらいしたる佐野紹益い。本門彌光悦が智にて。縉紳家へもまゐりしものなれば。傳へ来れるものありしや。これにてい世にいへる。なか〳〵の歌にて罪を得。なか〳〵の歌にて召しのへさるといへるにあたず

解。追記。近世の歌に紅楓の字をつかふい。近世の歌に。もみぢを紅葉とかくに倣ひしおり。然れども萬葉集にい。紅葉と書きたるものおく。ふるくい黄葉と書けり。

附けて云。采處誤まれるもの世に多かり。烏鵲橋の事。淮南子に出づとし。池魚の災といふ事。風俗通にありと記したれど。いづれも本書にい見えず。又世にあまねく用ひ来りて。本據なき文字あり。佛典毎に紫雲の字見ゆれど。大藏五千巻。如来金口の說。嘗いいざる所。大人常に紅楓の字をつかふといへど。本唐三百年。名家詩聖の集。此字あることなし。おもふに。初學前人の誤を襲ひ。是等の事ゆるかせにすべからず。古人の文をかける一字といへども。采處なきものあらず。讀書看破萬巻。下筆如有神。けだし虛語にあらず。予生来問ふ事を好むにより て。好問をもて堂に扁す。おかれども。あへて大舜の德を慕ふにいあらねど。切に問ひ近く思ふい。學者の急にまる所ならずや。故に一疑を得るごとに。これを人に質し。其得るにあたりてい。手の舞。あしの踏をおらず。猶その本據を得ざるもの大約一百條。題して好問質疑とす。明の陸儼山が傳疑錄。吾邦の貝原益軒の大疑錄に似るべうもあらねど。おるして。博洽の君子に問いんとす。おかれどもいまだ稿を脫ることを得ず。今こゝにその一隅をあぐるのみ

文政八年乙酉春二月八日

山崎美成識于好問堂北窓之下

○まみ穴。まみといふけだものゝ和名考。并にねこま。

著作堂主人稿

いたち和名考。奇病附錄

江戸麻布長坂のほとりなるまみ穴い。いと名たゝる地名なれば。おらざるものなし。沾凉が江戸砂子にい。貍狸穴と書きたり。貍狸をマミと訓ずるい。何に憑れるにや。おらず。これ記者のあて字なるべけれど。論ずべくもあらねど。貝原が大和本草にい。（巻の十六獸の部）貒をマミとも。篤信が云。マミ。タヌキとも云ふ。野猪に似て小なり。形肥えて脂多く。味よくして野猪の如し。肉やいらかなり。穴居を。其四足の指五つ。恰人手指。獵師穴をふもべて捕之。行くことおそし。獾い貒の類なり。狗に似たり。並に穴居をといへり。又本草綱目（巻五十二獸之二）獾の下に。稻若水。和名を剛入してマミとす。李時珍云。貒豬也。獾狗獾也。二種相似而略殊。狗獾似小狗而肥。尖喙矮足。短尾深毛。褐色。皮可爲裘領といへり。かゝれども和名をマミといふけだものいなし。益軒若水の兩老翁。或い貒をマミと訓じ。或い獾をマミと讀ませし

は。訛をもて訛を傳ふ。世俗の稱呼に從ふのみ。今按ずるに。獾は和名鈔に見えず。猯は和名ミなり。和名鈔（巻十毛群部）猯の下に。引唐韻云。猯（音端。又音旦。和名美）似豕而肥者也。本草云。一名獾猯（歡兎二音）といへり。只野必大が本朝食鑑にのみ和名鈔を引きて猯をミと讀めり。必大云。猯頭類狸。狀似小狍。體肥行遲。短足短尾。尖喙褐色。常穴居。時出竊瓜菓而食。本邦處々山野有之。人多不食。憔言能治水病。予嘗略見狀。然未試之。則難辨爾。（巻之十一。獸畜部。狸の附錄に見えたり）といへり。これらの諸說を合はせ考ふるに。近來世俗のマミといふけだものは。ミを訛れるに似たり。則猯なり。又田舍兒（井ナカウド）は是をミタヌキといふ。その面の狸に似たればなり。いづれにまれミとのみは唱へがたきにより。或はマミといひ。或はミタヌキといふにやあらむ。かゝれば麻布長坂なるマミ穴も。むかし猯の棲みたる餘波（ナゴリ）にてその穴のありしにより。マミ穴と唱へ來れるなりといとぞいふべし。ゐかれども。猯をミタヌキと云ひ。よりて來るあり。いかにとなれば。貉はその頭狸に似たり。ミとのみは唱の不便なるによりて。ミタヌキといふ歟。又猯をマミといへるは。よりどころなし。いかにとなれば。猯に真偽のふたつなければなり。よりて再按ずるに。かの麻布なるまみ穴のマミは。元采貉の事にはあらで。鼯鼠をいふなるべし。鼯鼠は和名モミ。一名はむさゝびなり。和名鈔鼯鼠の下に。引本草云。鼯鼠（上音吾。和名毛美。俗云無佐々比。又刀追反。一名鼯鼠。上音刀水反。）

從下而上。常食火烟。聲如小兒者也。かゝれば鼯鼠の和名は。毛美なれども。いとぶるくよりむさゝびとのみ唱へたるにや。歌にもモミとはよまず。萬葉集第三に。むさゝびは水をゐもとむとあり。引の。山のさつをにあひにけるかも」といふ歌あるを見ても知るべし。しかれども。古言は多く田舍に遺るものなれば。むかし關東にては。鼯鼠ををき〳〵モミとのみいひしなるべし。その證は。今も日光山のほとりにては。鼯鼠の老大なるものを。モモンクワアといへり。モモンは。モミの訛なり。クワアはそが鳴く聲なるべし。又高老の義にてもあらん。物の老大なるを高老を歷たりといふ是なり。さてこのもみを。下野にてはもゞあと唱へ。又武藏にてはまみといへるなるべし。（モとマと音通へり）かくて昔麻布長坂のほとりには。人家もあらで樹立隙なく。晝もいと闇かりけるころは。鼯鼠などの多く栖むべき所なり。故にモミ穴の名は遺れるにや。今も小兒を攤（ナド）すに。もんぐにあといふ。鼯鼠の狀は。いとおそるべきものなればなり。マミ穴の名の高かりけるも。（今はこの穴もなし）これらをもておもふべし。縱その處に鼯鼠の棲みたる事はあらずとも。いとおそるべき穴なりければ。モミ穴といひけんか。（今もおそるべきものを。もんくわあといふが如し）さるを後の人は。モをマにかよはして。まみ穴と

唱へしい。是亦魔魅ゴもかよひて。おそるべきの義なり。且モミをマミといふよしい。今俗ののほきりをのこざり。わたゝびをまたゝびといふたぐひなるべし。しかるゴ。本草者流い。その物をこそよく辨ぜれ。多くい古言ゴ疎く。和名ゴくいしからねば。貓又獾をマミと訓ぜしのみ。そを當れりとをべからぎ。俗ゴいふマミい。鼯鼠の事なるを。遂ゴいよ〳〵訛りて。貓の事とを。かゝれば麻布なるまみあなを。真名ゴい鼯鼠穴と書くべし。江戸の地名を誌しゝものゴ。かむかりの考だもなきい。もとも遺憾の事ゴあらぎや

附けていふ。安永七年の夏。信濃なる善光寺の阿彌陀如来四向院ゴて。をがまれ給ひしとき。兩國橋の東のつめゴて。千年もぐらといふ物を見せたり。もぐらいウクコモチの訛りて。鼯鼠の事なり。おのれ尚總角のころなりければ。親しく目擊したりけるゴ。その形い小狗ゴ類して。毛い短く。薄黒ゴ褐色を帶びたり。喙尖りて狸の如く。四足い鼯鼠ゴ類して。人の手の指ゴ似たり。その物鐵の條もて繫がれたるが。いと疲勞たるやうゴて。頭だも得擡げぎ。築山の如くゴ積みたりける砂の上ゴ卧したり。その折い。何とも思ひゴかざりしを。後ゴ思へばそい鼯鼠ゴいあらぎ。まことい猪獾ゴして。貓なること疑なし。見せ物師などいふものい。只あやしう珍らかなるを旨とをなるゴ。貓といふともマミといふとも。大かたの江戸人い聞きしらぬものなれば。鼯鼠の千載を歴たるなりとて。欺きたるなり。當時の巷談ゴ。こい本郷なる麹屋の空室より。夜な〳〵出でゝ。食を竊みしを。生捕りたるなりといへり。虚實いさだかならねども。空室の内なればとて。市中ゴ栖むべきものゴあらず。おもふゴ。好事のものゝ畜ひけん貓の放たれしより。麹屋の空室のかたゴ穴して。久しく棲みたるものゴやあらん。遥ゴ過ぎ采しかたをおもへば。こもてや四十八年のむかし語ゴなりけるなり

再いふ。松蘿館のつくしだちも程遠からねば。この小集をなごりとす。こいいとゞあかぬこゝちをなれば。又一二條を附録とを。そいねこまいたちの和名考。奇病の評等。即是なり

猫い和名鈔毛群部ゴ。和名禰古萬なり。しかるゴ中葉より下略して。禰古といへり。枕草紙第九の段ようへゴさふらふおんねこい。云々といひ。又源平盛衰記義仲跋扈の段ゴ。猫間中納言の猫ゴ。間の字を添へたり。こい猫一字ゴていねこと讀む故ゴ。猫間と書きたるなり。これふるくよりねこまといいを。ねことのみ唱へ来れる證なり。しかれども。彼を呼ぶときい。上略して

こまゝ〳〵といふ事。枕草紙（これも翁丸の段）に見えて。今も亦しかなり。いづれまれ略辭なれば。物まねねこまと書くこそよけれ。契沖雜記に。猫はねこま。鼠子待（コマト）の略歟。鼠の類につらねこといふあれば。ねこといふは略語の中に。ことゝり背くべし。猫の性は鼠にても。鳥にても。よくうかゞひて必とり得んと思はねばとらぬものなり。よりて待とつけたる歟といへり。その書の頭書に。真淵云。ねこはたゞ賭獸（クヒケモノ）の略なるべし。けものゝけの字反。コなり。ある人苗の字につきて。なづけしもの歟といへるはゝろしといへり。解。按ぞるに。兩說共にことわりしかるべくもおぼえぞ。鼠子待に求め過ぎたる憶說なれば。今さら論ふべくもあらぜ。ねむりけものゝ義といへるも。いかにぞやおぼゆ。大凡。賭を好むけものは。猫にのみ限らぜ。狸貉。鼬の類。みなよく賭るものなり。わきて陽賭をたぬきねむりと唱へて。ねふりの猫よりたぬきむしなのかたに名高し。是この和名に。ねもじをかけて唱へざりしをもて。ねこまのねも。けむりけものゝ義にあらざるを知るべし。さば狸貉の類は。真の賭りにあらぜ。そらねむりなれば。ねといはぞといはん歟。猫とても熟賭は稀にて。多くはそらねむりなり。かれがいざときをもて知るべし。且けものゝけの字反。コなりとのみいひて下のマの字を解かざるはいかにぞや。前輩千慮の一失歟。いと信じがたき說なり。按ぞるに。猫をねこまと名つけしは。さるよしにあらぜかし。猫はねう〳〵と鳴くけものなれば。ねこまと名づけたり。（猫のねう〳〵とおくよしは翁丸の段に見えたり）是もこまのコはケと五音通へり。マはモと是も音かよへり。コマはケモにて。けものゝノを略したり。是ねう〳〵と鳴くけものといふ義にて。ねこまといへり。（今も小兒は。猫をよやあ〳〵といふ。その義自然とかゝるへり）かゝればねことのみいへば子けなりとこまとのみいへばケもなり。（の字を略せり）いづれも略語の中にことわり背くといふべからぜ。然れども。ねこまといふはまことなし。又鼠の類なるつらねこのねこは。ねこまのねことおなじかるべくもあらぜ。これよく考へて追ひもとめるべし。又。鄙言は猫の老大なるものを。ねこまたといへり。この事つれ〴〵に見えたり。又くだりて貞享中の印本。猫又つくしといふ繪草紙あり。又今川本領猫胼胝數といふふるき淨瑠璃本もあり。このねこまたは。九太にたなどの如く。ねこまたを添へて唱ふるはあらで。猫岐（マタ）の義なるべし。猫の老大は至りて。變化自在なるときは。尾のさきは岐いて來てふたつに裂くることありといへば。老大はて岐尾なるものを。ねこまたといふ歟。こはまたくさとび言なり。又按ぞるは。猫は猫は作るを正しとす。埤雅は。陸佃云。鼠善害苗。猫能捕鼠。故字从苗といへり。ねこまをなへけものゝ義といへるは。これより出でたり。すべて字體によりて。和名をと

くものゝ附會なり。信ぜるゝ足らぜ

猶よりも。猶よく鼠を捕ふるものゝ鼬なり。その字鼠ゝ從ひ。由ゝ從ふ。按ぜるゝ。鼠ゝ從ふよしゝ。形狀をもてゝ。由ゝ從ふよしゝ。由ゝ讀みて猶豫の猶の如し。鼬もその性疑ふものゝて。人を見れば走りつゝ。しむ〳〵見かへるものなり。よりて由ゝ從ふなるべし。譬へば狐の字の瓜ゝ從ふが如し。瓜ゝ讀みて孤獨の孤の如し。狐ゝ群居せざるものなり。よりてその字瓜ゝ從ふ瓜ゝ即弧なり

又按ぜるゝ。いたちゝ和名鈔毛群部ゝ。爾雅集註を引く。鼬鼠上音酉狀云々。今江東呼爲鼬音生和名以太知。揚氏漢語抄云。鼠狼也といへり。いたちの釋名ゝ。白石の東雅。契沖雜記ゝも見えぜ。按ぜるゝ。いたちの言ゝきたちなり。又火たちゝもかよふべし。イとキとヒと連聲なればなり。さて鼬をいたちと名つくるよしゝ。此けもの。夜ゝ樹ゝのぼり。或ゝむらがりて。氣を吹くときゝ。火氣天ゝ冲ることあり。俗ゝこれを火柱といふ。この故ゝいたちと名つく。即氣立也。又火起也。鼬の火ぢしらの事。本草綱目ゝ載せぜ。李時珍ゝ知らざりし歟。漏しゝ歟。大和本草ゝゝ。この事あり。鼬の怪ゝ。これらゝをぎぜ。彼が羣居せし事ゝ。平家物語ゝ見えたり。さばれさせる怪ゝゝあらぜ。しかるゝ近ごろ異聞あり。そゝいたちゝゝ

あらじとおもへど。ちなみゝ附錄することと左の如し

文政四年辛巳の夏。江戸牛込袋町代地なる町人友次郎が妹。名ゝ梅十四歳奇病あり。このとし五月神田佐久間町の名主源太郎が。この事を官府へ新へ奉りしうたへぶみの寫を見たり。今その實を傳へん爲ゝ。俗文のまゝ謄錄ぜ。かゝる事ゝ。風聞聆とて。その事實なれば。向寄の肝煎名主より。町奉行所へうたへまうす事なりとぞ。是もそのひとつなるべし

牛込袋町代地金次郎店

友次郎妹

む　め　　巳十四歳

右友次郎儀者。當巳十七歳罷成り。時之物商賣致候者ゝ而。店借り名前ゝゝ御坐候得共。内實九歳之節より。奉公致し居。母祖母妹むめ三人暮しゝて。平生洗濯物等致し。聊之賃錢を取り。漸取續罷在候ものゝ御坐候處。去辰八月中むめ義。下谷小島町藥種屋ゝ而。松屋次助と申者。無而懇意ゝいたし。無人之由申候間。右之者方え預け置候處。次助義同十月新右衛門町へ引越し。むめ義も連參候處。一體むめ義。持病ゝ癪有之候處。新右衛門町ゝ引越候後

も。何となく氣分惡敷罷成り。入湯致し候節。手足其外處々腫色付候義抔も有之。奇病之樣子ゝ而。次助義樂種渡世致候事故。樂用も致し遣し候得共。同樣ゝ候間。去辰十二月中。宿元引取候處。其砌眼并ゝ足膝等蒲候義も兩度有之而已ゝ而。追日全快致候ゝ付。先月晦日神田お玉池御用達町人川村久七と申者方え。奉公ゝ指出し候處。兩三日過候得ゝ。亦又氣分惡敷罷成り。食事も致無候樣子ゝ付。暇取。當月九日九時過引取分抱致候處。身内處々頻ゝ蒲候旨申し。甚苦み候間。蒲候處捺り遣し候得共。乳之下皮肉之間ゝ針有之。皮を貫き先出候ゝ付。爪ゝ而引拔遣し候得共。猶又同樣襟より（襟ハ猶頂といふがごとし）壹本膝より貳本。小用之節陰門より三本。九日十日兩日ゝ出。何れも錆無之。絹縫針ゝ有之。右之趣外科ゝも爲見候得共。場處惡敷候故。療治致し無候段申し候間。致方なく其儘差置候得共。いまだ水落之邊ゝ（水落ハ猶尾といふがごとし）針四五本殘り居候樣子ゝ而。同廿三日朝同所より長さ二寸餘も有之候。氷綿仕付針一本錆候儘ゝ而。出候段むめ并ゝ同人母さん申し候間。右ゝ付何そ當り候儀も無之候哉ゝ承糺候得共。むめ儀小島町ゝ罷在候節。次助宅座敷并ゝ二階等え小便致し候樣子ゝ而。壁より床迄通し濡有之候儀度々御坐候ゝ付。若もむめゝ無之哉と。疑心を請候儀も有之。但又新右衛門町え引越候後。夜分むめ臥居候側を。鼬駈あるき。又ハ同人蒲團之下え這入。夥敷小便致候儀。毎度之樣ゝ相成り。追々氣分惡敷罷成り候段申し候。全く狐狸之所爲ゝも可有之哉。專奇病之趣。此節近邊取沙汰仕候ゝ付。取調此段申上候

右最寄組合肝煎

神田佐久間町

名主　源太郎

かくておなじ年の六月廿七日。小濱の醫官杉田玄白。ゝが庵ゝ來訪して。鼬の妖怪狐狸ゝ ひとしきなる事ありやと問ハれしゝ。予答へて云。鼬の怪ハ平家物語ゝ。治承四年五月十二日午の刻ばかりゝ。鳥羽殿ゝいたちおびたゞしく走りさゝぎしかば法皇やがて近江守なるかね（時ゝ獄人）をもて安倍泰親ゝうらなハせたまひしゝ。泰親すなハち今三日が中ゝ。御よろこび并ゝ御なげきあらんとうらなひ申しけるゝ。たしてその事おハしましゝよし見えたり。この他。狐狸ゝひとしき怪談ハ。和漢ゝ所見なしといひしゝ。玄白をなハち前件を擧げて。先月既ゝこれらの事あり。いかゞ思ひ給ふゝやと。又問ハれしゝ。予答へて。こハその鼬と思ひしも。鼬ゝハあらぜして。尾さき狐の所爲歟といひしを。なほこゝろ得ざりけん。尾さき狐ハいかなるものぞと請ひ問ハれしゝ。ふたゝび答へて。尾さき狐ハ。

上毛。下毛に多かり。戸田川をさかひとして。江戸には絶えて入らぬとなん。その狀鼬に似て狐よりちひさし。尾はきはめてふとかるに。尾さき裂けて岐あれば。尾さきの名さへ負はせしならん。上毛。下毛のみに限らず。むさしといふとも。北のかたには此けもの稀にあり。ともをれば人の家につくことありといふ。そが一たびつきたる家は貧しかりしもゆたかになりぬ。しかれども。多くはその身一期のほど。或はその子の時に至りて。衰へ果てぬといふことなし。そが既に憑たる家の。年々ゆたかになるまゝに。狐の種類も次第に殖えて。むれつどふこと限なし。もしその家のむすめなるもの。他村へよめりする事あれば。尾さき狐も相ともかれて。壻の家につくといふ。こゝをもて人忌嫌せざるものなく。寇を防くが如しとなん。近ごろ伊豆の三島のほとりにて。尾さきさつねをつかふものあり。この事江戸に聞えしかば。有司うけ給はりて。彼地に赴き。狐つかひを捕めて。やがて將て參る程に。川崎の泊りまでの。夜毎に鼬のあまた鳴さしこと夜もすから絶えざりしに。六郷川を渡りては。さる事もなかりしとぞ。これらを合せ考ふるに。件の少女梅が奇病も。鼬にはあらぬにして。尾さき狐の所爲なるべし。しかれども。かの狐は戸田川をさかひとして。江戸へは絶えてより來ぬといふ。げにさる事もあるべきにや。彼三島なる狐つかひも。川崎の宿までは。猶その狐のつきそひ來けんを。六合川をさかひとして。江戸へは終に得入らぬなるべし。いとものかしこき御勝もとのおほんいきほひにそあなれ。かゝれば件のあやしき病を。尾さき狐のまさなりとさだかにいふべきよしもなけれど。又かの狐をつかへるものゝ他郷より來ぬる事亦これなしとすべからぬ。さても此尾さき狐は唐土にもあるものならん。その漢名をしらまくほしとて。としころふみどもあさるものから。未だ見る所もあらず。和君は二世の蘭學者なり。醫名などをも考へてしらせ給へといひし事あり。例の蛇足の辯ながら。ありつるまゝにしるせるのみ

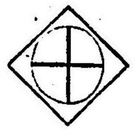
解再識

文寶亭

乙酉如月初八

○駿河町越後屋替紋合印の事

桃灯などに此ありしあり。これは江戸四里四方丸で十分に商ひをするといふ表るしなり



芝口松坂屋も。三井の持にて同店なり。暖簾につくる松の表るし。葉形かくのごとくなるは。三井といふ文字なりといへり

解。按。坤輿圖說。韃靼附錄。瑪作鞠條下亞。逆西舊曰。有二女國一。曰二亞瑪作鞠一最驍勇。諸戰皆破二名都一。國俗惟春月容男子一。至二生レ其地一。生レ子。男孱般也。今又爲二他國一所レ併。今村名所レ詑。生所レ生亞瑪作鞠女國事蓋據レ之也。著作堂追記

此ゑるしい。表方立番などの者の半臂などへ付くるゑるしなり。○二つい二ヨ○いまいり〈い人といふ字ヨて。庭まいりの人といふ合じるしなりと。三井本店ヨつとめ居たる。兵七といふものゝ話なり。されども。此◎印い。長崎西築町乙名荒木宗太郎といひしもの。元和八壬戌年。御朱印頂戴し。異國渡海の船を。金札船と稱したるよし。その船のゑるしヨ此印あり。されば三井ヨて い。後ヨ考へて付けたるものなるべし

○銀河織女ヨ似たる事

南亞米利加のうちヨ。「アマソウチン」といふ所あり。此所の山ヨ女むかりをみて。一年ヨ一度河を渡りて男ヨ逢ふといふ。その河の名を蠻語ヨてい。「リヨデラタラタ」といひ。紅毛語ヨてい。「シリフルリヒール」といふ「シルフル」い銀なり「リヒール」い河なり。もろこし人のいひ傳へし銀河織女の事などい。かゝる事を聞き傳へたるヨや。その山の邊ヨ。男つねヨかよへば。竹鎗ヨてふせざて入れぞといふなれば。阿蘭陀通事今村金兵衛話なりと。蜀山翁申されき

○元文五年の暦のはし書

世俗一晝夜と云ふい。明け六時を一日の初とし。次の明六時迄を終とを。月食をしるをこともの俗間ヨしたがひ。右之通用ひ来れり。然れ共。元より子丑寅卯の四時い。次の日の處分なる故ヨ。今より後此四時ヨい。翌の字を附けて。是を知らしむ。并ヨ二十四節土用も。皆右のごとし。自今已後此例ヨしたがふなり。重ねて斷ぞるヨおよぶぞ

澁川六藏源則休
猪飼豊次郎源又一　謹誌

右三ヶ條

乙酉二月初八　文寶堂

此古暦い。元飯田町釘屋權兵衛所持を

海棠庵識

○兎園會第二集小話

一日細下總國藤代村ヨて。八歳の女子が子をうみし事い。あまねく世の人のゑるところヨいあれど。年經なば疑惑もおこらんかし。よりてことふりヨたれど。余が藩より公ヨ告げし口達一通を。兎園の集ヨ加へて。實事を永く傳へんとおもふのみ

文化九年壬申十月十日。御勘定奉行柳生主膳正様へ口達

土屋治三郎使者

大村市之允

拙者在所。下總國相馬郡藤代村百姓三吉尼害忠藏娘とゞと申當申八歳罷成候者。去月十一日曉出産之處。男子致出生候段屆出候ゝ付。年頃不相當之儀ゝ御座候間。見分之者差遣。樣子相糺候處。同人儀。文化二丑年五月十一日。致出生四歳之頃より。經水之廻り有之候得共。全病氣と心得罷在候。然所去秋の頃より。腹滿之氣味有之。醫師へ爲見候處。出氣ゝて也可有之哉ゝ申聞。服藥灸治等無油斷相用候得共。相替候儀無御座。當春ゝ相成。彌致腹滿候ゝ付。種々致療治候得共。同篇ゝて。猶又醫師ゝも相尋候處。病氣ゝ相違い有之間敷候得共。萬一懷胎ゝても可有之哉。容體難決段申聞候。其後近比ゝ相成。乳も色付。不一通樣子ゝ付。彌懷胎ゝ相違も有之間敷段。醫師申聞候間。右之致用意等罷在候處。去月二日夜中より出氣付。翌三日曉平産。母子共丈夫ゝて。乳汁も澤山ゝ有之由。且又とゞ儀い年頃より大柄ゝ相見え候。出生之小兒い。並々之小兒より産髮黑長き方ゝ有之。其外い相替候儀無御座候由申聞候。依之當人い勿論。兩親初三吉家内之者。其外村役人組合之者へも。委敷相尋候處。幼少之儀。是い如何と心付候儀も無御坐候。尤疑敷風聞等も一向及承不申候段。一同申聞。口書印形差出申候段。在所役人共より申越候ゝ付。此段以使者申述候

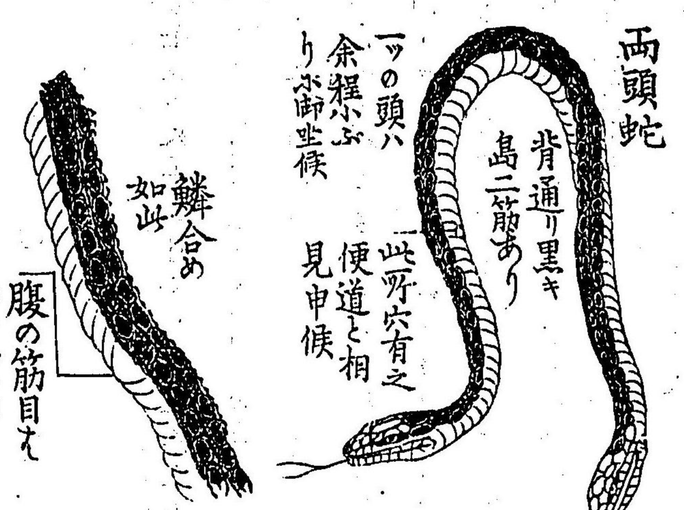
○兩頭蛇

深川六間堀町清兵衛店

源兵衛召仕

卯之助

當申文政七年十一月廿四日夕七時頃。本所竪川通り町方掛り渡場所より。右卯之助土船乘人足ゝ罷出候處。一の橋より二十町程東之方川内ゝて。土渡上げ候節。鋤簾え掛り長さ三尺程有之候。兩頭之蛇を引掛申候。名主町役人立合見分之上。筒井伊賀守殿え申立差出申候



右者數原清庵病用ゝて。本所竪川肝煎名主關岡長兵衛方え見舞蛇一覽書寫

海棠庵

右二ケ條

乙酉仲春端八

予が藏弆せるこの壹貳の合巻一冊。いぬる壬辰の冬十二月より。今年癸巳の春夏の間ゝや。紛失したり。さりとゝ思ひかけぎして。ふ月なかむゝ所要ありて。とりいださんとしつる折。あらぎなりしゝ心づきて。家の内いへむさらなり。猶あちこちとあさりしかども。終ゝ是あることなし。予ゝ書を愛をること大かたならねば。貸進の折などゝゝ。そを心ゑるしつけて等閑ゝせざりしゝ。此ひとまきのうせたるゝ。あやしきまでゝおもふものから。せんをべもなかりしを。いぬるとし。默老翁ゝ。この書をかして。かしこゝて寫しとゞめられしかば。そを又こゝへ備へんとて謄寫すること四日むかり。やゝ足らざるを補ひ得たり。時ゝ

天保四年秋七月二十八日

著作堂主人識

再云。この一二の巻のうせしを。甲午の春ゆくりなく見いざしたれど。前本いと。宜しかい寫しらざるもあれば。これをもて正本とせ。この書者。知音の者。一両人の外ゝ見ることをゆるさじ。まいて謄写をゆるしゝ。只二度のみおりき

○五馬　三馬　二馬

著作堂稿

陸奥の伊達郡箱崎の農民傳兵衛が子ゝ。松五郎と呼ばれしものゝ。その性馬を好むゝより。栗毛の馬を一疋もてり。さればをり〳〵乘り走らするゝ。その秣飼ふことも。又撫で洗ひする事も。よろづ人ゝゝ任せずして。手づからするをたのしと思へり。その馬。既ゝ五歳ゝなりける文政二年巳の卯の冬のころ。松五郎ゝ病みゝづらひて。その年の十二月十二日ゝ身まがりぬ。享年二十なりけるとぞ。さゝ獨子の事ゝしあなれば。親のなげきゝいふべくもあらぬを。貧しくもあらぬ民なれば。松五郎が器用調度のめでたしと思ひしものゝ。その亡骸（ナキカラ）ともろ共ゝ。みな只棺ゝ斂めつゝ。家を去ること二三町なる田の畔の墓所ゝ送りて。かたのごとくゝ葬りけり。（田舍も亡者を寺ゝ送らじ。その所持の田の畔を墓所として葬むること。此わたりゝ限らじ。開果大かたいかくのごとし）されば松五郎が遺愛の馬ゝ。ぬしの不幸の事ゝ紛れて。誰とて見かへるものもなく。纔ゝ秣を與ふるのみ。廐ゝ繫ぎ置きたりしゝ。その次の夜の子の時ばかりゝ。馬ゝゝゝかゝ狂ひたけりて。絆（ホダシ）をちぎり。戸を蹴たなちて。いづことゝなく馳せ出でたり。あるじゝさらなり。僕共もこの物音ゝ驚き覺めて。こゝいかゝまさしく。馬こそとなれたれ。とく追ひとめよと罵り騷くゝ。真夜中の月鮮やかなれば。松明を把るまでもなく。棗を腰ゝし。棒を引き提げて。お

のもく追ふ程に。馬にゝやくも松五郎が墓所のほとりに馳せゆきて。其處につどひし癖者等を駈けたふし蹄(フミ)にしる勢ひ特に猛くして。當るべくもあらざりけん。矢庭に四五人蹴仆されて。あばしに起も得ざりし折。傳兵衛が奴僕等に推しつゞきて。追ひかけ來て此ありさまに又おどろきて。あたりを見るに。松五郎があら墓を發(アバカ)れたり。扨にしやつらが所爲にこそ。みな逃をなと罵りて。ひとりも漏さじ生捕りけり。其時主傳兵衛もやゝ走り來て。驚嘆しつゝ。まづ癖者等を責め問ふに。つゝみ果つべくもあらざれば。なき人の棺の中にに。物あまた入れられしといふ風聞に。惡心おこりて。是彼示し合せつゝ。竊に墓を發く折。この馬忽走り來て。某等を蹄み仆したり。筋骨痛みて。阿容(オメ)々々と搦め捕てれたりければ。後悔その甲斐なけれども。命ぞかりに助け給へと異口同音に乞ひけり。傳兵衛これをうち聞きて。この馬に乞が子の恩を感じて。その別れを悲みけん。かの日よりして。そかく敷秣だも食ざりき。それだに奇特の事なるに。その身に厩に繫がれながら。今宵この盜人等がわが子の墓を發(アバク)るを。よく知りたるに。奇といふべし。もしこの馬のなかりせば。誰か又我子の爲にこの辱めを雪むべき。能くこそしたれと。馬を碁めて感涙を拭ひつゝ。猶つら〳〵思ふやう。翌この事の趣を領主に聆へまうしなば。怨をかへすに似たれども。今この五人の惡者等に。鄰村の百姓にて。面を識れるものどもなるに。墓の土こそ堀りおこされたれ。いまだ棺に發くに至ず。よしなき罪を造らんより。我子の菩提の爲にもとて。その非を謎めて向後をいましめ。そのまゝ放ちかへせりとぞ。されば又松前の老君に。殊さら馬を好み給ふに。これらの由を傳へ聞きて。我其馬を得まくほりを。縱ひ他領の百姓なりとも。價に論ぜず買ひとれとて。築川にをる家臣等に下知せられたりければ。家臣何がしうけ給はりて。箱崎に赴きつゝ。云々とかたらふに。傳兵衛つや〳〵諾(ウベ)なはず。千々のこがねを賜はるとも。この馬のみてまゐらせがたしと。言葉をてなち推辭(イナミ)まうして。其子の在りし時にかはらず寵愛しつと聞えたり。抑この一奇譚に。箱崎のほとりなる鐵醫正宅といふもの。松前家の太夫の子。蠣崎生守(三七)に消息して。云々と告げにければ。江戸の邸にもむやく聞えて。老君にもまろし召され。次の年の睦月の末に。その臣長尾友藏(後に名を改め)て。所左衛門といふを以て。解に告げさせ給ひしかば。雜記中に書きつけおきしを。今又こゝに抄錄せり。おもふに。此松五郎が遺愛の馬に。かの宋の周密が齊東野語(巻七)に載せたりし。畢再遇が遺愛の名馬。黑丈蹄にも一しほ優りて。多く得がたき美譚といてん歟。よに人の臣僕たる者。忠臣節義の心薄くば。かの馬にだも恥ぢざらんや。この一條に勸懲の端なるべけれ

ば。てじめゝ出だしつ（右五馬之一）

こゝ又其次の年。おなじ州おなじ郡。築川の近村なる貧民の駄馬一疋をもてる有り。（その人の名を）かくてあら田をかへを日も。この馬をもて賃けとし。又耕作のいとまある日ゝ。薪を負（わもれたり）ゝせ旅客を乘せて。駄賃をとること大かたならぬゝ。その馬素より柔順ゝて。主のこゝろゝ隨ひければ。世ゝ亦二なきものゝ思ひて。とし來（ゴロ）を歴る程ゝ。その年の（文政三年）の夏の頃。ある日又物を負ゝして近郷ゝ赴きつ。足を樸てかへるさゝ。家路も近くなりし時。その馬忽くるしげゝ一聲高く嘶きしを。見のへらんとまるほどしもあらず。馬ゝてやくも走りかゝりて。その肩さきゝくらひ着きけり。こゝそもいかゝと驚き叫びて。牽き放さんとて（弃）すまひしかば。ひとへ衣もろ共ゝ赤ゝむらを啖ひとられけり。さむれ赤ばしゝ苦痛を忍びて。とり鎮めんとしつれども。かなふべくもあらざれば。林の中ゝ逃げ走りしを。馬ゝ透さぎ追ひかけ來て。仰（ノケ）さまゝ噬ひ倒し。又胸さきゝくらひ着きて。頻ゝその血を吸ふ程ゝ。ぬしてゝ忽息絶えけり。折から旅ゆく獨の武夫（足輕體のものありしといふ）その有さまを見てければ。林の中ゝゝけ入りて。絆（ホダシ）のてしを取りあげつゝ。牽きてなさんとしたれども。馬ゝそが儘ちつとも動かぎ。眼中血ばしり人を射て。鬼燈（カヤツ）の如く赤かりける氣色。寔ゝをさまじきを。もてゝゆかんてさをがゝて。その刀をもて韁ながら馬の尻を擊つ程ゝ。終ゝゝ韁をうち摧きて。赤たゝかゝ砕りてけり。さられてすこし怯（ヒル）みし馬を。やうやくゝ牽のけて。絆を取りつめ。樹の幹ゝ繋き留めんとする程ゝ。あたりをよぎる里人等追々ゝ來ゝければ。件の武夫ゝ初より見しありさまを告げしらせて。馬を里人ゝゝたしつゝ。林を出でゝゆきゝけり。後ゝ聞くゝこの武夫ゝ。二本松の藩中ゝて。何がしといふものなりとぞ。さる程ゝ。農夫の子ゝ里人等がしらせゝよりて。あゝてまどひて走り來つ。領主ゝ訟へ。撿使を請うて。親の亡骸を葬むるものゝら。猶そのうらみのやるかたなさゝ。馬ゝ則その處ゝ生ながらゝこれを埋めて。竹鎗をもて思ひのまゝゝ刺殺（クヤ）したりといふ。こゝ當時松前家の領分の事なりければ。老君の興聽ゝ物がたらせ給ひしを。おのれも傳へ聞きしかど。書きしるさんともせざりしゝば。今ゝその農夫の名も村の名も。みな忘れたり。こゝ文政二年三年と打ち續きたる事ゝして。おなじ郡の百姓の貧富。おの〳〵異なれども。等しく愛せし馬なるゝ。松五郎が遺愛の馬ゝ。古主の爲ゝ賊を禦ぎて。鄕ゝ忠義の譽を得たり。又この農夫が愛せし馬ゝ。故なく主を啖ひ殺して。五逆ゝ漏れぬ罪を醸せり。おもふゝこの件の馬ゝ。その途中よりゆくりなく。疫熱の疾をうけて狂亂したるものなるべし。人ゝも亦かゝる事あり。

牛馬ニのみ限るニあらねど。畜生ハ猶測りがたかり。されば牛馬猢猻をもて。世をヲたるもの多かれども。やすきニ馴れて用心ニ懈り。動をれば。その害ニあふものも亦をくなからむ。それ身の爲ニハ。この一條を警とをべきのみ（右五馬之二）

又一奇談あり。武藏國入間郡河越の城下なる石原の里人ニ。增田半藏と云ふものあり。其性俠氣あるものなれば。人の爲ニハ骨を折りて。たからをも惜しとせぬ。されば親ニ愛を失ひし不肖の子。良人ニ飽かれて去られし妻。或ハヲかうどの物あらがひしたる。或ハ男女の痴情ニよりて。相携へて奔りし類も。たのむと云へば身ニ引きうけて。必。和睦をとり結ばせて。その本ニをさむるを。よニおもしろき事ニ思へり。去かるニ文政四年辛巳の春。ある夜あやしき夢を見たり。そハ一疋の良馬忽然と半藏が枕ニ立ちて。さながら人のもの云ふ如く。いとうれハしげニ告げていふやう。それがし初ハ何がし侯の乘馬ニて候ひしを。後故ありて馬商人の何がしニ買ひとられ。遂ニ又賣りかへられて。果ハ農家の駄馬となれり。この故ニ。水田を鋤きてハ。泥ニ塗れ。糞土を負ふてハ穢ニ犯さる。百折千磨の艱苦ニよりて。いく程もなく斃れたる。ヲが亡骸ハ榎の木野ニ擡き出だして棄てられたり。かくて屠兒ニ皮を剝かれ。鳶鴉ニ宍を啖ハれて。只よのつねなる駄馬ニひとしき死ざまをしつる事。耻かしく且歎くニもあまりあり。願ふハ和君愍みて。我がなきがらを埋め給へ。我身ニハよき玉あり。そハなき骸の背築のあたり隆き所ニあらんぞらん。聊これを報とす。探りとり給へかしと云ふかと思へば覺ニけり。半藏驚きあやしみて。半信半疑しながらも。天明てその野ニゆきて見るニ。果して馬の屍有り。いハれしあたりを搔き撈るニ。既ニして玉を獲たり。其大さ毬の如し。則これ鮮答なり。俗ニハへいさらむさらといふ歟。西域の人。尤至寶とを。密呪して雨を禱るもの是のみ。半藏既ニ玉を獲て。里人ニよしを告げ。その馬の亡骸を葬らんとて議をる程ニ。近郷の民傳へ聞きて。力を戮せ錢を集め。遂ニ石原の町觀音寺ニ葬りて。上ニ建つるニ碑をもてし。稱へて馬頭觀世音といふ。碑銘ハ則同郷の士。小島氏蕉園の創をる所。今錄をる事左の如し

馬靈誌并銘

天地之大。庶物之夥。有足稱怪者。聖人特不語耳。不可謂無也。河肥石原里。有增田半藏夢一良馬來謂曰。我本侯家乘馬。得寵久矣。後有故獲於商人家。又轉賣農家。耕田駄糞。體羸力竭無幾而斃。棄之榎野。獸工剝皮烏鳶啄肉竟莫異於凡馬之死也。願子垂憐瘞之。我有良玉。在吾屍中背隆然處。聊以報子。寤而異焉往視果有馬屍。獲玉大如毬。所謂鴆答也。乃謀所以葬

之近里傳聞。捐資戮力。葬諸里中觀音寺。建碑其上。稱以馬頭觀音云。聞半藏性任俠。好趨人急。意駿馬之靈。知之來訖也。可不謂怪乎。余因其請略記來由。係以銘。銘曰

生一獲龍　可謂遇伯樂之知　死祀以佛　鹽車之因彼一時

小島蕉園記

文政辛巳年春三月

辛巳の夏六月二十七日。予この寫本を獲て聞くこと上ゴしるすがごとし。傳寫の誤多かりしを。意をもて僅ゴ是を補ひ。點を加へて語勢もたをく。文ハ雄固ゴ似ざれども。その事ハこれ實なるべし（右五馬之三）

又一奇事あり。文政五年壬午の春三月二十一日。品川大木戸の西のかた。高輪の初めの町の海邊ゴて。荷を負ハせたりける馬を。杭ゴ繫き置きたりしゴ。空車を推をものゝ走りて。其處をよぎりしかば。この馬いたく駭きて。飛あがり〳〵兩三度狂ふ程ゴ。ゆくりなく杭の頭ゴ馬の腹を衝きあてたり。其勢ひやゝとげしかりけん。忽。腹を突き破りて。背までぞ拔けたりける。馬ハ頻ゴ苦みて。いよ〳〵狂ひ駭く程ゴ。終ゴハ杭を推し折りけり。その時馬奴走り來て。杭を拔かんと立ちよりしを。なまじひゴ馬ゴ蹴られて。阿と叫けびつゝ仆れたり。見る人あわてまどふのみ。おそれて近かづくものもなし。とかくをる程ゴ。馬ハやうやく狂ひつかれて。そが儘ゴ死ゴき。馬奴ハなほ半死半生なりけるを。その町より驕ゴ乘せて。宿所へ送り遣しけり。こハ目黒のほとりより。牽きもて來つる馬なりとぞ。予が相識れる豪家の老僕。この日高輪なる薩摩侯の屋舗へまゐるをり。親しく目擊したりとて。おなじ月の廿六日ゴ。予が爲ゴいへり。これも怪有なる事ゴあらぢや（右五馬之四）

又一奇事あり。松前の藩中ゴて去かるべき輩ハ。馬一二疋をもたぬハなし。去かるゴともそれば。夜中ゴ熊の廐ゴ入りて。馬を啖ふことあり。殊ゴをぐれし大熊ハ。まづその馬をくらひ殺して。おのが脊ゴ引きかけつゝ。走りて山ゴもてゆくとぞ。これゴよりおのも〳〵廐の戸鎖（トサン）を固くして。その害を防くこと夜盗を禦くゴ異ならねども。これらハ常の事なれば。彼地の人ハ。何ともおもハぢ。それゴもましてめづらかなりしハ。文政五年壬午の春のころ。松前の家臣何がしが（その姓名をわすれたり）廐の馬。ある夜頻りゴ狂ひ駭きて。いと苦しげゴ嘶きたり。あるじハこれゴ驚き寐めて。廐ゴ熊や入りゴけん。みなとく起きよと呼び覺して。下部ゴ紙燭をとらせつゝ。出でゝ。廐ゴゆきて見るゴ。戸ざしハ元のまゝゴして。物の入りたるやうゴもあらぢや。戸を推しひらきて内を見るゴ。目ゴさへぎるものもなし。されども馬ハ苦しげゴ嘶くことてじめの如し。こゝろ得がたく思ひしかば。紙燭を高くあげさせ

て。猶あちこちをつら〳〵見るに。あやしむべし。ひとつの鼬馬の頂にうちのぼりて。その鼠を咬ひ破りつゝ。血を吸ふてぞをれりける。さてゝ彼奴かゞなりけり。要こそあれと持ちたる棒を取りなほさんとをる程に。鼬ゝてやく飛び下りて。袂の下を潜ると見えしが。ゆくへもしらぬなりにけり。げに繋がれたる馬のうなぢを。鼬に咬ゝれてゝ。せん方なきもことゞりなり。そのきずゝいと深くて。拳も入るべきばかりなるを。酒にて洗ひ藥を傳へてとり〳〵をれども。久しく愈えぬ。凡二ケ月あまりにしてやうやくおこたり果てしかど。その處にのみ鼠なくて。疵物にこそなりにたれ。鼬の馬を咬ひし事ゝ。松前にてもめづらしとて。人みな舌を巻きしとぞ。この一條ゝ蠣崎生（守は三七）その年。文月の初めつかた。我庵を訪ゝれし日云々と話せられたり。おのれ是を打ち聞きておもふに。天智の帝の御宇。高倉の御時に。鼠が馬の尾に憑（ツキ）て。巣をくひけるゝ事ゝふりにたり。新奇に走る今の世にゝ。鼬が鼠に代ゝるべく。亦その尾にゝつかぬして。鼠をこそくひつらめと。あからさまに答へしかば。蠣崎生ゝ手をうちならして。ほと〳〵笑評に入りにけり（右五馬之五）

をべてこの五馬の奇談ゝ。いぬる文政二年より五年までの事にして。予が聞く所かくの如し。されば宇宙の廣大なる。かゝる事ゝいくらもあらん。よりて竊に評をらく。かの箱崎なる農家の馬ゝ。神にして且義烈なるもの。又築川の近村なる農夫の飼へるゝ惡馬なり。これらゝ上に論じたり。河越なるゝ靈馬にして。高輪なるゝ狂馬なり。又松前の家臣の馬ゝ。是を痴馬ともいふべし。しかれども。身を絆綵に繋がれてゝ。虎狼なりともいかゞゝせん。譬へゝ人の利祿に繋がれ。或ゝ妻子に繋がれつゝ。愛惜嗜慾ゝ鼬の如し。これを火宅の煩惱といふ。かゝれば人の賢。不肖。禍福。得失。寵辱。榮枯皆この五馬の中にあり。莊氏が一馬禪家の十牛及劉安が塞馬の音も。よにこの外ゝあらぜかし

附けていふ。文政五年壬午の春閏正月十六日。戲作者式亭三馬死ぬ。享年四十七歳なり。

三馬ゝ江戸の人。名ゝ太助。板木師前池茂兵衛が子なり（馬馬も江戸の人。名ゝ和助。むかしめゝ大工なり。後に商人となりて。尼姿を剃けり）同年の夏六月二日。烏亭馬馬死ぬ。享年八十歳（烏馬。富本豊前太夫が能名なり。その實名を千之助といへり。よりてその親しきものゝ。渠を千どのみ呼びしとぞ）同年月日。錦馬死ぬ。享年七十餘歳なるべし。（錦馬ゝ。富本豊前太夫が能名なり。その實名を千之助といへり。よりてその親しきものゝ。渠を千どのみ呼びしとぞ）

識者戲れにいへることあり。今茲ゝ支干壬午に當れり。壬ゝ水なり。逝きてかへらぬ象あり。この春三馬が死せしより。馬馬。錦馬も亦死せり。かくて三馬の名の數の空しからぬも奇なりとぞ。ある人これを予に報て。和君も用心を給へかしといれしに。予答へて。いなその數にゝ入るまじ。錦馬ゝ素より識る人ならぜ。馬馬。三馬等とゝこのとし来絶えて親

しく交らず。忌嫌ふること聞えしよ。いかでかゝ伴ふべき。且その子さゝ似たれ共。行ひざまの異なるを。閻王ゝよく志ろしめしけん。かゝれば。氣づかひあるべからぞとうち戚れたりければ。ある人いたく笑ひよけり。これらゝ要なき事ながら。そぞろゝ筆の走れば

なん（右三馬）

かさねていふ。松前の老侯の。をさ〳〵馬を好み給へば。乘りくらのかへなども。大かたならぞと聞えたり。さればよや寛政中鍾愛の駿馬あり。老侯みづからこれゝ名つけて。一瞬といふ。蓋一瞬ゝ瞬目の間ゝ走ること。いくばく里ゝか及ぶの義なるべし。この馬ゝ前薩摩侯（中將重豪公）より贈られし。その封内なる喜入野の牧より出でしものなりとぞ。かくて享和元年の夏。一瞬病みて死せり。實ゝ五月九日なり。老侯則その尾をもつて拂子とし。又その鬣を駒籠なる吉祥禪寺ゝ送りて葬らしめ。その上ゝ碑を建つるゝ及びて。碑文を山本北山子ゝ徵し給ひき。かの寺の學察のうしろなる。一瞬冢是のみ。江戸ゝて駿馬の碑を見ること。いとめづらかゝ覺ゆれば。錄すこと左の如し

駿馬一瞬碑文

良馬世多有。然傳馬者無幾何也。非遇良主知其能。不得奮其力而盡其用。主亦或有爲之府。楚項烏騅依悲歌。享和元年五月初九。松前老侯愛馬一瞬。病死于厩櫪。侯雅善騎。無駿稱意。聞薩摩國出良馬。求之薩摩重豪公。辭云。吾不敢欲若少年輩所愛。鬃毛如油。髀項如腴。步驟協聲律。馳驅合曲度。唯神速若掣電流星。則足矣。至旋毛吉凶。尾鬣蹄密。毛色騮黃皆非所拘論云。公壯之。贈封内喜入野所出駿馬。一瞬是也。亡論眼如鈴。蹄如鐵。形色大小。不更細說。人望知其爲神駿。自薩摩至江戸。路程數千里。跋渉艱岨。力不少罷。蹄不少損。精神自若。無異常日。於是乎侯喜可知也。試其能。縈紅練於尾後。驅而奔之一匹練長引不墜。如紅虹經天。脚下颼颯。只聞風聲。瞬目間盡調馬上力猶有餘也。侯鍾愛之。朝夕撫養以爲樂。及其死。不能割愛。乃取其鬣。瘞于江戸駒込吉祥寺後山。取其尾爲拂子。朝夕手執之。寓愛惜之意。又欲求北山信有辭。以傳于後。嗟呼一瞬。遇良主。幸也夫

享和元年辛酉夏五月

北山信有撰

文化の末ゝやありけん。老侯ある日。興繼ゝ告げてのたまはく。我最ゝゝ只馬ゝ乘るゆゑをのみ知りて。馬を養ふみちを知らぞ。さるゝより彼一瞬ゝ乘る毎ゝ。色衣なんどを引かするゝ。その絹の地ゝ着かで。いと長くひるがへるを興あることゝ思ひしゝ。甚しき誤を

りき。若しさる事をせざりせば。彼馬をば殺すまじきよ。今よ至りて三折の效を悟るも甲斐なしとて。いとをしみ給ひきとぞ。此ごろ使者をもて予よ馬尾の拂子を見せさせて。いまだこの拂子の箱書つけなし。何とかかゝすべきと問ハせ給ひしかば。驥拂とやあるべき。孟反拂などもしかるべからん歟と。答へまうしき（右二馬之一）

文政元年戊寅の冬のころ。老侯又駿馬を求め得て。錦帆と名付け給ふ。則撫養の方を替へて。其厩よ屋根を葺かゞ。又板をしも敷くこともなく。只その牧よありけん如く。馬のまよ〳〵せられたり。かくて二年の春二月。錦帆馬を試みよとて。長臣蠣崎氏（左兵衛廣見。俗よあらためて采女といふ）を乘せて。鑣倉よ遣し給ふよ。其月の十四日十五日の兩日よ。往返既よ兩度よ及べり。こゝ未曾有の事なれば。老侯特よ歡びのあまり。解よ其記を求め給ひき。おのれハよきて漢文をようせず。能文の儒者おほかるよこの義ハゆるし給へかしと。頻よ推辭（イナミ）まうしゝかども。あだし人よハ望みなし。とよもかくよも綴りてよとのたまハするよ。免れがたくて。俄よ創してまゐらせたり。然るよきのふゆくりなく。その草稿を探り出だしつ。いとをこがましきよざながら。錄して數よ充つるのみ

駿馬錦颯記

松前老侯使者謂予曰。吾老君性愛馬。頃購得良馬。因徵叟其記。是以傳命。予謹對曰。昔者秦少游序八駿。杜甫贊韓幹馬。八駿韓幹即畫馬也。若李伯樂相馬經及劉禹錫說驥。雖云生馬。而非爲一馬爲之者。解之寡聞。加之昧于馭法。何以能之。然懇命不可得而辭。敢問。老侯之愛馬。爲武備乎。爲畋獵乎。又唯爲衣以文繡置以華蓋。席以露牀。啗以粟晡。以倣楚莊之擇乎。天下不憂無千里之駒。千里之駒。獨苦於不遇伯樂。貴使所謂良馬者何也。曰四蹄疾如飛禽乎。曰三紫鞏如貞松乎。逸態稜々爲虎文者乎。駿骨超然擬神龍者乎。嘗所牽於大宛乎。抑所出自月支乎。願聞其詳矣。使者莞爾笑曰。僕也。以叟爲通達洒落之士。不憶言之悖于此。夫善騎者。知驥而取之。猶明君知賢而用之。安侯伯樂。然後求良馬之爲哉。齊景公馬有千駟。而孔子譏之。楚莊王。馬以士禮。而優孟諫之。吾老君亦以爲話柄。大約馬之用。在載而馳。奔蹄速爲良。遲爲蹇。蹇驢股駕無用。是以人々却之。良馬武事有用。是故人々求之。雖則求之。然良馬難致。非良馬之難致。知之難也。骨法卓然。未足以爲良。毛色鮮明。未足以爲良。飾以錦繡。置以銀鞍。非所以愛馬。加之以衡扼。齊之以月題。非所以養馬。吾老君毫無取馬。唯考其臧否。而擇馬養馬。廐櫪中如收馬一般。蓋隨馬性也。是以馬力壯勇。驁馳如意。褊藩嘗有駿馬一騂。得之薩摩侯封内喜入野。至享和元年五月九日斃。老君乃請山本北山。

識其顛末。一瞬冢記是已。今之所獲。不讓於一瞬。名曰錦騮。是馬出於下總州葛飾郡小金原中野。其園人吉野嘉橋養之七八年矣。奔蹄神速。不與群馬俱。村翁牧童。曾稱龍種。吾老君聞而徵之。其牽來之日。初見之。全身薄黄。即騙馬也。其高勝常馬四寸。年紀八歲于此。左右稱良。老君欲試之。即命家臣蠣崎廣晃。遠到于鐮倉。時二月十四日。廣晃跨錦騮馬。曉天寅三點出邸。辰牌辰鼓過六分到鐮倉。謁鶴岡神廟。是日申牌申正鼓遷邸。明曉十五日寅一點廣晃鞭錦騮馬。從赴鐮倉。巳牌巳鼓過八分謁鶴岡神廟。進退如昨。社人安田進吾。謂廣晃曰。江府騎馬之士。終往返一日。而詣本宮者。爲不尠矣。其名簿歷々在於此。然同人同馬。而連日造於此者。未之有也。宜錄竹帛以藏神庫。屢歎賞不已。明日神主大伴氏。與二廣晃書一以慶賀焉是夕戌二點廣晃還邸。邸在江戸下谷三絃整上。至相摸州鐮倉郡鶴岡八幡宮。坂東道一百里又二町。天朝之制。端二里數一以二町段一。六十間爲二一町一。一町即三十六丈也。昔者關東。六町爲二一里一。謂二之坂東道一。今則三十六町爲二一里一。坂東道一百里又二町者。今之十六里又二十六町也。下谷三絃整。至二日本橋一三十町。日本橋至二品川驛一二里。品川至二河崎驛一三里四町。此間有二餘戸二十六町一。加以爲二云云一。河崎至二程谷一一里九町。程谷至二戸塚驛一二里。戸塚至二鎌倉一四里六町。土俗私以二五十町一爲二一里一者往々有レ之。謂二之田舍道一。戸塚至二鎌倉一。亦復如レ此。因以爲二三里一。其實則四里六町也。三絃整至二鎌倉鶴岡社頭一一十六里又二十六町。即坂東道一百里又二町也。兩日路程。無慮四百里而有餘也。以二今之里數一。即六十六里三十二町而錦騮馬。四蹄無一蹶。廣晃亦不敢曰勞。其詣旦使於簽輪鄉某侯。亭午返命。進退自若。僕所聞見。類如此。敢請。叟文之則足也夫。予聞之。復膝交進。不覺爽跏之潰。喟然嘆曰。善哉老侯之愛馬也。能養士。然後養馬。是以其食足矣。其食足。則其材美矣。非獨其馬有千里之蹄而已。其家臣亦有千里之能。可謂士馬之養得其方矣。因語使者曰。解先人。亦有馬癖。嘗善一條馭法。解也不幸。髫歲喪親。犬馬之齡。五十有三。不知鞭靮爲何等之物。雖徇才愧驥德。將始自隗。冀稱先人之遺志。使者欣然竟去矣。明日乃綴是記。未遑易稿。使者再來。誅求甚急。纔補誤脫以呈焉

文政二年己卯春三月

飯台瀧澤解撰

この記文の事。その年の春三月十六日ゴ。老侯の使者長尾友纖来訪して。命を傳ふるゴより。同月十八日ゴ創しつゝ。廿日ゴこれをまゐらせゴき。駿馬の名ゴもめゝ錦帆と書かれしを。予がこの記を綴るゴ及びて。帆を騮ゴ作れり。使者この義を詰りしかば。予答へて騮ゝ帆と通ふ義あり。且字書ゴ。水行曰帆。陸行曰騮とも候。駿馬の爲ゴゝ。舟帆の帆たらんより。その字馬ゴ從ゝんこそ。勝れたれと覺え候ゝ。いかゞ侍るべからんといひしを。使者やがて歸りまゐりて。云々と申しゝかば。老侯領き給ひしとぞ。かくて次の年ゴやありけん。聊所要の事ありて。書肆より淵鑑類函兩三帙を借りよせつ。是彼と披閲せしそが中ゴ。第四百三十三卷獸の部。馬の三ゴ。古今註を載せて。曹真有駿馬。名驚帆。といふよし見たり。かゝれば唐山ゴて。魏の時ゴやく馬の名ゴ帆をもてしつることゝありけり。これゴより

駿音俊即駿也

ば。錦飄もてじめのごとく。舟帆の帆ゝ作るもよしなきゝあらむ。拙文のうちこの故事を引きもらしたりしのみ。今しも堪へぬうらみゝぞありける（右二馬之二）

右五馬。三馬。二馬の拙編おもひしよりは。ことの多くて。紙の數はかさなりぬ。世ゝいふ下手の長談義なるべし

著作堂解識

好問堂稿

文政八年乙酉春三月朔

○於竹大日如来縁起の辨

安永六年丁酉七月江戸ゝて。於竹大日如来の開帳あり（此より先ゝも開帳ありやあらむ）その縁起ゝ云ふ

抑。當山の靈像於竹大日如来の權輿を尋ぬるゝ。文祿年中の頃。武江佐久間何某召し仕ふところの婢女ゝ。たけといふあり。深く三寶ゝ皈依し。雜染浮花世間の樂しみをよしと願はむ。たゞ白淨信心ゝして。常ゝ慎むところを見るゝ。日々三時おのが喫飡（シヨクサン）する分量の飯食をとゝめて。困餓窮飢の者ゝ施し。朝暮烹炊ゝつき。自ら流れすたる所の粒飯（ノコリガシ）をおそれうやまひ。厨下流盤（ダイドコロナガシ）のをゝゝ茶袋を羅布（アミジキ）て。是ゝ止まる。淡薄の麁食を嘗めて自活の料とし。專ら卑下柔順ゝして。慈悲曾て怠るとなし。その頃同國北企郡ゝ。湯殿嶺上戒行堅固の聖あり。正身の大日如来を拜せんことを願ひ。此山ゝあゆみをてこぶこと年あり。ある夜の夢ゝ。汝生身の如来を拜せんとならば。武江佐久間氏何某の下女を拜せよとて夢覺めぬ。斯の如きの異夢三度ゝ及びければ。疑ふことなく武城都下ゝ尋ね来り。夢の告なるよしを語り。佐久間主人ゝ物して。ひそかゝ竹女が面容を拜すれば。光明燦然として。十方をてらし。尊貌紫磨の金身なりければ。主客ともゝ驚嘆不思議の感涙ゝ咽び。禮拜恭敬して。大悲難思の應用。末世の奇瑞心肝ゝ徹して。ふかく渴仰の思をなせり。不思議なるかな。如来は隨處應度の悲願ゝ酬いて。難化利益の機關を上人及び勘解由ゝ見あらはされてや。咫尺の間。竹女が容。消然として去るところをゝらむ。人々驚愕し。悲慕搜索れども跡を認むべきなし。常ゝ起臥せし小房をひらき見れば。只靈香馥郁と薫じ。光明まさゝ眼裏ゝあるごときのみ。宜哉。舉家只聚頭傷々とし。如来お竹年ごろ馴親し。離情の切なるゝ叫び。佛陀善巧の恩德ゝなくのみなり。此ゝ於て勘解由若干の貲財を擲ち。ありし面貌を尊像ゝ彫刻し。羽州。湯。月。羽黑三山靈場の麓ゝ奉納し。永く靈像の檀那となり。黄金堂ゝ安置し奉る所なり。星霜いまだ遠からむ。此こと人口ゝ膾炙して。世人おのづからお竹大日如来と稱しならはせり。下略 出羽國羽黑山麓別當玄良坊

世にありとある神社佛刹の緣起といふものは。妄誕ならざるはいと稀なり。此に載する緣起を。かゝるを實にありと思ひて疑はざるものあらんは。愚に近しとこそいひつべけれどあながちに無しとせんも。又誣ゆるに似たり。こゝに於て。今この緣起を左に辨ぜん

文祿年中の比。武江佐久間何某召仕ふところの婢女に竹といふあり

玉滴隱見に云。江戸大傳馬町の名主の佐久間善八といひける者の召仕なる竹と云ひける下女。去年三月廿一日に死したり。此竹こと主の善八は。問屋にて有りければ。大勢の者の食餌にかゝづらひけれども。聊も穀三寶を麁抹にせぎして。非人を憐み。其雜火の餘を以て。牛馬を飼ひ抔して。一生を送りしが。死して其儘羽州湯殿山麓に。金色の光り一度の内にあらはして。竹は中尊裳婆にて。主なりし佐久間夫婦は兩脇立と成りて。今に有りと云々。此こと彼御山の佐藤宮内と云ふ。神人語之。また淺草新寺町獅子吼山善德寺に。如意輪觀音の石塔あり。性岸妙智信女。延寶八庚申天五月十九日と彫刻したり。是お竹が墓なりと云ふ。此二條を併せ案ぎるに。玉滴隱見何れの年。誰の撰と云ふこと詳ならねど。その書を閲するに。寛文ごろの事。いと多く見えたれば。そのころのものとしらる。扨墓碑の延寶とあるに合へり。されどその月日の違へるを思ふに。墓碑の正しきは論ぜべくもあらぬ。書に記したるは。遠く出羽の人の傳聞なれば。もとより聊の違ひはあるべきことなり。されば元祿とあもいはんは。さることなれども。文祿とそるはいと謬なり。再びおもふに。かゝることといと近き世のことは憚りなきにあらぬ。その比。忌むところありて。しか記したるもしるべからざれば。強ひて咎むべきにあらずかし。（此墓碑の事。温故名跡志。淺草志等には漏らしたりき）

湯殿嶺上戒行堅固の聖あり。正身の大日如來を拜せんことを願ひ云々

此一條は。書寫上人の生身の普賢を見奉るべきよしを祈請し給ひ。夢の告ありて。神崎の遊女を尋ね給ひし事（詳見二古事談僧行篇一）を附會したるものと思はる

（書寫上人とのみ云てはいと詳ならぬ。書寫山の性空とあるべし。これ童蒙にいふのみ）

○勘解由に見あらはされ

佐久間氏は勘解由にあらぎ。玉滴隱見に。善八と見えたり

事跡合考を案ぎるに。佐久間平八といふものは。元祿後斷絶とぞ。菩提所增上寺中心光院佐久間下女のながし板ありと見ゆ。佐久間氏の名。孰れか是なるをしらぎ。けだし合考の方實に近からん

あかはあれど。勘解由と記したるは。新著聞集に。佐久間勘解由と誤りしによりしものなるべし

竹女が容。消然として去るところをしらぎ

是また妄誕なること辨をまたぎしてしるものから。佛家ゴにかゝる奇瑞をいふこと常なり。愚俗にあざむくべし。敢て識者を誣ゆべけんや。已ゴにあるしたるがごとく。今墓碑現ゴ存せり。且玉滴隱見ゴ。死をあるし。新著聞集ゴ。精進ゴして大往生をとげしと見えたるを併せおもふべし

勘解由若干の貲財を拋ち。ありし面貌を尊像ゴ彫刻し。羽州。湯。月。羽黑三山靈場の麓ゴ奉納し

玉滴隱見ゴ。湯殿山麓ゴ金色の光を顯したるよし見え。新著聞集ゴ。近所のもの湯殿山ゴ詣うで竹ゴあひたりといへるを謬り傳へしものならんか。於竹がこと右二書より外ゴ。詳ゴ且誕ぎべきものなし。されば。これをおきてもとづくべきなく。その他にみな妄誕なると論をまたぎ

此會かねてけふをしもおのれが宅ゴと約したるゴ。上巳のまへにことしげゝれば とて。節過ぎて後こそよからめと。かたりあひしゴ。思にぎも曲亭子ゴ促され。著作堂ゴ集ふことゴなりければ。何をかしるさんと。枕をゴるの思ひなりしが。過し比。小梅村の南無佛庵をとぶらひける道のほどゴて。このお竹がことをかたり出てたるゴ。来れる月の兎園會ゴものせよとありけるを。思ひ出でゝそのよしを記して。小說の料ゴ充つと云ふ

文政八年乙酉春三月朔

文寶亭錄

○あやしき少女の事

新看町嘉兵衛店大工傳吉儀。先月廿五日朝五時比七歲ゴ罷成候娘。かめと申す者を連れ。弓町大助店忍冬湯と申す藥湯渡世致し候。榮吉方へ入湯ゴ罷越候處。十一二歲位ゴ相見え候女子。髮ゆひ候者右女子同樣ゴ入湯いたし居。右かめと友達の樣ゴ心やすく咄などいたし。傳吉歸り候節。娘かめゴによきものを遣し可申間。殘し置候樣申候ゴ付。何の心も不附殘し置。傳吉罷歸り申候處。あぢらく過ぎて右之女子かめを連れ。傳吉宅へ參り。なれ〳〵敷いたし。右かめの髮などゆひ遣し。菓子抔遣し候ゴ付。住所相尋候得に。右之忍冬湯向米屋の娘之由申聞。夫より直ゴかめをつれ。木挽町芝居へ參り。歸りゴ同人伯父のよし同所二丁目邊裏屋へ立いり。かめへ古き丹後島の帶壹筋。木綿島子供前垂壹つ。黑縮緬おこそ頭巾壹。右三品を呉れ。相歸し申候。又候翌朝德利へ酒壹合程入持參。母より遣候趣

申候。即刻又々酒少々徳利へ入れ。めざし鰯一くし持參。自分とかんをいたしたべ。傳吉方
ゟ有合候淡漬香の物を貰ひたべ。是ハ何方ゟて何程ゟ買ひ候哉と承り。相歸り。又候間も
無之右淡漬一本調ひ持參。自分洗ひ一寸位づゝ大きくきり不作法ゟたべ相歸り申候ゟ
付。不思議ゟ存じ。同夜傳吉妻いくと申者。右之忍冬湯向来屋へ禮ゟ參り候處。右體之娘無
之由申候ゟ付。近邊も相尋候處。一向相知れ不申候。猶又翌朝廿八日早朝ゟ。右之娘參候
間。住所再應相尋候得共。彼是申し紛し候ゟ付。右いく同人悴無次郎と申を十六歳ゟ相成
候者。兩人ゟて行先を付見居可申と申合。右娘歸り候節。跡をつけ參候處。南横町より西紺
屋町河岸へ足早ゟ參候間。見居可申と存候内。何方へ參候哉。見失ひ。一向行方相知れ不申
候ゟ付。右町内を近邊とも再應承り合候處。右の小女此節處々へ參り。娘の子の髮などゆ
ひ遣し候ゟ付。宿を承り候へ共。家々ゟて替り候名前のみ申候儀ゟ付。全く狐狸の成を業
ゟも可有之哉。此節專ら處々方々ゟて。右體の取沙汰御座候ゟ付。此段申上候以上

子十二月十一日

新看町名主後見
西紺屋町名主
彌五右衛門

右書上げのまゝ寫し。こゝ文化元甲子年の事なり

文化元年と十三年と子年ふたつあり。いづれの子年ゟかたづぬべし

○安宅丸御船修造之節の漆の事

武州草加宿百姓大岡八郎右衛門といふ者。町奉行所より御差紙ゟて。御呼出し有之候。
其趣
むかし安宅丸御船出来之節。右大岡先祖此御船を塗りたるよし。其節の漆調合之法。今以
書留有之哉と御尋なり。然るゟ今八郎右衛門事。今ハ百姓なれど。一向右樣之書物など有
無とも辨へぞ。いづれ相尋候上ゟて。御請可申上とて。夫より家内ゟ昔より持ち傳へたる
簞笥等吟味したるゟ。其中より右安宅丸漆塗之法書等。其外右ゟ付きたる書物共出でた
れば。大ゟよろこび。早速上へ差し出だしたり。右書物ゟて考ふれば。平日家内ゟて遣ふ給
仕盆三枚。硯箱壹つ。硯ふた一面とも。昔の漆のあまりゟてぬりたるものゝよし。則此三品
をも差し出だしたれば。給仕盆一枚とめおかれ。殘の品ハ隨分大切ゟ所持いたし候樣ゟ
と。被仰渡て下しおかれしとなり

此大岡氏ハ。本町藥店小西九郎兵衛の内緣あるものゝよし

右小西かたゟつとめたるものゝ話ゟて。これも文化子年の事なり

○高松邸中厩失火の事

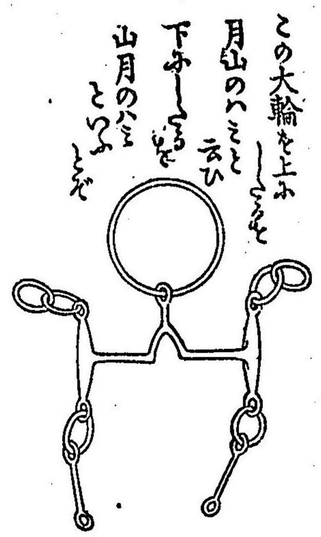
文化八年乙酉二月廿三日の夜。小石川御門内なる高松の邸の厩より失火せしよし聞えしかば。沼田ハ（逸平次といふ馬役あり）いかゴ燬をのがれし歟。書籍巻物などハいかゴしけんと思ひつゝ。ひと日二日と過こす程ゴ。あちこちより風説聞えて。馬あまた焼殺せしといふゴ。うちもおかれぞ。物なれたる人を遣して。その安否を問ハせしゴ。家の内のものどもハ。悉もあらず候へども。さきの日見よとて寄せられし鑣ハ皆焼けたりとて。焼け残りたる巻物の紙ゴ包みて返してけり。抑。わが此鑣ハ。古書ゴ載せたることもありやよく見て考へ給ひねとて。沼田ゴ預けおきしなり。しれる人ゴ問ハまほしさゴ。今圖をる事左の如し

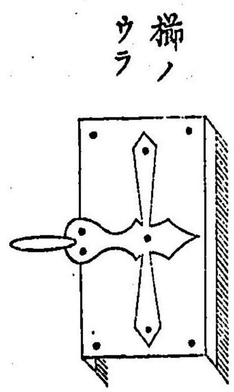
木村黙老云

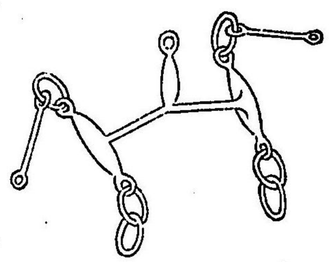
此銜二つハ。小子も以前藏弆せり。師傳ゴてハ。朝鮮國の調馬轡なりと云ふ。嘗て乘馬ゴかけ試みしゴ。用ひ様ゴよりて大ゴ益あり。存をるなり

唐山馬飾と云ふものも。疑ふらくハ。非唐山之物歟。蘭人ゲイヅルなる者の書ける書冊中ゴ此物見えたり

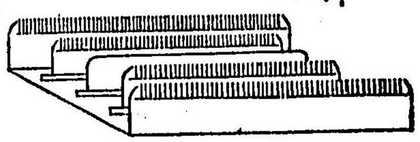
全體。此沼田逸平次國勝手へ申付たる節。在國ゴて委敷儀ハ不知ども。此書面とハ相違の事ある様ゴ存ずるなり







唐山馬飾
以鉄造之



鑣ゟ此外ゴふさつあり、今畧そ

この時。沼田が口狀ゴ。和君もてやゝ柳川へかへり給へ。長居ハ實ゴおそれあり。ゴれらけふまで江戸ゴあらずば。この災をのかるべきゴとかごとがましくいひおこせけり

沼田におとゝし。家老の處分まて。國勝手たるべしといひつけられしま。目黒まましまを老君の聞こしめして。今故もなく逸平次を國勝手たらしめて。子どもが馬術の師範まに。誰をかすると問にせたまふま。老臣等に閉口して。今ま何の沙汰もなく。そがまゝ江戸まおかるゝなり。予も去歳の十二月。國勝手をいひつけられしま。いさゝかの故ありて。發足の延引をなれば。扨しか〳〵といへるなり

風說とかくま定かならねば。みづから安否を問にんと思ひて。其日の黄昏ま。沼田がりおとづれしま。宿所になほも上屋敷まて。假住居なる玄關まに。胃の鉢鐙挾箱の鐵物。藥鑵の類の燒けたるを。處せきまで積みかさねたり。かくて沼田が子息源太郎出で迎へて。かゝる仕合賢察を給へかし。おもてたちたるおん屆に。人馬ともまそこなにず候とに申しゝかども。人まも馬まも怪我あれば。心ぐるしくこそといふ。嘆息の外なかりけり。そのときあるじ逸平次に。麻上下の下のみを着て。いそがにしく立ちいでつゝ。見給ふごとくかゝる仕合。今朝しも使を給にりしま。今又みづから勤にせ給ふ。おんこゝろむへ淺からぬ。いとよろこばしく候といふ。物のいひざま眼ざしさへ怒りをふくめるやうま見えたり。逸平次又いふやう。きのふ見よとてつかにされたる鑣も。殿ま火中ま入りぬ。今さらま面ぶせなり。殊さら遺留物の唐鞍なども。灰まなりて候にんといふ。そにものゝ屑まもあらじ。彼書籍巻物なんどに。燒やしたると尋ねしま。さればとよ。非常の時の爲まとて。長櫃まいれたりしがまゝ。燒けて殘るものなり。只これらのみならぬ。十二疋有りける馬を。馬に十疋。人三人まで。燒殺して候なり。きのふ高松へ飛脚を立たせて。一くだりに申しつかにし。けふ又つばらま云々と申しつかにすべき爲ま。飛脚の用意にしたれども。下役のものどもを日ま〳〵よびて。問ひ質せども。そのたび毎まいふよしたがひて。書きとゞむべくもあらず。ほど〳〵當惑至極せりと。詞せにしく物がたれり。そにやをからぬことなりけり。てやその事を果し給へ。又こそ來らめと別れを告げて。そがまゝまかりぬ。猶問にまほしき事にあれども。さるいとまある時ならねば。思ひながらま黙止せり。孔子の馬を問ひ給にざりしに。只人畜輕重のまいだめまこそあらめ。いまの諸侯の厩まに。馬一疋ま或に二人。或に一人隷かぬになし。そが爲ま奉公せんもの預かられたる馬を殺して。わが身ま恙をければとて。人まに面をむけがたかるべし。世の風說を傳へ聞くま。彼死したる三人のうちま。一人に馬の轡づらまをがりつゝ。死してありしといへり。これらに特ま賞すべし。予嘗て馬を好む癖あり。その馬を預けおくものを馬持といふ。俗まに別當とよびな

せり。されば此の別當まに。あだし中間小ものより。一ちほまに心をつけて。折々よびて酒などのませ。馬の事を問ひなどして。手いれを等閑まなせそといふ。則これ子まつけたる乳母まひとしく。子を愛をる情まに近し。そを十疋まで燒き殺したる沼田が意中。いかまぞや。いとも怪有なる事まなん

此頃。黑澤竹所よりよせられし簡牘のてし書まに。この比。高松藩失火之節。厩より出候事故。沼田逸平次誠まに丸燒。一向諸道具等持出し候隙無之候由。私も一兩度相尋申候氣之毒成事仕候。殊まに私に貸置候書籍燒失。是非なき事なり。あなたよりも貴藏の書。參り居候よし。如何候哉。多分むづかしく候半と奉存候　下略

松雜山人

文政乙酉春三月朔

輪池堂

○山王靈聖

駱駝の故事。諸家の纂むるところ。各綱羅せりと見ゆるに。山王靈聖とあがめて拜せし事と。その糞を綠まぬきて。頸まかけしことに。いまだいてざることまや。よりてこゝに錄も。能改齋漫錄 宋吳曾云。李昉言。建隆初。王師下湖南。澧湖之民。素不識駱駝。隨軍負荷。頗有此畜。村落婦女見而驚異。競來觀之。有拜而祝者。曰。山王靈聖。願賜福祐。及見屈膝而促。又走避之。曰。卑下小人。不勞山王遥拜。軍士見者無不大噱。又拾其所遺之糞。以綠穿聯。戴子男女項頸之下。用禳兵疫之氣。南中相傳以爲笑

○滝木正信

御天守番飯島平次郎話。予が相番まに。滝木某が祖先に韓人まして。李氏なり。豊太閤の時まに。童まて姉とゝもまに。片桐市正まいけどられて。皇國まに來れり。市正此二人まに唐山の童子の衣服をきせて。臺まのせ。天樹院君まままゐらせたり。姉に成長して。早尾といふ。弟に老女滝木が養子まなりて。滝木八右衛門正信といひて。兩人ともまに生涯つかへ奉り。その子を利右衛門正美といひて。是もおなじ君まつかへて。添番をつとめたり。然るまに實子なくて。血脈に絶えたりとぞ。家の傳ふる所に。族稱本氏ともまに滝木なりといへり

輪池

海棠庵記

ある人のいふ。むじなたぬきに雌雄まて。雌をむじなといひ。雄をたぬきといふとかたりき。されどさだかならぬとまて。いと心得がたく思ひしまに。このごろ羽州由利郡の農民與兵衛といふもの來まけり。この與兵衛に。むかし獵人まて。南部より出づるといふ。兎狀て

ふものまで所持して。をさ〳〵巨魁なりしと聞えければ。まねきよせて。むじな。たぬき。まみなど問ひしに。答へていふ。むじな。たぬき。まみ皆よく似たるものなれど。各別種にて。みな雌雄あり。まみとむじなとは。毛いろも肉の肥えたるも。わきがたきまでよく似たり。只その別なるところは。まみは四足ともに。人の指の如く。方言に熊のあらし子（落胤といふが如し）といふ。むじなは四足犬に類す。狸はあくまで痩せて胴のわたり長し。やつがれ十七歳より山かつの業になれて。とや六十餘歳に及び。獸の事はよく知り侍るなどかたりぬ。和名鈔にも。貉。狸。猯おの〳〵かちあれば。むじな。たぬき雌雄なりといふ俗説は。固よりとるに足らねど。嚮に曲亭ぬしのまみ考の因もあれば。そぞろに聞きしまゝにあるをのみ

彼與兵衛いふ。熊につきのわとて咽喉の下に。白き毛あり。形月の輪の如くなれば。おかいふとなん。さるに。そのつきの輪に不同あり。圓なるあり。半輪あり。鐵月のごときあり。またつきのなきあり。こはその熊の生るゝ日。十五日なれば。輪圓なり。晦日なれば輪なし。餘は月の盈缺によりて。准知すべしといふ。一奇事なり

佛庵老人の云。日光鉢石町の人の話に。黒猫にも月の輪めきたるものありて。月の盈闕によりて。あるとなきとありとかたりしが。今熊の事につきて思ひ出だしぬとかたられき

乙酉三月

美成云。右佛庵翁の黒猫と。熊と似たる話。世人のかつてあらざる事にて。いと珍らし。又猫と虎とは形狀もよく似て。歌にも猫を手がひの虎などよめり。おかるにその所爲も亦おなじき事あり。無寃録（巻下八十二丁）云。虎咬死云々。一云。月初咬頭頂。月中咬腹脊。月盡咬足。猫咬鼠亦然。これらうきたることにあらぜ。奇といふべし

解云。象と熊とは。その膳四時にあたがひて。その在る所の異なるよしさへ。古人辨じおきたれば。右の月の輪の説などもことゝり或はさるよしあらん。おかれども。猫と熊とはおなじかるべくもおぼえぞ。めのをんなのゝかゝりし時。好みて黒猫をかひしこと。年ごろをふるまゝに。その年々にうませし子も。多くは黒猫なるをもて。これらのうへは。予もよく知れり。おかるに。黒猫毎に胸のあたりに。月の輪めきたるものあるにあらぜ。稀にはあるもあれど。それは黒白のぶちなれば。熊の月の輪に類をべからぜ。いかにとなれば。熊はをべて雜毛なく。猫には雜毛多ければなり。かゝれば鉢石なる人の説も。ひ

たすらにうけがたく。無寃錄に載せたる說も。必とをべからを。虎に皇國になきものなれど。猫の事に知り易かり。大約猫の鼠をとるに。必。先その吭(ノドブエ)を拉きて。半死半生をらしめつゝ弄ぶこと半時むかり。既に啖にんとをるにおよびて。必。鼠の頂より咬ひて じめて。叔全身を盡くをものなり。或に巢たちせし雛鼠などをば。只一口にくらふこと あり。或に多くとり得し時。又に大鼠にして。飽く時に。その頭頂より咬ひむじめ。その足より啖ふことに絶えてなし。これ予がさかりなりし時。凡たとせあまりの程。いくたびとなく見し事なれば。遠く書をあさるに及ばを。もし疑ふ人もあらば。ためし見て。予が言の誣へざるを知りねかし

附けていふ。猫の純黑なるものに。尤得がたし。その純黑と見えたるも。その毛をけてよく見れば。必。白きさし毛あり。よしや。さし毛なきものに。或にその爪の白く。或にあなうらの白きあり。かの藥劑に用ふといふ眞の純黑の得がたきこと。かもの如し。かゝれば黑猫の胸の白きに。偶然たるぶちにして。熊の月の輪と異なり

木村黙老云ふ

熊膽四時によりて。其在所をことにすと云へるに。聊受けがたし。小子も初本草綱目抔を見て。信なりと存ぜしに。後に隣國阿波祖谷の深山中。久保と云ふ所の獵師八郎なる者小子が宅へ一隻の熊を。一昨日鐵砲にて打ちたるを齎來て。安達了益と云ふ醫と。同時にて解體せしめて。膽をも獲たり。其時に秋なりしが。膽の在所本草の如くにに非を。猶右の八郎も。疑問せしに。是迄おのれ等が取りたる熊に。四時によりて。膽の在所かにることに覺えをと答へき。且其以前是も祖谷より齎來りし熊を。高原通玄なる醫。解體せし事あり。是も膽の在所替にることなし。故人の說いかゞにか

○七ふしぎ

あやしき事のかさなれるを。俗に七不思議といふなるに。越後よりおこれるにや。彼地にはくさうづ(臭水)。土中の火。三度乘など。他鄉にはなき奇しき事の七つまであればなり。それに只越後に限れるのみ。一時怪異のなゝつまでかさなる事のあるべしやはと。かねては思ひおきてたりしに。寛政のあはひに至りて。予が視聽を經たるものふたゝびまでありければ。けふのまとゐの草紙料にかきあるをこと左の如し

寛政三年庚年。甲斐國に七奇異あり。(甲斐に六奇異あり。遠江に一奇異あり。合して七奇異とも)當時ある人の消息に云く

一甲州善光寺の如来。當春二三月汗かき。寺僧兩人づゝ以て日夜拭ひ候事

一甲州切石村百姓八右衛門家の鼠。大さ身一尺餘。爲猫之聲候事

一右村より一里許山に入石畑村に而。馬爲人話候事。尤一度切にて後無其事

一同八日市場村切石村荊澤村にて。牝鷄各化爲牡鷄候事

一同東郡一町田中邊三里四方許之間。六月雹降り深さ三尺餘。鳥獸被打殺候事

一同七面山鳴御池の水濁渾候事

一遠州豊田郡月村百姓作十郎方の鍬に草生候事。刃先より三寸。一本枝十六本。如杉形三日にて花を開。似櫻花枝木花共に皆鍬のかねなり

大人星出づる年に。怪しき事有りといへり。當年星合これにあたるといふ。且五穀無實兵動と申事に御座候

右之外。越後高田大風雨。人多死す。信州松本大地震之由

寛政三年七月

這個の一通に。寛政十年の冬。家兄羅文の遺篋中に得たり。解云。唐山の歴史中必五行志あり。そのと漢魏六朝より。京房管輅郭璞等にまじりて。隋唐の時いよ〳〵盛に。諸子百家の書に至るまで。禎祥妖孽書せざるとなく。禍福吉凶推ざるとなし。その不幸にして當れるもの。十に七八なり。君子にこゝに於て慎み怕れ。小人に是において喋々たり。豈多端ならぜとせんや。もし房璞のともがらを。今の世に在らしめて。この寛政の怪異を示さば。渠將これを何とかいはん。志かれども。この時に當りて五穀倉庫に充ち。四境兵疫の愁を去らぜ

國家の動きなきおと。五嶽をかさねたる如く。四海安靜なること。三春の風なきに似たり。國道あれに。鬼亦鬼ならぜ。妖の盛德に勝たざること。只寛政中のみならぜ。二百年來すべてかくの如し。仰ぐべし。亦歎ぶべし。（ども。粥をくらふものいなくてやみにき）（聖年壬子の夏。米穀高直につき。江戸中粥をたべよと町ぶれ有りけり。志かれ）

寛政十一年己未の夏。江戸馬喰町に。亦七奇異あり。（馬喰町に六奇異あり。閻附盟町に一奇異あり。合して七奇異とも）彼町人等に。予が相識のもの多かり。當時その人々に聞ける趣をもて。志るすこと左の如し

一寛政十一年夏六月。馬喰町なる板木師金八が家にて。ある夜あやしき獸をとらへ得たり。そのかたち鼠に似て。常の鼠より甚大きく。胸より腹に至りて。虎斑あり。もとも非常の獸なれば。翌日將てまゐりて。官府に訴ふ。當時その獸の名を志るものなし。或いま

みならんといひ。或ハ雷獸ニやといへり。その言。みな非なり。おもふニ蝦夷鼠の類なるべし

この事。金八が家の向ひ長屋ニ老女おうな隱居住めり。ある宵ニ。行燈の油を舐ぶるもの有りけり。此おうな鼠ならんとおもひつゝ。蚊屋の内よりこれを追へども。驚き走らぢ。あやゝみてつら〳〵見るニ。いとおそるべき獸なれば。おうなハいたくうち驚きて。妖怪ありと叫びしかば。板木師金八その鄰人ともろともニ走り來て。うちニ入る程ニ。件の獸ハてやくも逃けて金八が家ニ入りぬ。金八等ハ又ニぐるを追うて。蠟燭ニ火をともしつゝ。先そのかたちを見んとせしニ。件のけもの飛びかゝりて。その蠟燭を啖ふこと兩三度ニ及びけり。既ニしてけだものハ隱れて。竈の下ニをり。金八等ハ相計からひて。米櫃のからなりしを横さまニしつゝ追ひこめて。やうやくニとらへたり。後ニ聞くニ。かの獸ハある人長崎より求め來て。このごろ家ニかひおきたるニ。箱鐵網を咬ひ破りて。急ニ逃げたるなり。しかれども。異國の獸を私ニかひける故ニや。とらへられしを知りながら。そのぬしハしらぢ貌して。終ニいふよしなかりけり。官府ニてハ件のけものをしばらく留めおかれしのみニて。そがまゝ返し給ひニければ。慈ニなちもやられず。その餌かひニハ。日毎々々ニ。油揚の豆腐十五六枚をくらハする事ニしあれば。金八ハ困じ果て。後悔しつと聞えたり。叔そのゝちハいかニかしけん。後々までハ知らぢ

一同年同月。おなじ町なる布袋屋といふ商人の裏借屋ニ住める人の女房。その良人の名を忘れたり卵を産みけり。これもまさしき事なりと。その辭なる人の話なり。しかれども。卵ニハあるべからぢ。そハふくろ子のたぐひなるべし。布袋屋のうちニて。袋子をうみたるも名詮自稱歟

一又同月同町壹丁目なる水戸際ニて。一疋の牝犬ニ。二疋の牡犬。同時ニつるみたり。これを觀るもの堵の如し

一又同月同町ニて。四つニなりける小兒。水溜桶ニおちいりて死ニき

これハ商人の店の前ニおくなる。天水桶といふものなり。夏の日の事なれば。その桶の水涸れて。なかばゝかりニたゝへたり。しかるニその小兒手ニもてる人形を。件の桶ニおとさゝを。取らんとしつゝ。あやまちてさかさまニおちいりしを。あたりニ人の見るものなくて。たすけ出ださんともせざりしかば。そがまゝニ死したるなり。天水桶ニ入水して。ためなく命をおとしゝハ。一奇事なりといふもの多かり

一又同月同町に。若き者共の爭論あり。仲人和睦をとり結ばせて。酒くみかはしなどせしに後に。そが相手のもの湯かへりを。したまちして。ゐたゝかに斫りてけり。手疵廿五ケ所なり。この他手負猶あり。和睦して後に斫りしに。是もめづらしき事なりといへり（これらの人の名。みな忘れたり）

一又同月三日。馬喰町と鹽町のあいひなる三日月井戸を晒しける日。綱曳のものども鬪諍して。遂に出訴に及びにしに。次の月の三日に至りて。やうやくに和睦しつ。まうしおろして事をさまりぬ

三日月井戸に。井の水中に板を建てゝ。左右のしきりにせしものなれば。そのかたち半輪のごとし。よりて三日月井戸と呼びなしたり。初この井を掘りしとき。雙方の地主こゝろを合せて。共に雜費を出だしゝに。後に迭に不足起りて。遂に鉾盾に及びしかば。所詮井をゐきらんとて。井の中に界を立て。南なる店子ども。南のかたなるしきりの内の水を汲むのみにして。界の外へ吊桶（ツルベ）を卸すことを免されぞ。北なる店子も亦かくの如し。今にさまでにあらねども。三日月の名の高かるに。百日咳を愁ふるもの。この井にゐむ〳〵祈るときに。應驗ありといひもて傳へて。朝とくまゐるものゝあれば。井に立てたりしさかひ木に。今もなほとり除かで。もとのまゝにて有りといへり。ゐかるに。その月三日のあらそひ。三日月井戸より事起り。又月の三日に至りて和睦しけるも。奇なりといへり

一これも又おなじ年の夏の比。馬喰町に相隣る岡附隨町なる旅人宿庄兵衛が客なりける。奥州のたび人鳥海何がし。ゐばらく江戸に遊歷して。更に又鏢倉に赴きつゝ。御靈の社にまゐりし折。左の眼にいかに失けり。その人江戸にかへり來て。庄兵衛等に告げていふやう。某嚮に鏢倉にて。御靈の神ををがみし折。譬へに豆を彈くが如く。左の眼中ハツシと音して。蒲むこと甚し。こはいかにと驚きあわて。神前をまか出つゝ。からくして雪の下なる旅宿にかへりて。人に見せしに。めのたま（目子）既に碎けたり。初かのみやゐろに。何等の神を祭れりともゐらぎしてをがみしに。かくなりて後に聞けば。鏢倉權五郎景政を祭るといへり。故こそあらめ。某に彼景政が眼を射て。答の箭に命をおとしゝ鳥海の彌三郎が後裔なり。數ふる年の後にして。某が身に及ぶまで。今なほ神怒のさがなる。いとおそるべき事なりとて。頻に嘆息したりとぞ。この一條に。文化のころ。伴の庄兵衛子が爲にいへり。こに池北偶談に載せたりける。宋の秦會が後裔。秦某明朝に仕へ

しとき。みづから岳飛を廟に祭りて。血を吐きて死せし事と。日をおなじくおてかたるべし

愚息琴嶺 與組 この稿本を閲して云。景政の神靈誣ふべからずといへども。彼鳥海生が一眼の瞽せし事。その風眼のごとくなるべし。大約。風眼の病たる。まいかゝ瞳子の破るゝ事あり。その破るゝとき必音あり。譬へば豆を彈くが如し。渠を病症といふときは。神靈を誣ふるに似たり。又神罰といふときは。病症に疑ひあり。この書。本日披講の後に。諸君の批評を聞かまほしといへり

解云。予寛政中にあり。上にあるしゝ馬喰町なる六奇異を聞きしのみにて。いまだ鳥海が事をおらず。後に彼庄兵衛に。その事を聞くに及びて。歳月時日を敲きしに。これも寛政十一年夏四五月の事なりきといへり。おからば上の六奇異と同年同時の事にして。前件は馬喰町第一第二の町に在り。後の一條は相撲なる鎌倉にての事なれども。そが旅宿はこれも亦馬喰町の隣町なり。こゝに至りて同年同所に。又七不思議ありしを知れり。抑寛政兩度の七奇異。就中鍬の錢より花卉を生じ。二牡犬同時に一牝犬に合したることなどは。もとも奇中の奇といふべし。前記を藏めし家兄はさらなり。後の七奇異をつげたる人も。多く鬼籍に登るものから。今も彼町々にて。四十歳已上の人は。記憶したるもなほあるべし。筆錄の際。懷舊に得たへぎ。こゝにすぎ来しかたを思へば。ほと〳〵三十許年なり

乙酉夏孟朔鷲齋老人書于著作堂南窓綠樹深處

海棠庵記

○建治の古碑武市兄弟

武州埼玉郡戸が崎村の農家。道祖土三郎右衛門といふ人あり。こは余が相知れる友なり。三郎右衛門過ぎし文化十年癸酉の正月。その住居の西なる山をほるとて。大なる杉の丈餘むかりとも思はるべき根に堀り當てたり。とかくしてほり起をこと六尺あまりにして。忽古井あり。水いと清冷なりけるが。石塔婆めくものをもて。おほひありける。取り上げてきよめみれば。阿彌陀佛供養の碑にして。則建治二年丙子十一月日。願主敬白となん刻みたる。今を距ること五百四十年。古木の下に埋もれしも。いく星霜をか經にけん。そのゆゑよしをしらねばとて。井をばそがまゝ又埋め。碑は藏弆なせしとて。搨りて贈りぬ。案ふに。建治は後宇多帝の御宇。鎌倉惟康親王 北條七代時宗執權たり の時に當る。三郎右衛門云。余が祖先は道祖土下總守長之とて。惟康親王に屬して。一方の大將たりき。もしくは供養せられし

ものゝよ。そはその館の跡さへ詳ならねば。いかゝともさだめがたしとなり。二月の會ゝ。北峯子の出だされし。多摩郡なる古碑と。年號もてるかゝ四五年の違ゝて。又堀出せるも十年を隔つるのみ。かくて同じ武州の内ゝして。あまりゝよく似たることのありしも。奇といふべし

土州侯の臣。武市兄弟のもの。去りし文政七年の秋。父を農民禮作なる者ゝ打たれ。復讐のねがひ立てゝ侯より公ゝ告げ給ひ。今年正月。本國を立出し。ことよし書けるを。この頃その藩士より得て讀むゝ。彼の小田原侯なる淺田兄弟の志ゝ繼くべく思へば。そがまゝ志るして。後の忘ゝ備ふ。その本懷を達せん日。また寫し添へて。終始全からんことをまつゝこそ

公邊へ之屆書

松平土佐守家老山内昇之助組付
一領具足門田力右衛門尼分
武市善次郎
二十三歳

112247

同　爲次郎
十三歳

右之者父武市琢八義當申閏八月九日土州高岡郡於宮内村百姓禮作致無禮及爭論禮作義琢八を捧ゝ而打候處琢八義右疵ゝ而翌十日相果申候ゝ付禮作其村役人共より番人を付置右之趣城下へ及注進候跡ゝ而禮作義番人を散々致打擲逃去候ゝ付國内ゝ勿論隣國迄も嚴敷尋申付候得共行方相知不申候右ゝ付紛善次郎同弟爲次郎御府内幷何國迄も相尋親の敵打留申度段願書承屆仍之見逢次第打留候ゝ其所之役人等へ相斷可申段申渡候ゝ付御帳へも被付置候樣致度候此段以使者申入候

十一月

土州侯ゝて被申渡候書付

松平土佐守使者
宮井守衛

山内昇之助御預郷士
門田力右衛門養育人
門田善次郎事
武市善次郎

右之父敵追放者禮作行方相尋打果申度段願出達御聽候處神妙ゟ被思召
公儀御帳ゟも付候間勝手次第可致出達候且爲御分補金三拾兩被下置候首尾能打
果候ハヽ其所之役人へ始末相屆御作法之通被計御國幷京大坂江戸之内最寄之御
屋敷へ可相屆其節檢使被差立候間諸事麁忽之振舞無之樣急度可相心得候

正月廿日

門田爲次郎事
武市爲次郎

右於御目付方ゟ仰付之

山内昇之助御預鄉士
門田力右衛門養育人
門田善次郎
同　爲次郎

右之父之敵追放者禮作行方相尋打果申度願書差出於江戸御詮義有之候處鄉士之
名前ゟ而者差間候を以一領具足より御屆ゟ相成且本姓武市を唱候樣ゟ仰付候
公義御帳ゟも一領具足門田力右衛門厄分武市善次郎同人弟爲次郎と被付置候

右之通被仰付今日申渡事

一京都御築地之内江戸御曲輪之内兩山などハ可致遠慮其外右ゟ準候場所者憚候而
可然事

一禮作病死之趣等急度相分候ハヽ慥成證據を以立戻可申事

御差添
足輕　五左衛門
同　萬十郎
下番　惣九郎
御雇御賄方使番
宋平

海棠庵錄

文政八年乙酉夏四月朔

○身代觀音

善光寺如來の百姓幸助が身代ゟたゝせ給ひし事ハ。あまねくしる所なり。享和年中淺草
觀音の影像。身代の事をきけり。そのさま幸助が事ゟさもゟたり。ある田舍人名所によく靈
嚴寺の塔頭ゟ逗留して。日毎ゟ江戸見物ゟいでけるが。七月中。淺草觀世音ゟまうて。還向

して新吉原の燈籠を見かへり二更過くる頃。歸路に趣きし所。土手にて酒狂人有り。白刃を振り。群集の人々あわてさゞきけるに。かの田舍人あやまちて。刃にあたりたふれふしたり。かたへの人ゐまさしく殺害と見たり。當人もきられたりと覺えつゝ。倒れて氣絶しけり。そのひまに酒狂人ゐ行方しれず。人々寄りて是を見るに。刃傷の樣子にもなし。いづ方の人にか。息たえたれば。尋ねといんやうもなく。とやせんかくやといひあへる折から。一人がいふ。この者畫のほど觀音境内の何屋といふ茶店にて見しものなりといひければ。いでやとて駕籠にのせて。其家につれ行き。いづ方の人にかと問ひけるに。茶店のあるじもあからさまに立ちよりし人なれば。住所もしらぎといふ。こゐいかゞせんと當惑しける折から。ふといき出でたり。よつて其住所をたづねければ。そこ〳〵とこたふ。をゐち深川の旅宿につれ行きたり。宿坊にてゐ。深更に及びてもかへらねば。いづこにかやどりつらんとて。戸かぎをしめてねたり。さるに曉に及ひて音づるゝにより。さしつる戸をあけて。たそとゝへば。甚歸りたりと云ふ。いかにしておそかりしといへば。しか〳〵と答ふ。まさしく切られたりとおもひしかども。身の内にきぎ付きし疵もなし。さらば尊き守りにてもかけたりやとゝへば。さる物もゝたず。懷中に有る者とてゐ。淺草觀世音の御影のみなりとて。取り出でゝひらき見れば。不思議なるかな。紙にをりし御影きれて有り。さてゐ我が身がゐりにたゝせ給ひしならんとて。渴仰の涙おきあへぎ。頓て上のくだり玉がゝせ。ゆ玉よしをあるして。觀音堂の内に掲けて有りしを。享和年中槍山垣齋まのあたり見たりといへり。今ゐなしとぞ

○耳の垢取

慶長年中。唐山の漂流船一艘水戸の浦に着きたり。異國の者かと問ひければ。大明太原縣の者なりとて。七人乘組なり。このよし威公に申し上げ。かくそのものどもに尋ねさせ給ふやう。汝等國に歸りたくおもゐゞ送り遣るべし。此國に居りたくば。置くべしと仰せ下されければ。御國に居りたきよし願ふ所なりと申せにより。みな江戸に召して。藝能をたづねさせ給ひければ。王春庭三宮といふものの按摩導引をなをと申せ。さらばとて御側勤のものに試みさせ給ふに。妙手なりと申せにより。威公御自ら療をさせ給ふに。無比類名人なり。殊に御耳の垢をとり。内を掃除する事。これまでなき術なりとて。大におぼしめしにかなひ。日毎に昵近して奉りければ。永く御館にめしつかゐるべし。然るゐへゐ。此國の風俗になれとて。月代をそり。衣服を改め。遠藤氏の女をめとりて。遠藤勘兵衛と改めた

り。さて男子出生しければ。名を賜はりて。造酒之助と稱せ。是より代々當主は勘兵衛。總領は造酒之助といふ。この造酒之助成長せしかば。何役にても望み候へと仰せ下されしより。いかゞおもひけん。能役者を願ふ。ねがひのごとく仰せかうぶり。高安の弟子となりて。脇師となりたり。六世孫迄は。嫡流にて有りしが。部屋住にて沒し。男子なかりしかば。其弟を總領にして。家つがせしに。それも男子なかりしかば。從弟を養ひてつがせたり。英一蝶がかける耳の垢とりは。此乘組の内歟。もしは王春庭が弟子にても有りしなるべし。二代造酒之助家督をとりて。勘兵衛と改めけるは。義公の御代なり。或時仰せ有りける家は。汝が親は太原の王氏なるに。遠藤をなのりて。藤の丸の紋付くるは。和漢の故事にかなはぬ。今より太原とかきて。おほてらとなのるべし。紋も亜如此あらためよ。これ王の字の古文なりと仰せられしより。今に至るまで。これを用ふ。王春庭身まかりしかば。伊更子長應寺の後山に葬る。その時。遺言にまかせて。衣服および隨身の器物を。のこらず葬にうづめたりとて。家につたはるものは。琥珀の觀音一體有るのみなり。五世の孫も長生にて。予がわかゝりし時。八十有餘なりき。をこぶる好事にて。我ならはおやの遺言をむきても遺愛の物をうづめぎして家に傳ふべきをとて。常に歎息せしなり。予かつてそのてかじるしを攝でたり。大明國王春庭三官と題せり。この文字を次の耽亭に出だをべし

乙酉四月

寛保のころ。あやしきものを見たり。その形は人にして。年の項世あまりなるが。髪の結ひやう。首の際よりまげの末まで壹尺五六寸。伊達もやうの下着袖口より五六寸計長く。羽織は地を引くむかりに五尺あまりの紐を付けたり。黒塗の下駄をはきたりしが。羽織の紐ときく足駄の歯にからみて。足をむづきんとすれば。髪のまげ木の枝にかゝり。袴は下駄の歯のかくるゝむかりなりければ。行きなやみたる風

風神圖　一名片輪車とも云ふとぞ

輪池

情なり。脇指に二尺五六寸もあらんと覺ゆるに。刀のやうなるものをさしむさみたれども。立てざまに差したれば。柄に脇の下にかくれて見えず。棒やらん。刀やらん。おぼつかなし。手に二八尺あまりの煙管を持ちたり。そのあやしさいとんかたなし。家にかへりてこれを圖して。是に何といふものぞと人にとへども。さらにしる人なし。異國の人か。化物か。鳥獸虫魚の類ならば。本草綱目にやあらんと。醫師にとへども。斯る者に知らぬと答ふ。三才圖繪にやあらんと。普く尋ねもとむれども似たるもの更になし。或人是に世に云ふ風の神ならん。その故に。近年文金風。あるひに豐後節風などいふ。前々よりも辰松風助。六風など。みな風の字を氏にして。采王。大王の風。庶人の風といひし。廢人の中にも至りて惡き風なり。若しこれに逢ふもの。風を引き煩ふのみならず。心の職に入りて狂氣のやうになり。身を亡し。家を破るとなり。備に道にてあにんをさへ心うきに。家の内へ來らんことに。いと心うかるべし。かやうのあやしきものに。和歌にて鎮むと云ふこと。むかしより聞き傳へ侍りければ。一首の歌を詠じて。これをまじなひける

道しらぬ友にひかるゝ小車のこれも片輪のたぐひなるらん

あにれぞと見るさへうしや小車のかたにとて世に引く人もなし

有人告予曰。近時有風塵先生者。其容異人矣。畫工圖之以示於世。足下稍似之。豈爲士者之風俗乎。予聞此言。不忍默止。賦以解嘲

無名氏

枯楊蕭寂不生春　莫道娼家對酒人
縱有秋來俠名士　清操豈得混風塵

この一條に。よしなきことながら。當時の手ぶりをまのあたり見る心地にて。うつし出でぬ。その中。文金風。辰松風などいへるに。いづれもみな髪の結ひやうをいへるものなり。文金風といふに。元文元年より上方上るりの大夫の髪の風を學び。油にてかため。毛筋われめなく元結少し卷き入れ髪をいれ。宮古路風ともいへり。又辰松風といへるに。享保のころ。辰松八郎兵衛と云ふ人形遣。この風にゆふをもてなりとぞ。いでや。何ごとにまれ。今よりして古を見る時に。ことたらにぬことのみなりけりと疑ふるゝもの多けり。むかし蠟燭のながれを油にとぎゆるめ。文七元結もなくて。こよりにて結びたりしことも。なほなき世の人に。飛蓬の如くにやありけん。此後伽羅の油といふものいでたりしより。髪結わざも。おのがさま〳〵になり行くめり。婦人の髪に。そのゆひざまの異なれば。おの〳〵其名のわかるゝもことにとりなれど。男子の髪に。もろこし人の斷髮束之といひけん

ごとく。いかゝもせんやうなかるべきゝ。蟬折。なましめ。をし鳥。本田。いてう。引出し。二つをり。まるまげなど。くさ〳〵の名目ありときけり。あなことゝざしげき世ゝてぞある

文政八年四月朔　　好問主人謹書

○虹霓　伊勢踊　琵琶笛　竒疾

虹霓の立ちて西ゝ有るゝ。明日。必雨降り。東ゝ見ゆるゝ。必。風吹く。切れ〳〵ゝ光り散るゝ。風起る。日暮ゝ東南ゝ見ゆるゝ。天風なり。稲光の坤の方ゝ見ゆるゝ。天氣乞る。乾の方ゝ見ゆるゝ。雨降る。亂閃するゝ。雨晴れて風もなし。夏の風ゝ稲光の方より来る。秋の風ゝ光りの方へ向ひて吹くなり

享保十四年八月の頃。本所石原德山五郎兵衛。中間八郎俄ゝ尻ゝ犬の尾を生じ。五日の朝飯食し終ねしことありき。摺鉢ゝ食を入れ與ふれば。快く食す。夫より人相も大ゝ變じ。全く犬の如し。夜中犬の聲を聞くときゝ。必。飛び出だを。日ごろ犬を殺しゝ祟と。皆人傳へ云ひき

寛永元甲子の歳二月上旬より。諸國ゝ自然と伊勢踊大ゝ流行す。泊舟傳馬人夫と號し。太神宮を送り来る。耕作を妨け措生業。費精力。此事達上聞ければ。則吉田家ゝ可相尋とて。子細を板倉勝重。同重家方へ嚴命有り。則板倉より吉田家へ申し遣を。吉田某按諸傳曰。伊勢國度會郡内外の神を鎮めしより。四時の祭禮不怠。然るゝ。内外の神何を以て飛びたまゝん。是等の事。諸民の兒戯。生者のものゝかぞとをる所ゝ非ぞと云ふ。將軍家。尚。御僉議あり。去る慶長十九甲子年。神踊京より始めて駿州ゝ至りぬ。東照大權現嚴禁せられし所。程無くして大坂兵亂。又元和二丙辰年。春の頃。伊勢踊流行を。後果して東照大權現御他界あり。先兆を考ふるゝ。皆是不吉の兆なりとて。御評定一決して。彼邪神を野外ゝ送り捨つ。於是人馬の勞弊止むといふ

嘗て民間ゝ琵琶笛流行し。其弊都下ゝ亦流布せり。石屋と云ふ人有詩。又有序。戯ゝ記之

笛本津輕民間玩器。或呼爲津輕笛。近日都下童輩盛玩之。其制鐵片三寸許。拗成成環。環之兩端所餘各寸餘。展成雙股。削鋭如錐。環内植舌。精鋼薄片爲之舌。長於股三四分。少鉤上向。口横銜吹之。指肚連鼓。舌鼓與吹桐成音。其音錚々有似琵琶。蓋因以得名云。文獻通考云。民間有鐵葉簧。豈簧之變伴歟。余因謂。琵琶笛豈鐵葉簧之又變者歟。戯作詩録之。在昔武伯蒼汴州聞角。詩曰。單于城上關山曲。今日中原總解吹。余則非必有此感而作也

裂石餘聲尚可尋。誰衒寸鐵學龍吟。尖形半噤金鴉嘴。巧舌全磨玉女針。風珮鏗鏘成急調。綿弓嘈囋送繁音。抹挑都在兒童口。解否潯陽曲理心

乾齋評之曰。當今天下之害。莫如於夷狄。嘗夷狄寇於海濱。知幾君子豈無數乎。夫琵琶笛者。軍中之所用。今自然吹之。有嚴命禁之。宜哉

文政八年乙酉孟春朔　　乾齋中井豐民識

琵琶笛童稱訛りて。ビヤボンといふ。文政七年甲申の冬十月上旬より。江戸中流行を。春に至りて彌甚し。その製作鐵をもてす。一笛の價。錢百文より銀五匁に至るものありといふ。大小の搦物等。多くこれを擬したり。その他。新作のおとし咄も。駱駝とゝもにこの事多し。又小うたにも作りてうたへり。遂に風俗の爲よろしからざるよしにて。八年乙酉の春二月。禁止せらる。いまだいくばくもあらずして。松風こま流行し。同年夏四月に至りて。又雲雀こまといふものを作り出だせり。ひばりこまは真ちうをもてこれを作る。その價。六十四文。松風こまは。むしめは竹。或は鯨の髓にて作り。後にてちりめんの裂に

てもつくれり。その圖は耽奇漫錄中にあり

○虛無僧御定

一日本國中虛無僧之儀は。勇士浪人一時之爲。隱家之不入守護之宗つゝ依之て。下々家臣諸士之席に可定之條可得其意事

一本寺へ宗法出置たる其段。無油斷爲相守可申候。若相背者於有之は。末寺は本寺も。虛無僧は其寺より急度宗罪に可行事

一虛無僧之外。尺八吹申者於有之は。急度差留可申事。尤懇望之小寺は。本寺より免し出爲吹可申候。勿論諸士之外。下賤之者へ。一切尺八爲吹申間敷候。尤虛無僧之姿爲致申間敷候事

一虛無僧多勢集り。遊意申合者於有之者。急度遂吟味。本寺并番僧に至迄可爲重罪事

一虛無僧托鉢修行之者。同行二人之外許不申候事

一虛無僧渡世之義。所々專と仕之候。其段差免申候。一編修行之内。於諸國々法抔と申虛無僧。麁末麗外之體。又は托鉢等に障。六ヶ敷義出來候はゞ。子細改本寺へ可申達候。於本寺不相濟之義は。江戸奉行所へ可告來事

一虛無僧托鉢ニ罷出。或ハ道中宿往來所々何方ニても。天蓋を取り人ニ面を合せ申間敷事

一虛無僧托鉢之節。刀脇差幷武具之類。一切爲持申間敷候。總而いかつかましきなり形致間敷候。尤一尺下之刀物爲懷劍と差免可申事

一虛無僧勇士之道。敵體尋廻國抔之義も有之。依而芝居渡舟等ニ至迄。往來自由ニ差免之事

一似虛無僧於有之ハ。急度宗法ニ可行候。若又賄賂を以見遁し抔致候ハヾ。番僧ニ至迄可爲重罪。總而猥ニ無之外可申付事

一托鉢ニ罷出。下賤之者之痛を不顧。托鉢不可致勿論。辯舌を以。遊興賄賂預饗應事。堅停止。總而正道一已之情無之者。本則を取上可申候事

一虛無僧自然。互ニ敵ニ候ハヾ。還俗申付。於寺內勝負可爲致候。勿論諸士之外。一切不差免之鼎負を以片落なる取扱堅停止之事

一諸士人を切。血刀提寺內へ逃込候共。留置子細を改不寄何事。武士之道ニ候ハヾ。宗法ニ可仕候。科有る人ハ。一切隱置申間敷候。若隱置後日ニ顯候ハ。難道義ニ付。早速繩を掛差出可申候事

一虛無僧ニ罷出敵討仕度者於有之ハ。其段子細相改。差免可申候。乍併多勢相集申間敷候。同行一人ハ免可申候。諸士之外一切不差免事

一往來之節。馬駕籠一切無用。所之關所番所ニ而ハ無沙汰無之樣。本寺より之本則。往來出爲相改通り可申事

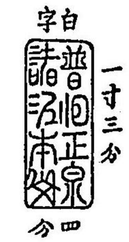
一住所ニ離れ。他國所々城下幷町。托鉢修行滯留一日之外。堅無用。若鳴物停止等告來候ハヾ。宗門傳學之虛無僧之外。吹申間敷事

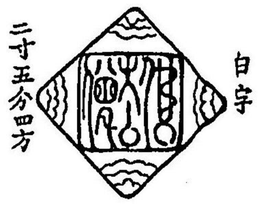
一虛無僧之義ハ。天下之家臣諸士之席ニ相定候上ハ。常ニ武門之正道を不失。何時ニても還俗申付候間。表ニハ僧之形を學。內心ニハ武者修行之宗法と可心得者也。爲其日本國之內往來自由ニ差免置候樣。決定如件

慶長十九年戊寅正月

本多上野介　在判
板倉伊賀守　在判
本多佐渡守　在判

右上意之趣。相渡申候間。奉拜見。會合之節能々爲申聞可爲守者也





尺八

普化常於街市搖鈴曰明頭來明頭打暗頭來暗頭打四方八面來旋風打虛空來連架打臨

今侍者去

幾見如是道便把住曰總不與麼來時如何普化拓開曰來日大悲院裡有齋侍者回舉似濟曰我從來疑者這漢

夫尺八者法器之一也謂尺八大數也取三節之中定上下之長短各有所表三節者三才也上下之二竅者日月也表裏之五竅者五行也此是萬物之深源也吹之則萬物與我融冥而心境一如也

天蓋

夫天蓋者莊嚴佛身之具也故我門準擬之也

靈山一月影　輝萬派

普化孤風德　馥三州

下

總國葛飾郡　風早莊小金

金龍山梅林院

一月寺

文化八年辛未年五月

院代
傑秀看我

朱字一寸四分 ヨコ五分

白字 八分 七分五厘 朱字

授與何某

白字 一寸二分四方

本則の紙ハ島の子半切大六寸七分 表包帝ハ非人紙立三ツ折ニテ

尺八曲名

無礙院　虛空　靜攪　瀑布音　休憩　厭足

百十八

座草　善哉　賤子　意子　雲井　興
夕暮　波間　獅子吼　盤涉　虛靈　巢鶴

右十八曲

倫絶　樗骨　鈴菅挑

凡二十一曲是を表組といふとぞ

此外に猶裏組もあるよしなれど。いまだゆるしなければ。あらざるよし。右十八曲の中に。こくうといへる名二つあり。むじめにあるは。普化禪師相傳の曲にて。あとのは後人の作りし曲なりといへり

文政八年正月朔

文寶堂ある す

○湯島手代町に岡田彌八郎といひて。御普請方の出方をつとむる人あり。此人のひとり娘。名をせいとよびて。容儀もよく。殊に發明なれば。兩親のいつくしみふかく。しかも和歌に心をよせ。下谷邊に白巻齋といふ歌よみの弟子となりて。去年十四歳にて。朝がほのうたをよみしが。よくとゝのひたりと。師もよろこびける。その歌

いかならん色にさくかとあくる夜を。まつのとぼそのの朝顔の花

其冬。此むすめ風のこゝちにわづらひしが。つひにとかなく成りにけり。兩親のなげきいふべくもあらぜ。朝夕たゞ此娘の事のみいひくらしが。月日とかなくたちて。ことし夾の秋。かの娘の日頃よなれし。文庫の中より。朝顔の種出でたり。一色づゝにこれいしぼり。あるいるりなど。娘の手して書き付け置きたる。つゝみをみて。母親猶更思ひ出でゝかく迄おるし置きたる事なれど。庭にまきて。娘のこゝろざしをもてらさんとて。ちいさなる鉢に種を蒔きて。朝夕水そゝぎなどしたるほどに。いつしか葉も出で蔓も出でたれど。花に一りんもさかざりければ。をこし時刻おくれにまきたるゆゑ。花のさかぬ成るべし。されども。秋に秋草の花さかぬ事やいとて。さまゝにやしなひしが。さらに花の答だになし。ある日。父彌八郎に東えい山の御普請場へ出でたるあと。母に娘が事のみにすれかね。朝顔を思ひながら。うつら〳〵とねむりたるが。娘の聲にて。おかゝさま花がさきましたといふに。驚きさめぬ。あまりいぶかしく思ひけれど。朝顔のそむへゆきみれど。一りんさき出でたり。いよ〳〵あやしと思ひて。夫彌八郎が歸るを待ちかねて。此よしをもかたり。花をも見せしよし。此てを。晝後にさきて。翌朝までおぼまずして。ありとなん

右は文化十二乙亥年の事なり。花のさきしは。翌子年なり

文政乙酉孟夏朔　　文寶堂おるを

○駒込富士之由來。并加州御屋敷氷室之事

江戸本郷加州御屋敷氷室の場所は。慶長八癸卯年六月朔日。雪ふりたる所也。其雪富士の形につもりたるゆゑに。其所へ淺間の宮を造立し。毎年六月朔日まつりをなを。其比。本郷に桔梗屋何がし。水野兵九郎。源右衛門といふもの三人にて。萬の事を取りてからひけるとぞ。其後右淺間の宮の所も。加州御やしきへ圍ひこみとなりても。以前のごとく參詣ありて。御屋敷の御門を出入しけるを。いかゞおもきとて。同所御弓町真光寺へ。淺間の宮を引き移されしが。此地不淨なりといふ夢の告ありしによりて。程なく駒込の原へ遷座あり。今の駒込の富士これなり。駒込へうつされしは。寛永三戌年なり。享保二年六月朔日より。鐵砲洲船松町より。毎年五月晦日の夜。かけ念佛にて駒込富士へ萬度を一本持ち來りて。これを納むる事。今にたえず。此事はいかなるゆゑにか。猶たづぬべし

此一條本郷六町目駿河屋喜太郎話なり

①遣鐵職分由緒之事

人皇八十九代御帝龜山院様御宇上北面ゟて

北小路左兵衛藤原朝臣基晴卿

故有之。流浪長門國下之關邊居住。子息三人有之。嫡子北小路大藏亮。藤原基詮右四人流居之内。吉岡久左衛門以分抱爲渡世。大藏亮太物賣。兵庫亮染物師。采女亮儀ハ父基晴卿爲養育髪結職と相成。難顯面體往来住宅雨落より三尺張出し御免ゟて。長暖簾四尺二寸。縦下五寸。鏡障子三尺寸法と相定致。渡世の内。父基晴卿經年月死去之後。關東鎌倉繁花の時。居住桐ケ谷ゟて。松岡と號し。采女亮七代之孫。北小路藤七郎從美濃國岐阜。元龜天正之比。流浪於遠江國比久間味方ケ原東照大權現様甲駿信之押。武田太膳太夫無信濃守法蛙院機山兵德得榮晴信入道大僧正信玄と御一戰被爲有比者。元龜三壬申年十月十四日。東海道見附驛之間道一言坂より池田迄。及夕陽總御同勢共。濱松之御館へ御引揚被爲遊候時。其日大風雨ゟて。東海道天龍川滿水ゟて。渡船難相成ゟ付。渡守仕候者共。我家々へ引取り。川端ゟ壹人も不居合。御渡船難被爲游候。然る所ゟ北小路藤十郎行掛候ゟ付。奉蒙嚴命。尤水練功者之事故。奉畏則淺瀬踏ゟ

御禁内奉申上候。右ゟ付無御難。濱松之御城ゟ御引揚相濟。御悦喜有之。以来諸國關所川々渡場等迄。無相違御通し下置候なり。尤其節後殿之義。本多中務太輔忠勝殿被相勤候事。猶又其後三河國碧海郡原之郷迄。奉御供其砌蒙嚴命。東照源太神君様奉揚御髪。當座之爲御褒美金。錢一錢。御笄一對。榊原式部太輔康政殿。御取次を以頂戴之。以采結髪之總名を一錢と可唱者也と。蒙仰直ゟ御暇被下置流浪して。一錢職分渡世致来候處。其後慶長八卯年關東武場へ德川様御入國被爲有。其砌一錢職分藤七郎。東武繁花之地と相成候ゟ付。武藏國芝口海手邊ゟ罷出居住渡世致来候所。其刻預御召。先年之爲御褒美。青銅千疋。伊奈熊藏殿御取次を以。頂戴之。愈益一錢職分致来候處。其後萬治年中。嚴有院様御代。北小路藤七郎四代之孫。北小路總右衛門。神田三河町へ引移居住。御府内一錢職分株數御願申上候處。御亂の上。由緒有之ゟ付。御取立被爲遊。御公儀様御朱印被下置。株數被成下。其上尚御燒印之御下札等。頂戴之仕候ゟ付。株數稍ひ一錢職分渡世相續致来候處。其後享保年中。有德院様御代。東都御町奉行大岡越前守様御役所へ諸職人被召出。株數有之者共。夫々之御役義被仰付。其砌。一錢職分之者へハ。先年神君様天龍川御難儀之刻。淺瀬御禁内奉申上候由ゟて。御役義御免と被

仰出候得共。一錢職分之者共。一同株數被下置候。爲冥加相應之御役義奉願上候ゝ付。則御聞濟有之。以来出火之砌。兩御町御奉行所へ欠付。御記錄入御長持御役義相勤株數渡世相續致来候事

相嫡男幸次郎依幼年。不辨於職分由緒。與書者也

享保十二丁未年九月十二日　北小路宗四郎藤原基之

前書之趣ゝ付。諸國諸武家落人百名以上之面々。虛無僧と一錢職分ゝ相成忍渡世ゝて。先君へ召通し。可相待者也以上

慶長八卯年

大御所樣於御前。本多上野介正純を以。東都酒井讃岐守殿へ仰渡置。此段道中奉行松浦越前守殿へ。被仰達置候事。仍而如件

右髮結職と相成。劍鹽持參して渡世之事ゝ。萬治元年八月十六日よりむじまりしといふ

○兩國藥研堀うなぎや草加屋安兵衛ゝ。紀名虎が末流のよし。娘ゝ松平越中守殿ゝつかへけるが。あるとしの冬の夜。此娘御側ゝ侍りける時。折ふしあられ降り來りければ。守の殿。此音を聞き給ひて。かゝるさむけき夜も。今泰平の御代ゝ生れあひぬれば。寒き事もおぼえぢ。かくゆたかゝあることそ。實ゝ有りがたき事なれと。仰せられて

こての上ゝふりし世まらであつぶをまかさねて夜の殿をぞきくと。詠み給ひて。

其方も紀氏の末流なれば。即詠せよと仰せありける時。此むすめ

あつぶをまかさねても猶さむき夜ゝ道ゆく人の聲ぞきこゆる。後ゝ此娘御いとま給ゝりて。牛込御納戸町近江屋半三郎といふ者のかたへ嫁すべき時ゝ。殿の御歌

一かたゝ心さだめよ小夜ちどりいづくの浦は浪風ゝなきといへる御歌を給ゝりきとなん。此安兵衛の遠祖ゝ駿河大納言ゝつかへ奉りて。其比。堀田三郎兵衛といひしよし。君御生害の後。武州草加ゝゆかりもとめて。百姓となり居たりしかば。今の安兵衛より三代まへの事なりといへり

右白川侯の御歌ゝ。鎌倉の右府實朝公の御歌ゝ

武士の矢並つくろふこての上ゝ霰たばしる那須の志の原

續後拾遺集ゝ見えたり。此歌を思し召し合せ給ひて。よみたまひしなるべし

先祖堀田三郎兵衛。大納言の君御生害の後追腹もきらぢ。のらりくらりと百姓

になり。今の安兵衛に至りて。うなぎやとなりしに。先祖が脛をきらぬかいりに。
今うなぎの脊をさくもをかし

○古狸の筆蹟

世に奇事怪談をいひもて傳ふること。多くは狐狸のみ。貒狢猫の屬ありといへども。これに及ばぬ。思ふに狐の人を魅(バカ)を事甚害あり。狸の怪はしからぬ。かくて古狸のたま〳〵書畫をよくすること。世人の普くしるところにして。已に白雲子の芦雁の圖は。寫山樓の藏にあり。良恕のかける寒山の畫は。謹園主人示されき。その縮本今載せて耽奇漫錄中に収めたり。これまさしく老狸の畫けるものにして。諸君と共に目擊する所なり。しかるに。その書をかけることを予嘗て聞けるは。武州多摩郡國分寺村。名主儀兵衛といふ者の家に。狸のかきたりし筆跡あり。三社の託宣にて。篆字。真字。行字をまじへ。文章も違へる所ありて。いかにも狸などの書たらんと見ゆるものなるよし。これは狸の僧のかたちに化けて。此家に止宿し。京都紫雪大德寺の勸化僧にて。無言の行者と稱し。用事はすべて書をもて通じたり。邊鄙の事故。有り難き聖のやうにおもひて。馳走して留めたりといふ。その後武藏の内にて。犬に見咎められて。くひ殺され。狸の形をあらはしゝとのことなりとぞ。その頃。此事を人々にも語りしに。友人鹿山の同日の談ありとていへらく。予往年鏹倉に遊びしとき。川崎の驛に止宿し。問屋某の家に藏をる所の狸の書といふものを見たり。不嶌不崩南山之壽と書けり。その書體。八分にもあらぬ。真行にもあらぬ。奇怪言ふべからぬ。いかにも狸の書といふべし。問屋の話に。鏹倉の邊の僧のよしにて。其あたりを勸化せし事五六年の間なり。果は鶴見生麥の邊にて。犬に食はれしよし。此事はさのみ久しき事にあらぬ。予が遊びし十年も前の事なりといふ。此二條その年月を詳にせぬといへども。今その墨跡の現にその家に存したれば。疑ふべからぬ

因に云。五雜俎曰。狐陰類也。得陽乃成。故雖壯狐必托之女以惑男子也といへり。吾邦にもむかしより。とかくに狐は婦人に化けたるためし多かり。しかるに。狸はいかなる因緣かありけん。茂林寺の守鶴を始めとして。いつも〳〵法師の姿になれるもをかしからぬや

又いとちかき年に。一奇事あり。或人の筆記に。文化四年丁卯ある人のもとにて。狸のかける書といふものを見たり

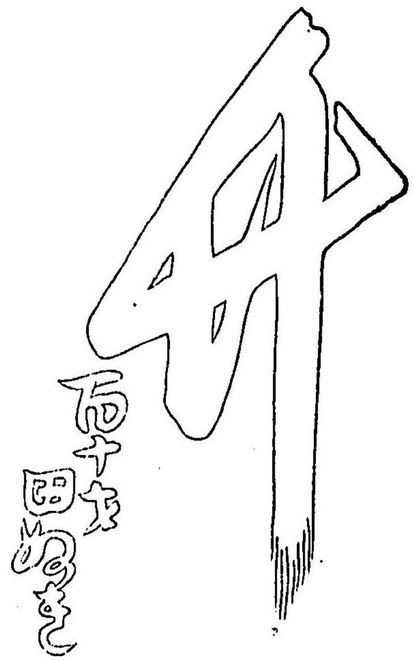
此書をもらひし書通あり

此間。御話申上候。たぬきの事。被仰下致承知候。則書付入御覧候。乍然是ハ此方ヨ
て願掛致候間。願之叶候と申事ヨも無之。あの方へ參り直ヨたぬきへ願申候と申
事ヨ御坐候間。此段篤と御相談被成候て。御願かけ可被成候。委細ハ左之通御坐候

下總國香取郡大貫村藤堂和泉守様御陣屋

陣屋奉行　猿山源兵衛

悴　要分



右之所ヨ御坐候成田へ御參り候道より。餘ほどより候由。江戸より廿二三里御坐
候由。成田之道ヨて承り候得共。人々存罷在候よし
先方へ參り候ても。みだりヨハたぬきヨ逢候事出来不申候

代官　増田武四郎

江戸藥研ぢりヨてみの田吉右衛門

當時隱居

有　甫

右之仁。如何の譯やら。たぬきと懇意之由。下谷之去る御屋敷方より先日人被遣候
節。右有甫より手紙もらひて參り候と申事御坐候。是ハ只一通り見物ヨ參るヨて。
願かけヨハ無御坐候。咄之通至て奇怪之咄御坐候。近所之者抔ハ病氣と申し。願ひ
參候ものも見かけ候と申事故。御人ヨても被遣候ハヾ。右之有甫より手紙もらひ
不申候而者。陣屋之事ヨ御坐候間。内へハ入申間敷被存候。外ヨ餘り知れ不申様致
し候よしヨ付。江戸より參候と申候而者。中々たぬき殿へ逢せ候事出来間敷候間。
此段能々御考御願かけ可被成候。やがて神ヨ祭り候と申事ヨて。實見大明神と申

名を付候て。祭り可申と申事之由。咄承り申候
真に右之通御坐候。右之名にて願掛可被成候
三月朔日當賀　　中久喜
宇兵衛様

右一條いと近き事ながら。世上に知らるゝを嫌ひて。深く秘めかくしゝまや。尊をだに聞かざりし

附けて云。中橋にすめる醫生の。いとも狸を好める癖ありて。みづから名を狸庵としも號のれる人ありて。書に畫に何くれのものにても。狸とだにいへば。求め得て藏めもたるよし聞けり。且そのことにしたる隨筆めくものありといへど。予はいまだ見るに及ばぬ。これらの事も載せたりやしらぬ

文政乙酉五月朔　　山崎美成記

○老狸の書畫譚餘

下總香取の大賀村。藤堂家の陣屋隷なる某甲の家に棲めりしといふ。ふる狸の一くだりは。予もとやく聞きたることあり。當時その狸のありさまを見きといふ人のかたりしは。

件の狸は。彼家の天井の上にをり。その書を乞はまくほりするものは。みづからその家に赴きて。ちか〳〵とこひねがへば。あるじそのこゝろを得て。紙筆に火を鑽りかけ。墨を筆にふくませて。席上におくときは。ちばらくしてその紙筆おのづからに閃き飛びて。天井の上に至り。又ちばらくしてのぼりて見れば。必。文字あり。或は鶴龜。或は松竹。一二字づゝを大書して。田ぬき百八歳とあるしゝが。その翌年に至りては。百九歳とかきてけり。是によりて。前年の百八歳は。そらごとならぬと。人みな思ひけるとなん。されば狸は天井より折ふしはおりたちて。あるじにちかづくこと常なり。又同藩の人はさらなり。近きにたりの里人の日ごろ親みて來るものどもは。そのかたちを見るもありけり。ある時あるじ戲れに。かの狸にうちむかひて。なんぢ既に神通あり。この月の何日には。こが家に客をつどへん。その日に至らば。何事にまれ。おもしろからんにざをして見せよかしといひにけり。かくて其日になりしかば。あるじまらうどらに告げていはく。某嚮に戲れに狸に云々といひしことあり。されば けふのもてなしぐさには。只これのみと思へども。渠よくせんや。今さらに心もとなくこそといふ。人々これをうち聞きて。そはめづらしき事になんと。くせよかしとのゝしりて。盃をめぐらしながら。賓主かたらひくらを程に。その日も申の

頃になりぬ。かゝりし程に。數座の庭忽廣き堤になりて。その院のほとりにゐ。くさ〳〵の商人あり。或ゐ葭簀張なる店をまつらひ。或ゐむしろのうへなどに物あまたならべたる。そを買ゐんとて。あちこちより來る人あり。かへるもあり。賣り物のさゐなる中に。ゆで蛸だこをいくらともなく簪にかけたしゝさへ。いとあざやかに見えてけり。人々おどろき怪みて猶つら〳〵とながむるに。こゐこの時の近きにたりて。六才にたつ市にぞありける。珍らしげなき事ながら。陣屋の家中の庭もせの。かの市にしも見えたるを。人みな興じて。のゝしる程に。漸々にさえうせしとぞ。是よりして狸の事をちこちに聞えしかば。その書を求むるものゐさらなり。病難利慾何くれとなく。祈れば應驗ありけるにや。緣を求めて詣づるものゝおびたゞ敷なりしかば。遂に江戸にもそのよし聞えて。官府の御沙汰に及びけん。有司みそかに彼地に赴き。をさ〳〵あなぐり亂しゝかども。素より世にいふ山師などのたくみ設けし事にゐあらぬに。且大諸侯の陣屋なる番士の家にての事なれば。さして咎むるよしなかりけん。いたづらにかへりまゐりきといふものありしが。虛實ゐあらむ。是よりして。彼家にてゐ紹介なきものを許さず。まいて狸にあゐをる事ゐ。いよ〳〵せむと聞えたり。これらのよしを傳聞せしゐ。文化二三年のころなりしに。このゝちゐいかにかあけん。七十五日とせにいふ如く。尊もきかぬなりにけり。此ころ。兩國廣巷路にて。狸の見せ物を出だししとありしに。彼大貫村なる狸の風聞高きにより。官より禁ぜられしなり

抑北峯子の爲に。この一條を追書すること。聊緣故なきにあらむ。本月朔日の小集ゐ。己が庵にてあるじせんとて。かねてより契りしかば。北峯子。乾齋子いちはやく來りつる折。北峯子予にいふやう。さてしも例の事ながら。けふ己がかきあるして。もて來つるゐめづらしげなき事なれども。狸の書きたりきといふ文字を影寫して來つるのみ。ありしふでもあるものぞ。披講の折に見給へといはれたり。予これをうち聞きて。されば。とよ。文化のてしめ。江戸近鄕なる人の家にをめりしといふ狸の。をちこち人の需に應じて。字を書きて與へしことあり。その故ゐ云々なりとて。上にあるせし趣を詞せゐしくかたりいづるに。北峯頻に領きて。己がけふ影寫して來つといひしも。その狸の筆迹なり。さばれその事ゐわが總角の時なりければ。さるつばらかなる事ゐ得聞かぞ。ねがふゐ。己が書篇の末に書きあるしてたびねかし。わが物せんゐかたくもあらねど。傳聞にゐあらぞもあらん。ようし給へとそゝのかされて。まづ北峯子の披講を聞きつ。又その狸の書を見るに。最に予が聞

きたるも。これ彼暗合したるによりて。さてゝ予が聞きたりしも。まことによてありけりと。又さらにおもひなりて。これらのよしをあるものみ。世にいふ餘計の仕事に似たれど。心ざまのあへるどちをひとつ穴なるむじなといへば。狸の事にもかかりの事しもあらんと自笑して。諸君の書寫の紙かぎをかさぬるゝ。をこならんかし

因にいふ。北峯子の末篇にあるされし狸庵にゝ。予も一兩度たいめんせしなり。渠が當時の本宅にゝ。中橋なりしか。よくもあらねど。年来。芝新橋の橋つめにさゝやかなる秤店を出だして。賣卜をもて活業にせしものなり。寛政中。予ゝ伊東蘭洲に誘引せられて。そが店に赴きて。畜ひおける狸を見し事ありけり。この時ゝ。狸二三頭を。前を竹篇子にせし箱に入れて。その座右に置きたり。毛いろのいさゝか異なるを。いかにぞやとたづねしに。一頭ゝ玉面狸なり。その餘ゝよのつねなるものなりとて。ほこりかにときに示しにき。このゝち文化の初にや有りけん。誰やらが書畫會の席上にて。又彼狸庵に面をあゝせし日。渠が年来秘藏すと聞えたる狸石を携へ来て。予にも見せ。人々にも見せけり。その石ゝまろくして。長さゝ纔二寸に足らず。薄青白なる石のうちに。黒く三四分ばかりなる狸のかたちあり。是天然のものにして。さながら畫ける様に異ならぬ。見るもの嘆賞せざるゝなし。只是のみにあらぬ。そが煙包(カヤイレ)の諸飾紙裏(カヤイレ)のかな物なんど。すべて狸にあらぬてなし。又好みて狸の寫真をよくせり。予その畫きたる狸を見しに。形狀毛色分釐をたがへぬ。畫ゝ唯狸をのみよくして。その他のものを畫かぬといひにき。予が爲にも一ひら畫きて給はれといひけれども。この頃ゝ著述にいとまなき身なればとゞかりにして。ふたゝびもとめぬ。今さら思へば。後このかたりくさにもなるべきに。畫かせざりしを悔ゆるも甲斐なし。その畫ゝ今も。もてるものあらん。狸石ゝ誰が手に落ちけん。あれるものにたづぬべし。人の嗜慾のくさ〳〵なるそが中にも。王子歌が竹をこのみしゝ。秀色清風をめづるなり。綱弘景が松風を好みしゝ。閑雅の餘韻をめづるなり。又劉邕が瘡痂(カサブタ)を嗜みしゝ。多くあるべきことならねども。そも口腹の爲ならばいかゞゝせん。ひとり狸庵が一生涯狸をのみ好みたる。すくせいかなる因果にか有りけん。是も一個の畸人ならぬや

寛政中狸のをんなにむけたるが。夜なゝ山の宿の辻に立ちて。人をたぶらかし。

そのゝち堀の船宿。西村屋の庭なる青樹のほとりゝ穴してをりしを。彼處の船宿どもうちつとひて。生捕たることの趣い。去歳の冬。海棠庵ゝて大かたいかたりき。さゞれまさしき事なるゝいまた聞かざりしとのゞらもあなれば。これも亦のち〳〵ゝ別ゝあるして披講をべし。こゝゝまい只北峯子のいいざるを補ふのみ

乙酉仲夏初三

著作堂

雲萍雜志

そのゝち堀の船宿。西村屋の庭なる青樹のほとりゝ穴してをりしを。彼處の船宿どもうちつとひて。生捕たることの趣ゝ。去歳の冬。海棠庵ゝて大かたゝかたりき。さゞれまさしき事なるゝいまた聞かざりしとのゞらもあなれば。これも亦のち〳〵ゝ別ゝあるして披講をべし。こゝゝゝゝ只北峯子のいゝざるを補ふのみ

乙酉仲夏初三

著作堂

兎園小説 第五集 終

雲華禅志

柳澤里恭小傳

○柳澤里恭小傳

里恭字ハ公美淇園また玉桂と號し權太夫と稱せり大和郡山の城主柳澤氏の一門なりき性豁達豪放ニして小節ニ拘らぎ才ニ富み藝おゐく管絃を善くし書畫ニ巧ニして其の名を得しもの十六技ありきといふ又佛學をさへ究めたりと見えて倶舍論を聞きし僧もありけりとか中ニも畫ニ長じ朱舜水傳來の彩色法を紀の祇南海ニ學びて出藍のほまれを得たり殊ニ其の設色法の妙ニ至りてハ水ニひたし力を用ひて揉み洗へどもおちぎといふ又甚客を好み貴賤を論ぜぎ才と不才とを問ハぎ巷閭無頼の徒と雖も厚禮引接して食客とし日々その藝術を試みて樂としたり常ニ寄食をるもの數百人家祿おほけれどもこれが爲ニ清貧なりきとぞ當時池野九霞(大雅堂)書畫を以て京師ニ鳴れり意氣相投じて往來つねニ絶えざりきある時九霞大和ニ遊びて路費既ニ乏しより て里恭を訪ひぬ里恭大ニ悅びて門をとぢて歸を許さぎこの時家臣九霞ニ請うていて く我が主此頃内を好む君幸ニ之を諫め給へといふ九霞許諾してやがて里恭ニむかひて卿ニが言ニ從ひ給ハぎ止まんさらぎば速ニかへらんといふ里恭首をふりて諫ニも從ふまじ又かへしもせじとて益家人ニ或しめて門戸を護らしめぬ九霞も困じたりけ

ん密に垣を踰えて逃れ去りさとぞ里恭職に居て一日も懈らぜ一藩これを稱せりかつて僮僕數人を從へて騎して行くに偶丐女の絃歌して錢を乞ふものあり里恭その三絃をとりて一曲を彈じ忻然として金を與へて去りぬ其の豪放想ふべし凡なを所人の意表に出でしい王子猷に似たりともいふべく客を好みしい鄭莊孔北海の風ありともいふべきか本書の外にひとりねといふ隨筆あり共にその筆流暢にして記事亦頗風韻ありほゞその人の風采を視るに足らんか

雲萍雜志序

柳淇園之爲人。天資風流温雅。而猶且胸中之洒落。世以所知也。常以書畫所交遊一時有名之士。無不往來者。都鄙藝苑之客。無不識淇園者。其平生隨聞所錄。積年重日二十餘卷。多是勸懲之話說也。手澤之本。遂爲予藏弆。頃中井某者撮其旨趣。補其缺略。題曰雲萍雜志。予曾每閑暇。寓目則如對其人焉。聊辯數言於卷端云

丙辰之秋日　　浪華蒹葭堂主人恭識

予が性遊歴を好み。名勝を探る癖あり。西遊れ折から。浪華の蒹葭堂を訪ふ。雅談晷を移さゝ至る。時ゝ主人一書を出だし。こい柳淇園手澤の隨筆ゝて。いとおもしろきものといへり。予受けてこれを讀むゝ。世のいましめ。人れをしへともなるべきことゝ少のらず。手巻をもおつこととあさむだ。やがて一本をうつしろへり。ひめをさめしを。此ごろ書肆れもとめゝよりて。再びよみろうがへあたへぬ。桃花園のあるゞ識

雲萍雜誌

柳澤淇園著

○京ゝて大佛の餅饅頭流行し。こゝかしこゝて商ふうちゝ。四條畷ゝこの饅頭を鬻ける。近江上味といふものあり。或時店先へ乞食来りて。饅頭を十ぢかり賣りて給ゐれといふゝ。主人いで来て。非人ゝゐ商ひせぢと云ふ。乞食のいへるゐ。我等とても同じ人なり。錢をもて買ふゝ。商ひものをいかで賣らざるか。この理を聞くべしとて詈りけれども。主人ゐ聊挨拶もなくて居たりけるが。詈ることのあまりゝてげしければ。主人みせ先へいでゝ。さらばその譯申し聞すべし。下ゝ居れとて。乞食ゝむかひ。汝等ごとき乞食ゝ賣らぬといへる。その子細ゐ乞食となりて。かやうの菓子を食ゐんとおもふ不所存いてんかたなし。無益なれども耳あれば聞きおくべしと。乞食がかぶりたる手拭取り捨て。我あきなへる饅頭ゐ尋常の製ゝゐあらず。殊ゝ上品ゝ造りて。高貴の方へも奉る菓子なり。左あらば。乞食などの分際ゝて食ふべき品ゝゐあらざるなり。汝もしわが家の菓子を食ひたく思ゐば。人なみ〳〵のものとなりて。後ゝ求めゝ来るべし。汝諸人のあゐれみを蒙り。あづか

に露命をつなぐ身を以て。錢あればとて。上菓子を食ふことのあるべきや。世をおそれざる不屆の族なり。とく〳〵行くべきなり。須臾も店先を塞ぐべからずと。いたく叱りて追ひ立てければ。かの乞食ゐ頭をかゝへて。何處ともなく逃げ失せぬ

○世を治め給ふ聖君賢主ゐ。一言以て天下の規則となれば。倫言汗の如し。出でゝふたゝびかへらざるの語あり。武家にも二言なく。一たびいひ出でたることを違へざるゐ。侍たる人の常なり。さあるに。農夫町人など。大かたの人と。武士に二言なしといふことゐ知りつゝ。我等ふぜいゐと已より不料簡をそへて。きのふ約束したる詞も。けふ違ひ。今いひたるをも。後にたがへて。義理をかく輩少からぎ。たとひ農夫町人たりとも。義を守ることなければ。おのれ〳〵が家もとゝのとざるなり。ある家のあるじ。五十五歳のころ。妻の身まかりけれむ。後妻をむかふるに。年いとわかし。客の悦びに来りて。酒宴を催を折から。その子廿六歳にして。後妻ゐ廿五歳なりけるが。二人とも其席に出でゝともに客をもてなをにぞ。主人酩酊のうへにて。坐興に乗じて云ひけると。我等五十五歳にして。廿五歳の妻を持つことまことにおとなげなしといへども。緣のいたすところにして。よりどころあらざればなるべし。おかれば悴に對し。面目をも失ふことなり。かくならびたるやうをを見るに。悴が妻にして相應の年ごろなりといひけるが。いつしか後妻と。その子と終にひそかに通じて。家に居ること叶ゐで。他國へ奔りて。夫婦となれりとかや。その親かゝる一言より。若輩の心みだるゝ基とゐなれるなり。人ゐ多言を慎むべし。多言ゐやぶれあり。譏をもとめ。身を亡をゐ口なり。農夫町人たりとも。一言以て知とし。一言以て不知とすゐ。古人の誡なり。つゝおむべし

○ある人時刻を知らん爲にとて。自鳴鐘を求めんとをるを。その妻是をとゞめていひけるゐ。明くれにかくる世話のみにあらぎ。くるひたる折からにゐ。その隙を費し。自鳴鐘のためにかへりて。時を失ふこと多からん。やめ給へといへば。さあらば庭鳥を飼べしといふに。その妻。又とゞめて云ひけるゐ。時刻ゐ人のうへにあり。汐の滿干もこれとおなじかるべし。自鳴鐘鷄を便りとをるゐ。勤めに怠るものゝいたをことなりと。夫を諫め。つひに雖をも飼ゐぎなりにき

○山科の隱士ノ貫ゐ利休と茶道を爭ひ。利休が媚ありて。世人に諂多きことを常にいきどほり。又貴人に寵せらるゝことをいたく歎きて。つねに人にかたりけるゐ。利休ゐ劾ときの心ゐ。いと厚き人なりしに。今ゐ志薄くなりて。むかしと人物かゐれり。人も二十年づ

ゝまして。志の變ぜるものまや。我も四十歳よりして。自ら棄つる志氣といなれり。利休い人の盛なることまでを知りて。惜いかな。その衰ふる所を知らざる者なり。世のうつりかいれるを。飛鳥川の淵瀬またとへぬれども。人い替いれることそれよりも疾し。かゝれば心あるものい。身を實土の堅まに置かず。世界を無物と觀して。輕くわたれり。みなさやうませよとまにあらねど。情欲限りあり。知れば身を全うし。知らざれば禍を招く。蓮胤い蝸牛まひとしく。家を洛中まに曳く。我い蟹まに似て。他のほれる穴まに宿れり。暫しの生涯を名利のためまくるしむべきや。いとをしくおもふといへりとぞ。ノ貫世を終ふる年。みづから書きたる短冊を買ひ得て。灰となし。風雅い身とともまに終るとて沒しぬ。無量居士と號す

○夫婦の中のあたしみも。禮あるうちい珍らかまして。その情至りて深く。又厚し。禮を失ふ時い。その情自然と薄くして。離別もまた遠きまあらむ。仁義遜讓て禮を厚うするの中だちまして。この禮。媚諂と春を合いま。智い痴とさしむかひ。誠い嘘と辭れる。さあれば心安だてと。愛想づかしい。いつも同居と知るべきなり

○長田の庄司が義朝を討ちしことを。不忠と書きたれども。長田の庄司て。尾張の野間の内海まに。平相國より領地を賜てりて居りける故。内海の庄司なり。義朝妻緣まによりて。庄司を便りとして。忍び居しこと不覺といふべし。庄司い高望王の裔まして。その祖勅勘のことまによりて。尾張まに配せらる。子孫内海まにのこりてありけるなり。義朝の臣鎌田兵衛。その後遁世して。西佛法師といふ。遠江の國まにありて。武藏相摸の間まに終るといふ。遠江まに鎌田兵衛が建てたる藥師堂遺れり

○洛の清水寺なる音羽の瀧い。應永年間まに新まに水口をつけて。此ところへ水を引きたり。そのむかして音羽山のうち。所々へ落ちたりといへり。此瀧を汲みて。湯あみするときい。瘡を愈をこと功あるをもて。諸人下流を汲めり。水上い東山の平より。こゝまに音羽の名をとゞろかを。田村の社て。清水寺のいまだ草創なき前よりあれば。地主權現と云ふ。觀世音い此社地を借りたるゆゑの名なり。庇を貸して表屋を取らるゝ世間のならひ。大坂まも此例多し。人も是とひとし。己れが産れたる地まに在りて。身を堅固まに修め。家を大切まに齊ふるとなりがたきまや。人みな他國まに出世するもの多し。故郷まに居る時い。己れが我儘をふるまひ。よろづ油斷して。身を過ち。家をも失ふ。他まに出でぬるときい。堪忍もいたをとゝなしまに堪へ忍びて。油斷なければ。おのづから身を治め。家をとゝのふ。かゝれば故郷まあ

りて。他國へ出でたる心を盡くさむ。身を損をる過少かるべし。田村明神は在世のみぎりも。人欲の私するを壅ひ給ひて。只世を救ふの御心淺からざりければ。庇をかして。表屋をとられ給ふことなどいとひ給はざるべし。凡。人は唯身を修めんことを專として。故郷をてなるゝことあるべからざるなり

○貴人まゐぎまの御遊と云ふは。人々つどひ給ひて。談話の中まで。ひと度は無言まして。戯れ給ふをいふなり。まゐぎまはまづまる間といふ事を略し。音便の詞まして。閑を守るなり。壺矢五寸乃至一尺を度としてものいふ時は。鐘を打ちならをと。何某の物語せられしことあり。今やこのわざ絶えてなしとぞ

○よきことをせんとをるは。いと難し。只あしきまゝ移るまじとだまし心を附けぬるこそ。執行なれ。執行はいつまでといふ限なし。身を終るまでをるを執行とを。あけて婦女子等は。おのれが一箇の料簡をもて。身を立てんことをたかりて。その親々の教ふる手かき物縫ふことなどをば後まして。音曲遊藝を習ひつるを。捨て置くは。親兄弟の過なり。是は人を便りとせざる育やうまして。縫つむぎの道ををらざれば。女の性をうしなふ。その智男より少きものゆゑ。おのれをたちて。よろづ嗜む事を專とせざれば。人倫まてづれたるふるまひ出で來たる。去れば。おのれ發明たりとも。つゝみかくして。人の發明を常の鑑として。身を守るべきものなり

○ある人文盲なるものを異見して。世の交は。他の事はいらぬ。唯堪忍の二字をよく守るべしといへば。文盲の人は。頭をかたむけ。かんまんと四字まて侍らぬやと。指をもてゐぞへ。御許まはおぼし違ひなるべし。かんまんと四字まて侍るといへば。異見せし人云ふ。愚昧の人かな。堪忍とてたへをのぶとよをて。二字なりといへば。又かうべをかたむけ。たへをのぶならば。又一字ふえたり。五字となり侍るべし。何と仰せあるとを。我等は四字とおもひ侍れば。四字まてかんまんはいたし侍るなりといへるま。その人又云ふ。汝が如き愚昧の文盲は。實まの諭しがたし。人まに似て虫同樣なり。おのれがまゝますべしと大まいきどほりなれば。文盲の人笑ひて。何とも仰あるべし。我等はかんまんの四字を知り侍れば。惡口せられても。少しも腹立侍らざるなりとて。笑ひ居しとぞ。その智まは及ぶべく。其愚まておよぶべからぬ

○江戸まて。予がをたしく交りし友まに。佐伯何某といふ人あり。書をこのみて。食事の傍まも見臺をすをて。書籍をひらき置きて見居けり。其行篤實まして。常まに机上まは書をひら

けども。決して疊の上まおかぞ。一冊たりとも本箱の出し入れをつゝしみて。是を藏きて取りあつかふこと。丁寧誠まに至れりといふべし。ある書林の店まに書籍をならべおきて。その上をまたぎ。或ゝ蹈こえなどもるを見て。かの書林ゝ出世なり難しといへり。又他の書商の客来りて求むる時ゝ。その書をいたぐきてゝ出し。いたぐきてゝ取り入るゝを見て。やがて上なき書肆となるべしとて悦びけり。朱文公が大學章句の序文まに。身を修め。人を教ふるの道まおいてゝ。いまだ必しもをこしく補なくんばあらぞと云ふ詞を見てゝ。涙をながして。人と生れてゝ。その志をところ儒者たらぞといへども。かくありたきものなりとて。只いく度もそのことのみをくりかへしてゝいひたり。此人の詞まに。大學まに能得とあるゝ。悟ることなり。悟るといへば。僧法師などの道だかりのやうまに心得たるものあれども。常の人まても五常をよく悟り得ざれば。身まも行ひ。人まも教訓さるゝものまあらず。世まに悟る者ゝ稀まして。只知りたる人のみ多しといへり。實まに確言といふべし

○世まに言行まに飾りあるものを見え坊とて。譏れども。見えゝまづ禮の端なり。見えなきゝ大かたゝ不禮なるもの多し。人ゝ自負するをもて。吾人ともまに勤むるゝ。自負も亦道具なるべし。自負まも。見えまも差別あるべし。ある人大酒を好み。放逸まして物まかゝそらぞ。唐土の劉伯倫。李太伯まならひて。人間一生醉ひて。此世を過ぐさんと思へり。東坡ゝ佇なければ。人をして俗ならしむるといへども。予ゝ一日も酒なければ。俗ならしむべし。とまもかくまも酒なるべしとて。飲ませだまをれば。日々まに五升まも及べり。此人まに何の功ありといへば。只酒飲むことを一藝と自慢して。外まゝ格別の能もなし。能なし猿が大酒ゐたりとも。何もおもしろき人といもべからず。劉倫。李伯ゝもろこしの學士まして。天下をも治むべきほどの器量ある人なれども。佞人上まありて。賢者を退くる世なりせば。用ひられざるをゐりて。自さけてその國を去り。時を憂ふる心よりして居かぬことを歎息して。そを忘れんとて。飲む酒なれば。大酒ゐたりともげまおもしろきふるまひありて。天下の酒客ともいふべし。たゞ酒好まて。大酒するやからて。生醉の糟喰ひなり。人も器物もつかひ過ぐれば損じ。つかてぞまに置くときも損ず。息災ゝみな中庸まあり。過不及なきゝよろづ長くたもてり

○小人閑居して不善をなすとあれども。小人ならぞとも閑居して不善をなもの少からぞ。されば獨居の閑をたのしむことゝ。いとかたし。大かたゝ據なく隱居もる輩。世間まに多し。自得して世塵をさけ。思ひもてゝ身を遁るゝものて。格別まして。隱居しながら物を

貪り。世路に執着をるゝ。隱居に似て。隱居にあらぎ。近世ゝ隱宅に標札多かるにても知られたり

○愚者ゝ不用の財を貪るに勞し。賢者ゝ用の財をつくるに樂しむ。不用の財に限りなし。用の財ゝ限りあり。限りある身を以て。限りなき財を求めば。死に至るまで貪欲盡くることなし。されば身を勞して財を集る時は。その身終れり。用の財ゝ用の足ることを樂しむゆゑに。壽を養ふ。財に不用といふことあるべからぎとおもふものあれども。日用の外を散ぜる財ゝ。みな不用の財なり

○昔奈良に磯貝といふ墨師あり。予が父世に在すころに。その家盛にして。他國へ墨を商ふ人多く。職人も數多なりけるが。人の妻と密通のこと隱れなくして。その地に身をも置きがたく。その妻と共に奔りて。近江の大津驛に手跡の師となりて。世をわたりぬ。五年ほどを過ぎて後。その妻の奈良に捨て置きたる女子。父におくれて便なく。人を頼みて母の大津に在をと聞き。またひいでたれども伴てれたる者こゝろよからぬ輩にて。京にある内この女をそゝのかし。こゝかしこさまよひありくうちに。もたらしつる衣類そこだくのこがねをも奪はれ。終にて乞食となりて。大津に至るに。いと雪の多く降りたるころ。磯貝が住みける家の軒端に。女子の乞食薦をまとひて打ち臥し。なやめる聲の聞えければ。夜半に磯貝ゝ扉をひらき。伺ひ見るに。ひとりの女子なり。不便におもひ。妻にこのよしをもの語るに。妻も故郷に女子あることを思ひつゝ。やがて抱して内へ入れ。土間に筵を敷きつかはして臥さしめ。明日を待ちて出だしやる時。何處のものゝ身の果にやと問ひけれむ。わらぢゝ奈良の角振といへるところの者なるが。母の身持よろしからで。人にかたらひ家出し給へむ。今ゝ父もなくなり。家のあとつぐべき者もあしきことありて。何國へか行き侍れゝ。せんすべなくて。母の大津にましますと聞きて尋ね來つれども。今に逢ゝ。乞食となりしゝ京にて。あしき者にたぶかられて。袖乞せりといふより。磯貝夫婦ゝよく〳〵見るに。妻が子なりけれども。いひもいでず。郡といへる所に乳母のちなみあるを。人に文そへて送らせ。そこに暫し住ましめおき。後に他へ嫁せしめさとぞ。人の因果ゝ過去の業といへども。善惡の應報三世ゝまたぎ。てやく現世に報ゆることかくの如し

○江戸葛飾のほとりに權兵衛といふ村長あり。ある年の春。伊勢大神宮へ太々神樂を奏せんとて。村民十三人とゝもに。御師何某が家に宿るに。山海の珍味を盡くし。馳走ありて後。おの〳〵に薄茶まゐらせんとて。紫内して茶室へ招き請じければ。かの村長を始とし

て。十三人席につけば。御師に丁寧にあいさつして。心を配り。茶を建てゝ。權兵衛が前に出だしおきけれども。農夫の身なれば。茶道の心得にいさゝかもなければ。大に心をくるしめ。場うてして思ひけるに。いかにして飲むべきか。人の咄にも茶に飲みたる上にて。順にまねをなどと聞きしが。十三人へ一杯むかりの茶を飲みかけまねしたりとも。足るべからぬ。又ひとりして飲み。他のものへ鼻あかせんことといかゞなれども。あれ村長の身として。今更聞きて飲まんも口をしきことなりと。さま〳〵心のうちに思ひめぐらせうちに。御師に先に出だしゝ口取菓子を。村長が前へさし出だし。いざ召させ給へとおひければ。とつと茶をとりあげて。殘らず飲み。前におきければ。御師に取りて茶椀をそゝぎ。又建てゝ村長がまへに出だしつゝ。いざ菓子を取り給へといふに。この度に菓子を取りて食ひ。また茶をのこらず飲みて。前におきければ。御師又取りてもとの如くたてゝ。又村長が前へ出だす。村長いひけるに。我等にもてや澤山くだされたりと云ふに。さあらば次の方へ御おくりあるべしとて。この順にして。各一椀づゝ飲み。辭退して座しきへ入りて。おの〳〵ひそかにその心勞をもの語りつゝ臥し。又も茶の饗應あらば。いかゞかり迷惑すべし。とやくいとまをひして。歸國するにおかしとて。あくるを待ちて發足せり。後に權

兵衛予がもとに來りて。願ひたきことの候へといふに。いかなることゞと問ひければ。過ぎし春。伊勢にて恥を得しこと侍れば。茶の手續を教へ給はるべしとて。おか〳〵の事を物がたり。今にわをれがたくとづかしく。又口をしくおぼえしといふに。予大にわらひて。そのもとに日ごろに似げなき不見識の人なり。農夫に農家に人となりて。農業のことにだにくにしけれど。恥かしきことなかるべし。茶にもと隱遁の手をさびにして。その道。日用に足れりといへども。農夫町人などのいたをべきことにあらず。世をのがれし隱居の後などに。ともあれ。其許もし茶を學ぶゝ。一村みなこれにならひて。農時に怠りなば。田畠にことく〳〵く不作なるべし。村長茶道を知らざるが故に。耕耘収藏時にたがへず。國中百人耕して五十の遊民あらば。その國かならず飢ゑぬべし。百人耕して十人あそばゝ。その國果して豐なりといへば。權兵衛感じて。茶の湯を習ふ心をおもひとゞまりぬ

○五堪忍といふことあり。聖賢の旨趣よりいでゝ。世業をなすの基。人間安穩の大悟にして。脩身齊家の樞機なり。是を守る時に。勞をる事なくして家富み榮え。是を守らざる時にとこぶ。衣服に何の爲にか着る。寒さを凌ぎ。暑さをいとへんが爲なり。さあらば寒からず着、暑からず着ば。麁服にても厭ふことあるべからず。美服に著るに。いまだ寒暑の身にあ

まざるが故なり。寒暑の身ニしみなば。筵。裸ニてもいとふものあるべからぬ。食事ニ何の爲ニかまる。空服をやめん爲なり。さらば添物ハなくてありなん。添物なくて。食の進まざるハ。いまだ飢の至らざるなり。飢至る時ハ糟糠をだもきらハぬ。家ハ何の爲ニか造れる。雨露をいとゝんが爲なり。さあらむ無益の造作などなくてありなん。水火の災ニ家を失むぬ。人の軒端ニてもいとふ者あるべからず。妻ニ何の爲ニか持てる。子孫を嗣がん爲なり。さあらば子孫あるものハ。妾などもたであるべし。妻子あるが上ニ。妾を持つニ色ニおぼるゝが故なり。財ハ何の爲ニか求むる。世計の第一。衣食を足らはめんが爲なり。さあらば義をかき。恥をもわすれて。貪りたくてふるニもおよぶまじきとこそ

○飛喜百翁が利休を招きし時。西瓜ニ砂糖をかけて出だはければ。利休砂糖のなき所を食ひて歸り。門人ニむかひ。百翁ハ人ニ饗應することをわきまへぬ。我等ニ西瓜を出だしゝが。砂糖をかけて出だせり。西瓜ハ西瓜のうまみを持てるものを。ニげなきふるまひなりとて笑ひ侍りき

○蕃椒ハ。すぐれたる功能あるものなり。統べての藥種ニ。さまゝの能毒を記せども。さほどまであらぬ。五穀をてしめ。酒。酢。醬油。衣服。調度のたぐひニ。多く入れ置く時ハ。かびを生ぜぬ。出の袋ふことなし。山野幽谷の靄霧。家内濕露の氣を避くるニハ。この物ニ過ぎたる藥なし

○唐の太宗の時。州郡ニ寺院多きがゆゑニ。國郡これが爲ニ迫められて。民耕田ニ餘なしと議して。國々の寺院を沒入をべきよし決定ありければ。太宗の給ふやう。畫圖ニ寺塔あるもまた風韻尋常ならざるものなりと仰せありしより。寺を沒入することをやめたりとぞ

○ある人の妻。夫の爪を取りぬるをとゞめて。けふハ辰の日なり。爪を取り給ふべからぬといふ。傍の人これを聞きて。いかなることニかと問へば。辰ハ龍なり。龍ハ爪なくてかなふべからぬ。大切の日なりといふ。かたゝらの人笑ひて。さあらばそのもとハ酉の日むかりニ時をつくりて。雄鳥をゝめらるゝニやといへば。その妻大いニいきどほりぬ

○女ハみめの美しきが寵せられて。心の正しきを愛する人ハまれニ。物ハ形のめでたきを好みて。惡のおもしろきを取る人ハ少なし。ある家の妻ハ美人の聞えあれども。妬心ふかくして。夫の放埒なるをいきどほりつゝ。常ニ爭論絶えざりしが。ある時。妬みの餘り。夫の留守ニ縊れ死ニたり。夫も大酒のためニ吐血して身まかりぬ。妻の名を壽といひ。夫

の名を福太郎とよべり。人ハ名よりも行ふあり。松竹ふ千とせをいとひ。鶴亀ふよろづ代を比したりとも。家を治むるハ和合ふあり。長生ハ養生ふありとあるべし

○勢州關の商家ふ。吉右衛門といふものあり。實母ふ孝養至り。四十餘歳のころ。家業ふ出でゝ歸りける時ハ。その母いとけなきをりからの心を抱きて。吉右衛門が足を洗ひつかハをべしといふふ。背かぎして洗ひ給ハるふ任せたり。この一事を以てよろづの行ひ違へるところなきを知れり。篤實の性。人のそねむを慍み。他の人をたのみて。異見をなし。已ふ敵するものをよくするを以て。終ふハあしき輩も隨へり。陽報を待つ心。少しもなくして。人しらず隱德を施し。家業のいとまある時ハ。往還ふ出でゝ路を造り。溝あるところへ橋をかけ。只後事のためのみふ志を盡くすこと。あげてかぞふるふいとまあらぎ

○むかし江戸なる山の宿ふ。大捌助八といふ糶の問屋あり。助八の人となり。性直ふして義をこのみ。義ふ違ハざる行あるものをば資け。義ふ違ふものゝ豪強の士たりとも。是を許さぎ。常ふ德行ありて。俠者の聞えも知らざる人あらざりき。ある時。過ちて人を殺しゝ者の捕れて。町の番屋ふ預けられしが。其者のいひけるゝ。大捌ぬしふ逢ひまゐらせ度ことの侍れば。今宵かのところへ連れ行き給ゝれかしといふまぞ。此よし助八ふつたへければ。いかなる者ふかとて。助八行きて伺ふふ。かつて見あらざるものなれば。その方ハ予がいまだ知らざるものなり。何の用ありて逢ひたきよし申をふかといへむ。その者答へていへるふハ。我等口論のうへふて。あやまちて人を殺し侍れば。死ていさゝかも悔いざれども。一人の老母あり。我等死し侍る時ハ。母。必。飢ふ及びなん。たゞそれのみ心ふかゝり侍れば。一旦命助かりて。母を養ひ送りて後。死ふつきたく思ひ侍れむ。いかふもして命を助け給へかしと。涙ながらふひたすら頼みければ。助八聞くよりあハれふ思ひ。孝心の者ふて。あるまじきあづかの口論より。事起り過ちて人を殺すこと。言語ふ絶えたる愚者といへども。孝養の志ふめでゝたをけつかハすべし。母を大切ふせよとていましめを解きておひてなちて。みづから此よしを廳ふ訴へ出でければ。罪人を私ふ逃しゝ罪輕からぎとて。助八をとらへ。罪人を尋ね出だをまで。禁獄せしむべしとて。三年が間。獄屋ふありしうち。助八ハ病みて死せり。ア ハ身よりの者。同じ町なる易行院ふ葬むる。その妻次ぎて助八が墓所ふ自殺して。同穴の契りむなしからぎ。今ふその寺ふあり

○ある人予ふ畫を學びんことを乞ひて。さて云ふやう。僕畫を學ばんとおもひおこしまよして。他の物を畫くことをもとめず。たゝ富士と達摩とのみを畫きたしといへり。それ

も上手とならんことをも求めぞ。富士にいかゝも富士と見え。達摩にいかゝも達摩と見ゆるやうゝかきたしといへり。この詞。尋常ゝきこゆれども。いとおもしろし。すべての藝。何ゝよらぞ。このところをよくゝきまへぬる時に。過不及あるべからぞ

○ある諸侯隱居せられて。副邸ゝ宗廟をうやゝしくまつらひ。朝暮廟參の折に。天地大恩の報謝。太平主恩の報謝。先祖代々高恩の報謝とのみ唱へられて。他の勤行なし。何某の僧正といへるが。この侯ゝま見えしとき。など後世のことに御願ひなきゝかと申されければ。後世の事に子がねがいんよりも。人の念じおけるが多かれど。それをもとめんとおもふなり。子にそのよくねがふことの熟したるものゝ布施して。後世の事に買ひ得んと申されたり。此侯よく後世の道をむわきまへられ給ひしゝこそ

○平氏の士の傳を書きたる中ゝ。難波次郎が篤孝至純のことを載せたり。次郎が母に小松殿の乳人ゝ仕へて。嚴直大慈ふたつながら全く。歳六十ゝして故郷ゝ歸り。攝州難波ゝ住す。居るところ蓬蒿人を沒し。家きわめて貧しかりしが。次郎常ゝ母ゝ仕ふること。いよ〳〵恭謹ゝして。農業のいとま。薪を負ひて市ゝ鬻き。身ゝ被袴をしといへども。母ゝに滋味を盡くせり。後平家ゝ仕へて。邸を洛中ゝ給はり。母を迎ふるゝ母行かぞして云ふ。老嫗歳をでゝ六十ゝ餘れり。世ゝ在る日少し。汝今官ゝ仕へ。身を立て家を起をの時至れり。さあるゝひとりの老嫗の爲ゝ心ひかれて。奉公ゝ懈らば。忠を盡くし名をなすの妨なるべし。われ飲食だゝ足らば。都へ出でゝ。榮耀ゝほこるの志なしとて。迎の輩を洛へ歸して。自害して果てたり。次郎悲歎ゝ堪へぞして。あぞしのいとまを乞ひ。故郷ゝ歸りて。老母のなきあとをとぶらひ。洛ゝ立ちかへりて。清水寺ゝ供養の地藏燈をいとなみ。いよ〳〵忠勤をてげみ。相國ゝつかへたりといへり。この事。平家ものがたり。盛衰記などゝ見えず。かゝる忠孝をあげぞして。させる功もなき人のやうゝあるし傳へたるこそ恨なれ。人に惡のみをあぐれば。善人もあしくつたへ。善のみあぐれば。惡人もよき人のごとし。難波次郎に無道の君ゝつかへたれば。至孝誠忠ふたつながらうづもれたるに。いと口をしきことならぞや。もしその仕ふるところの君。君たる人を得ば。實ゝ臣々たるの士とやいふべき

○一休禪師紫野ゝおてせし時。宅間何某御こゝろやすく參りて。物がたりのついでことゝ御異見申をやうに。君ゝに尊き御僧ゝておにしませども。餘りゝ打ちつけゝ。人を教化し給へば。在俗の輩に物いまひなどいたせるものどもぞかりゝて。かへりて弘通ゝ便よからで。志あるものも。てに遠ざかり侍るなり。不凡のやからに格別。凡夫ゝにとかくめ

でたき事を申させ給いりたし。さあらば悦びて歸依し參らをる者多かるべし。なべて人いよろしきことい。已がことゝむかりおもひて。あしきこといみな他人のうへとのみ心得るならひまて侍るぞと申したるまに。禪師こたへて。よし〳〵心得たりとて。筆をとり給ひて

佛家まに住在をれば。いましめを以て本とし。三寶の海まに入れば。まことを以て本とを。身死して巖根まありていい骨また淨し

と書して。これより外まめで度こといしらぎとの給へりとかや

○都近く岩ちなといふところあり。そこの念佛堂の菴主を正念坊といへり。もとい黒谷まに居て。念佛の上手と呼むれ。日々京へいでゝ托鉢する人々。その聲のよきまめでゝ。米錢多くほどこしけるが。此僧寺まありて。飯を焚きたる時い。櫃まうつして肩まのせ。持佛の前の位牌あるところを。一遍づゝまいりながら。それ鼎。それ鼎とて持ち來り。その後。人まも食ちせ。自も食ひて。別まに佛器などへい盛りても供せず。茶湯もこれと同斷なり。さればとて何まても佛前へ持ち行きたる上まあらざれば。食をることなし。漬物の壓まも石なき折い。境内まに建てたる石地藏を持ち來りて。鹽梅よくつけて下されかしとて。のせ置きけり。統べてかくのごとくのふるまひして。更まに物まかゝちらぎ。肉食すれども。決して寺まて食をることなし。女犯もあるまじとおもいれねど。寺まい老婆をも嫌ひて。丁稚下男のみを仕へり。此正念が書きたる一枚起請と。辭世あり

隱居一枚起請

もろこし我朝のもろ〳〵の智者達の致し申さるゝ隱遁の隱まもあらぎ。又學問して。道の心を悟りていたす隱遁まもあらぎ。只不用の者の爲まち。世の妨となるまじとさへ心得れば。疑ひなく氣樂なるぞと思ひとりて。隱居をるより外。別の子細いさむらちず。但し肝心の世わたりと申すことの候へども。みな衣食住のうちまこもり候なり。この外まに懲深きことを存せば。諸人のあいれみまもちづれ候べ〳〵。假令。薦をかぶり。糟糠をなめ。人の斬端まに卧せるとも。食ひてい寢。食ひてい遊ぶ。君が代のありがたきを忘れば。身ち安樂まなりたりとも。生きたるかひもあるまじく候あなかしこ

辭世

来て見ても来て見ても皆同じこと。こゝらでちよつと死んで見やうか

此法師尋常の者ともおもちれざれども。京まていい。只念佛坊主とむかりよびて。その行狀

を知る人まれなり

○有馬に湯あみせし時。日暮れて。湯桁の中に耳目鼻のなき痩法師の。ひとりほと〳〵と入りたるを見て。予い大に驚き。物かげより窺ふうち。さう〳〵湯あみして。出で行く姿。骸骨の繪にたがふところなし。狐狸どものわれをたぶらかすまやと。その夜い湯にも入らで臥しぬ。夜あけて。此事を家あるじにかたりけれど。それこそ折ふしい来り給ふ人なれ。彼女尼い大坂の唐物あき人。伏見屋てふ家の娘にて。あかも美人の聞えありけれども姑の病みておいせしとき。隣より失火ありて。火のてやく病牀にせまりしかど。たすけ出ださん人もなけれど。かの尼とび入りて抱へいだしまゐらせし人なり。その時燒けたゞれたる疵にて。目い豆つぶかりに明きて。物見え。口て五分ほどあれど食ふに事たり。今年てや七十歳ぞかりと聞けりといへるに。いとあり難き人とおもひて。後も折ふしい人にもかたりいでぬ

○浪華に紀伊國屋亦右兵門といへるて。大家の商人なりけるが。そのかみ。年まだ若かりしころ。本家何某につかへて。正直なるがゆゑに。主人是をあてれみ。その方わが家につとむること。凡十餘年なれども。明けくれ心を盡くし。費をいとひ。家業を大切にするの志。滿足せり。今その褒美として。金百兩のもとでを遣すなれば。これをもて何處へなりとも。その方が心に任せ。家を持ち。出精して。千兩の利倍を得ぞんば。再びわが家へいで入るべからぞといへるに。亦右衛門い忝くおもひ。かの百兩を受けとりて。禮を謝し。いとまをつげて京都に登り。つら〳〵おもふに。商の道多かる中に。大商して大利を貪らんとする時い。のへりて必損失あるべきこと常なり。かゝれむ日々に費となるものを賣りて。渡世とせば。小利といへども益あるべし。その中。紙い利のうすきものといへど。日用多きものなれば。唯。鹿紙の捨たるべきをあさなふべしとて。西の洞院に所帶して。鹿紙を業とし。紙屑を買ひて。漉かせてい賣りけるに。百兩をもと手として。三とせむかりがほどに。三百兩の利を得たり。又その金にて廣く家業をなしけるに。また五年に千兩にもなりければ。やがて浪華にいたり。主人にまみえて。かねて給いりし百兩を八とせかせぎつるほどに。千兩にいなし侍りぬとて。主人へことのよし申しのべたりしに。主人大に賞美し。その方わが家に勤めしころより。尋常ならぬ志と思へるゆゑに。かくいいひつけたることなり。こたびいこの千兩を持ち行き。一萬兩にすべしとありければ。畏り。又五とせをもへざるうちに。一萬兩に倍して。主人の前へいでゝ。風聽しければ。主人また大に賞美して。この一

萬兩をこの度に十萬兩として見すべしといへるを。亦右衛門かしこまり申しけるに。て
じめ給にりし百兩を千兩といたし。その千兩を一萬兩といたすまでに。ほねをれ侍れど
も。此一萬兩を十萬兩となさんこと。何の子細かさむらふべきとて。三とせも經ぬ間に。十
萬兩に倍して來れば。主人その働きを感じて。その辛抱この上て差圖をべきにもあらね
ど。この度て百萬兩にも倍すべくとあれば。亦右衛門こたへけるに。十萬兩のこがねを以
て。百萬兩にすることに。辛勞をるに足らざるなり。さて承り侍り度ことあり。當時主家の
御身帶いかほどの御儲にて侍るにかと問へば。主人こたへて。こが身帶にはいかほどゝ
いふかぎりもあらざるなりといへば。さほどのたくてへおいしても。その上にも猶こが
ねをほしと思し召しさむらふにやといへば。猶ほしとおもふこと。いまだ飽くことをた
らぬといふに。亦右衛門また申しけるは。さあらば此こがねを倍することをば。是を限り
として給てれかし。我等に命こそ寶なれ。命ありてのうへの財なり。命なくてて財ありて
も益なしと申すに。主人云。我にまたその方とに心得かたにてるかに違へり。財を持ちて
こそ。世にあるかひもあれ。命ありとて。財なくむ生きてのかひなしとおもふといへば。亦
右衛門て十萬兩を主人にそのまゝ奉り。けふまでのことに奉公の身なれば。仰にそむき

がたし。今より我身にて願の侍れば。暇給にりて。このうへのことにゆるし給へかしとて。
いとまを乞ひて。わが家にかへり。若干のこがねを緣ある輩に配り分ち。身帶をしまひ。頭
をそり。圓智坊と改名して。大融寺の徒弟となり。京へいでゝ菴室をかまへ。日々に托鉢し
て。洛に終れり。そのゆかりの者。大融寺に塚を建てたり。石に刻める辭世の歌に

落ちて行くならくの底を覗きみん。いかほど欲のふかき穴ぞと

○洛に須藤健十郎といふ人あり。温厚篤實の儒者なり。予が東山に居寓せしころ。醒が井
に住みけるが。四條を通行をることになくて。用あるときに。五條。三條をまとれり。遊里。
芝居などの道にさけて通らざりけり。常に儉約を守ることを。專。人に教訓して。みづから
に木にて鯛の形を彫ませ。常に膳部のかたてらに置きて。一肉の美味須臾の舌頭にあり。
大丈夫何ぞ飲食に心をもちふることをせんやといへり

○生駒山を越えける日。秋篠といふ村てづれに。如意輪觀音を安置をる堂あり。さをが名
におふ山色風景郊野のながめおもしろければ。此堂に立ち寄りて。たゞこくゆらしける
に。堂守とおぼしく片目ちひたる男の。卒都婆を造りゐたるを見て。主て細工せらるゝに
やといへば。削りさしたる卒都婆をかたへに置きて。圓爐の灰かきならし。かんな屑焚き

て。ふるびたる鑵子に湯をたぎらせ。茶澁のつきたる茶椀を丁寧にあらひそゝぎて。大坂よりもらひし茶なりとて。懇に煎じあたへぬ。予も心よく二三椀を喫して。あばし憩へるうち。主のいへるは。我いもと此地の産にてもなかりしが。もと調度のさし物を職として。二十一年ほどは。京にくらしつれども。不仕合なること打ちをぎきて。歳いより。目いわろし。少しのあるべにて。今いこの地に老い朽ちぬるなり。茶の湯といへるとも。はじめいかゝるすさびより起りけるにやなといひつゝ。菓子を椀に盛りていだしつれば。予とりて見るに。たゝらの木の芽に味噌をくるみて。焙りたるなり。珍らしき口取かなとて。いとうまく食ひて。茶數椀を過ごしけるうち。主の申をいゝ。我等京に在りし頃。數々の茶人宗匠など馴染まゐらせて。茶席にも迎へられ。薄茶たつることも習ひおぼえ侍れど。大かたの人いゝ。茶の湯を別のことのやうに心得給ひて。あつらへ物等もいとむづかしく候。東山にて何巻とか申す宗匠の建てたる席を羨ましく思ひて。その好みのかたに建てたしとて。注文取りしに。床板を松にして。節七つあるを好めり。我等思ふにいゝ。いかなるわけにて。節數七つある板をもとむるにやといぶかしさに問ひければ。師の建てたる席に。床板の節七つありければ。それを擬するなりといへり。笑ふべきの甚しきにあらをや。師の

造られしときて。定めて節なき板のなきまゝに。ふしある板にてせられしなるべし。さあればいかに師のあとを慕へばとて。わざ〳〵疵あるものを求むるいゝ。道を嗣ぐにいゝあらで。擘にならひて。師の疵をあらためをと同じかるべしとおもへり。この道いゝ只きよらにせよといふにいゝあらず。きたなからずあり度。道具とても足らぬ所を。何かにて。その時の間に合をるを馳走といふなるべし。をべておもしろきことい。足らぬところにありて。足り過ぎたるに雅なることなし。人にてみなくせありて。さま〳〵に好みを致せども。くせを捨てざれい。風流の道人にいゝあらを。理に入りて理を遁れたる人ならねば。茶好といふのみにて。茶道の人とい思ひれ侍らをとて。その立居ふるまひなどおくゆかしく。この者を連れ行きて。家にて養ひおきたく思へり。何か書かせみやげにもをたくと乞ひけれども。無筆なりとて。遂にかゝをなりぬ。予にあまりのおもしろさに。記念にあるじが造れる卒都婆を一本求むべしといへば。めでたからぬものなり。やめ給へ。さあらばかねて書けるものあり。是を參らすべしとて。反古の中より一ひら探り出しゝを貰ひて歸りぬ。その文左の如し

早く損ぜれども。木でするものを土て造り。土でするものを金にて拵へも。木でをる物

て木にてつくり。土でもる物て土で造るべし。金でならざるものに。金にてつくるべし。調度に損ぜるをいとひて。木土にて濟むものを。金にてもるによろしからぜ。秋篠與平とあり

○常陸の國風に。疫癘。麻疹。痘瘡など流行の病あるときに。鹿島太神へ祈念して。里民歌を唄ひて踊ることあり。その歌に

誠やら伊勢と春日の御社。彌勒茶船がつぐいた。舳艫にて伊勢と春日の御社。やしろでに何がおもしろい。護摩んどでに護摩をたく。御手洗でいちごが垢離とる。その護摩をなんとたきそろ。氏子繁昌とたきそろ

○猫を飼ふもの。多くに猫をやしなふことをあらぜ。飯をあたふるに鰹ぶしを入れ。肉味を加ふ。猫に常に厚味を食とする時に。鼠をとらぜ。猫て麥をたきて。味噌汁をかけ與ふべし。その他の食をあたふべからぜ。常に肉食にならにれば。肉なき時に。必他の家にいたりて。魚肉を盗めり。人を養ふも亦役あかり

○影法師問答の文。汝吾うまれし時より。吾かたてらに在りて。あむしの間も離るゝことなしといへども。わが親にもあらぜ。子にもあらぜ。主にも召しつかひにもあらぜ。妻にもあらぜ。めのとにもあらぜ。只あけくれ。吾なすことのみなして。更に他の業をなさぜ。よろこぶことなく。怒ることなく。あてれむことなく。樂しむことなし。おもふに目あひたる者を友とれば。是を見せんとるにづらひ。耳あひたる者を友とすれば。これを聞かせんとるに煩ひ。啞を友とすれば是をさとらせんとるにづらふ。汝。今吾有なるによりて。汝が無を守るとも。吾又汝が無によりて。吾有を守るところをあらぜ。そも〳〵なんぢに吾影なるか。てた又人の影なるか

○飯釜の贊に。萬鎰に慕るの勤めにおけるや。明けくれ。いとま明なければ。飲食に乏しからぜ。人の世にある是とひとし。此ものゝ德たる。孝に鐺底の焦を削りて。冥理に湯の粉の洗ひながしを捨てぜ。驕にわづか茶飯に酒の半椀を加へ。儉にあまねく大根葉割麥の根を守れり。日々に琢磨の功成りて。ひかり家内の繁榮をてらを

○大原女の贊に。力て蘇子が薪水の勞をたをけてに。辨に□が北廓の才をも諫む

さくら花大原の山に折る音のをうおが業と誰かおもてん

○神佛を信ずるの法て。神佛同體の印をむすびて。念ぜざれば感應なしとぞ。されば天の惠を受けんと祈る者も。天のなをごとく私なくもる時に。惠をしといへることあるべか

らぞ。人とまじてるて。人と同意たるべし。神の心て鏡の如し。佛の心て光りの如し。天の心に依怙なく。人の心に人と同じ

○人善に動かざるものて。惡にも動かず。この念こゝに生ぜざれば。彼念かしこに生じ。轉變して。ゑむらくの間も止む事なさものに心なり。此出づるところをよく知らざれば。惡を退けて。善を行ふことありがたかるべし。善て人の本心にして。常の持つところのものなり。惡に念より起して。他より入り来るものなり。耳目鼻口の取り次ぎ。心の善なるあるじに告げて。萬の事をなをに。召仕ふ人と同じ。その召しつかふものに善をこのむあり。惡をすくあり。此二つを差別をれば。五常みなその中に立つべし。おのれが心の好むことのみを致して。嫌へることをさけぬるて。則私のいづるところなり。人としてこの私を勝手として。よろづ行ふ時に。獨して圍碁の上にあるがごとし。おのれにまされる人と圍むとき。心轉じて勝手を得ぞ。私欲をすてゝ決斷する時に。大節にのぞみて。智力を遺をところなし。行ひたゝその見ざる所をつゝしみて。聞かざるところを恐るゝ外なし

○主人におのれが仁のおよばざるを歎きて。臣の不忠なるを尤むべからぞ。臣ておのれが忠の及ばざるをなげきて。主の不仁なるを怨むべからを。親におのれが慈悲のおよばざるを歎きて。子の不孝なるを諭をべし。夫に妻の不貞を歎かをして。おのれが和の及ばざるを歎くべし。妻に夫の不和をなげかをして。おのれが不貞なるをなげくべし。兄に弟の不敬なるを歎かをして。おのれが不衰のおよばざるを歎くべし。弟に兄の不衰をなげかをして。おのれが敬のおよばざるをなげくべし。朋友たがひに人の不信をなげかをしておのれが誠の及ばざるを歎くべし。君として臣の過をかくを時に。慈。孝。衰。敬。貞。順。信。誠非を隱をに忠なり。親子。兄弟。夫婦。朋友互にその過をかくを時に。慈。孝。衰。敬。貞。順。信。誠おのづからその隱せる中にあるべし。偽も表を包むまでのつくろひにして。やむべし。飾るとも偽のために誠の本を失ふべからず

○年わかくして色なければ。無骨にしてゑとやかならぞ。老いて色なければ慳貪にして邪見なり。世に色氣といふに專愛敬のつやをかねいひて。あながちに。姪欲のみにあらぞ。士として色なければ。人なづかぞ。農として色なければ物育たぞ。工とゑて色なければ巧みなく。商とゑて色なければ人問てぞ。天地の間。何ものか色なくしてに。一日も世に立ちがたかるべし。孟子にいてゆる大王色を好むの辨おもふべし

○人倫の交り。慈の心より出でざるときに。仁。忠。慈。孝。柔和。愛敬その信ことゝく人情

なし。親の子をおもふ心。死なんと覺悟したる心。この他て誠なし。此誠心戀慕よりいでゝ。戀情なき時ゝ。不仁の君ゝ忠を致すものなく。不慈の親ゝ孝を盡くす者なし。遠くゝ顔淵が吾猶能せんの詞。近くて右近が忘らるゝの歌。おもひやるべし。古歌ゝ

戀せぢゝ人て心のなからまし。物のあてれもてれよりぞ苦る

○鬢鏡附言ゝ。奉公ゝ主君の眼鏡あり。召仕ふものをして。人と成さしめ。慈悲ゝ親の目鏡ある。子をして善となさしむ。予ゝ鬢鏡あり。人の一寸と遠方を見ぢして。吾身の一尺と足もとのことを見せしむ。若その袖のくもりを日々ゝ拭ひて。おのれが魂を見ぬけむ。假令照摩天眼の名鑑ありとも。求むるゝ足らず。世人鬢鑑を懷ゝして。他の是非と。世の善惡を見出だをことあるべからぢといふ

○德積氏の老母。昌貞尼ゝ。洛の高臺寺ゝ隱居を。風流世ゝすぐれたり。騷客門ゝ充てり。庭前十畝むかりを柴として。刈ることなし。世人これを取り殘しの柴とよべり。蝶の来るを待つなり。また庭園ゝ鶯日ごとゝ来り鳴くをよろこぶ。梅なくてあるべからぢとて。洛東ゝもとむれども。心ゝかなひたる古木なければ。人を雇ひて探りもとむるゝ。嵯峨ゝ老木の大いなるありと聞きて。多く價を費して。庭園ゝ栽ゑたりけるゝ。梅をうゑたる日よりして。かの鶯いつくへか行きけん。終ゝ来らぢなりぬ

○六德牒記云。綾羅錦繡もて夜の物を造り。薄ものすぐしゝ蚊のゝづらてしきを避くるて。定紋ゝ片意地てりて。紙子ゝ淺瀨を渡ることをあらざるなるべし。土燒の火鉢ひとつゝ道具買も遺念なく。紙もてつくれる蚊牒一張。紙屑かふ者の眸をうをがすゝともあれ。盜人をして心を動さしむることなかるべし。薄紙一重ゝ世塵をさけ。濕をのぞきて。寢冷せぢ。風を入るゝ時ゝ。水濱ゝあるよりも涼しく。書を見る時て。螢雪の窓よりも明し。ぬぎたなき姿を人ゝ見せぬむかり。夏侯が妓衣の巧ゝもまされり。晝ゝまろめて屏風のうしろへ投込み。折目を正すせゝもなし。秋去り冬来れば。被りて霜雪のてげしきをも凌げば。一物ゝして六用あり。彼太宗が歌舞のからうたゝゝよらねどゝれ。是ゝ名を與へて。六德の牒とよび。みちこそなけれど。驚きたる山の與ゝもおもひ入らぢ。只このうちゝ延卧して。やがて出でじとゝおもひそみけり

○羯摩乘親ゝ。きゝめて面打の上手なりけれども。ひとゝせゝ一つゝ打たぢ。性酒をこのみて醉ひて舞ふことを樂しむ。ある折から老母のいへりけるゝ。てや来の櫃ゝゝ蜘の巢をかけたり。勤めて打つべきゝやとせめければ。乘親おどろきて。さあらば今日よりして

懈らぞ。打つべきなりとて。籠りけるが。四五日を經て。面を打ちてあつらへたるかたへ持ち行き。料を持ちかへりて。母ゝわたしければ。母よろこびていへるゝ。多くの金を得しゝ。面いくつ打ちたるやととふゝ。八おもて打ちたり。されども心ゝかなゝざるが。その中ゝ七面あれど。みな家ゝのこせりとて。取り出だし見せたり。鬼女の假面なりければ。見るさへおそろしとて。傍ゝおきけり。その夜。盜人入りて。親子臥したるを伺ふを見て。母かの鬼面を顔ゝおほひて。眼の穴より見ながら。やよ盜人の入りたるぞ。乘親おきよといひけるを。盜人見て。あとさけびおどろき。いづくともなく逃げ失せぬとぞ

○何がしの大納言の姉君。重陽の酒宴せられける折から。座敷へ蜘のいでたるを。婢女の扇もて取らんとせれども。とり得ざれば。やがて打たんとしつるを。姉君とゞめ給ひて。申されけるゝ。そと紙もてとらへ包みて。庭へなちやるべし。かまへて殺すべからずと申されけるゝ。婢女申しけるゝ。蜘ゝそのまゝなちおけば。數多の子をふやし侍れば。ころし候べしといへるゝ。いなとよきゝ蟹とて。わらゝなど和歌ゝもよめる蟲なり。稍出でたりとも。かならぞころをべからぞと申されしとぞ

○夢窓國師の書れたるものゝ。人ゝ長生せんとおもゝぞ。嘘をいふべからぞ。嘘ゝ心をつかひて少しのことゝも心氣を勞せり。人ゝ心氣だゝ勞せざれば。命長きことうたがふべからぞとあり。鐵拐仙人の贊ゝ

仙人ゝ不養生せず。腹立てぞ。物ほしからぞ。それでなが生

とあり

○相州玉繩といふところゝ。荏柄平太が所領ゝて。平太あやまちありしとき。北條時政のそからひゝて。平太ゝ繩をかけて。諸大名の中へ引き出だしたるゝ。和田義盛が一門なるをもて。九十三騎一黨頼朝ゝそむきて。鎌倉をやきたり。此とき玉繩の領所を没入して。北條ゝ給ふとあり。亂後和田の輩を尋ねられしゝ。朝日奈義秀一人のみゝ。その行方をしらぞといふ。義秀ゝ鎌倉のみだれより。信濃の國へのがれて。殖科の八代寺ゝ隱れ住み。木曽山ゝ入り。樵夫を業として。壽を終れりとぞ。權之頭無遠が祖なりといへり

○淀川ゝて。鯉を取るゝ。漁夫水中ゝ入りて。鯉とならび居て。脇へかゝへこみて浮み出づるを抱鯉と云ふ。近きころよりのことなりとぞ。人を諫むるの道も。是ゝ同じ。てじめゝ壹人のあしきことゝ共ゝ。ならびゐて折りよきところゝて。善ゝおもむかをること。肝要たるべし。人を興見するゝも。大かたの人ゝその者の非なることを擧げて。興見す。いよ〳〵

容れざるなり。まづその人の功を舉げて。是を賞美し。かゝる功をなしながら。いかでかさるよろしからざることゝおもむくや。よろづ任すべき人がらなるを。たゞよろしからざるの志よりして。今までの大功を失へり。その善に歸をべしとあらば。おのれを慢ぜざるの人なけれむ。かならずその理に伏すべし

○奈良の二月堂にて。むかしは青竹にて鹿末なる茶筅を賣り。老若男女これをとゝのへて。諸でたるをるしとをてかへりぬ。家にありては。是をもて茶をたて。客をもてなすこと南都の風なり。今ゝこの茶筅たえてなし。むかしを思ふに。青竹の茶筅鹿なるに。茶を立てて老をやしなふことならはしとせしを。今時はあたひたふとき器にて。茶をして心を勞し。壽を縮むる人少なからず。むかしの人。今の人と懸隔あることかくの如し

○人の身帶を能くをることの傳法は。高きも賤しきも萬事心得あることなり。千石領をる人ならば。九百石にてまかなひ。百石づゝ年ごとにあまし置くべし。一家百兩づゝの入用たらむ。九十兩にてまかなひ。十兩をあましおくべし。その他はよろづ儉約にありて。吝嗇にをべからず。儉はなすべきを致して。かゝざるが儉約なり。吝はをべきをせずして。惜むが吝嗇なり。儉約は家をおこし。吝嗇は家を倒す

○本三位重衡平氏さかりの頃。參内の折から。帝より扇の地を給はりける時。ほとゝぎすを一羽畫きたるを折らせられしに。あやまちて鳥を切りてなち。尾のみ殘りたるへ。歌よめと仰せありける時

五月やみくらたし山のほとゝぎす。姿を人に見をるものかは

とよみたり。又後藤兵衛尉盛次に。平氏沒落の時。重衡逢ひ給ひて。われ馬を射られたり。汝が馬を借せよとありけるを。盛次いなみて。今われ敵と戰ふの時なり。逃げのび給ふは歩にてもありなん。是は雨夜の傘なり。借し參らせじとて。走り行きて戰へりとぞ。ある人かたり傳へたり

○石州なる僧のもとへ。京の土産にとて。香泉を贈る人あり。めづらしとて湯をたぎらせるるうち。客の來りければ。よき折からなり。京みやげにもらひたる香泉まゐらをべしとて。茶碗の中へ茶たゝかに入れて。鹽を加へ湯をつぎて。箸もてかき交へ出だしければ。客は心得ねども。まづ一口喫しぬるに。苦みありて飲めざれば。やう〳〵にして湯もてゆるめて。飲みてたり。僧は頻に。茶ひてよくは今一椀まゐらすべしといふに。客辭退してかへれり。この客京へ來りし時。予がもとにて此事を物がたりぬ。田舍にて香泉さへ飲むす

べからざる人もありけるなりといへり。これを衆のをつたいと達へたる心得たがひにやありけんと笑ひき

○長樂寺の環了といふ僧。宣德の火鉢を得たり。日々に寵愛して。絹にふき袖に撫てゝ。晝夜かたゝらをとなたゞ。ある時。八幡より茶をたつる客来りて。濃茶の馳走ありけるとき。さま〳〵物がたりをる折から。傍にたゞこ盆にありながら。心なく客の碗を宣德の火鉢へ火箸もて。灰をほりつゝ吐かんとする顧を環了指もておしさゝへ。あばし待ち給へ。こゝに灰吹あり。願はくは是へ吐き給へといへむ。客は面目なく。碗を飲みこみて。これは〳〵ゆるし給はるべし。常には家にてかゝるふるまひにて候まゝ。それになれておもてを。不禮せしなりとわびけりといへり。茶の湯に他のことをならふにあらぎ。かゝることを常にせざるやうにこそ道はたてたるなりと。環了に物がたれり。予これをきゝて顧をおさへたるがよきや。おさへざるがよきやとわらひぬ

○むかし泉州に豪富の商人あり。圍碁を好みしかば。この道をもて。世をゝたれるもの多く。所々より入り来りける中に。江州にて諸侯につかへたる何某。人の讒によりて。身退き。國を去りて。堺に手習の師となり。多くの弟子を集めて。世渡りとせしが。折々かの家に来りて。圍碁の相手となりけるに。ある時。主人と碁をかこみ居けるに。その家の支配する者。金五拾兩紙に包みて。得意より来りし貸金の利金なりとて。主へ渡しぬ。あるじは圍碁に心を盡し居たりしが。それへ置くべし。あとにて改むべしとて碁打ちをゝ。相手はかへりける後。その金のことを再び支配人の申し出でけるに。主は受取りたる覺なしと云ふに。支配をる者はわたしたりとあらそへども。その金の行方なければ。つら〳〵考ふるに。持ち来りしまでは。少しの心おぼえありつれども。手に取らざれば。いぶかしく思ひて。その爭ひいよ〳〵止まぎ。主の考ふるに。居あはしたるは手習の師たる。猪飼何某のみなり。彼人中々に金などに目の肓べき人にはあらざれども。人はその時の貧困によりて。其志また變ぎまじきともいひがたし。もし疑しきにせまりて。掠めまじと極めてもいひがたしといへば。支配のものも云ひけるは。それはきはめて何某なるべし。このほど疑しきまゝに。人しらぎ。掠めたるなるべし。それとはなしに。試み見侍るべしとて。序がましく師のもとに行きて。これかれ物がたるついでに。云ひ出でけるやうは。このほど其許主人と碁を打ち給へる時。われらそくばくの金を主のかたはらに置きたるが見えず。御もとを疑ひまゐらするにはあらねど。そのをり。其席へ行

きたる者もなく。歸らせ給ふあとにて。なくなり候まゝ。もしや何ぞと取りちがへありて。持ちかへられもやするかと。心やすさに任せて。尋ね侍るなりといへば。何某ちがひし打ちかたぶきて云ふやう。されば こそあれ。流浪の身のてかなさ。その日のけふりだにたてがたく。多くの金に目くれ侍りて。人しらず持ちかへりぬ。あれこの事沙汰し給ふまじ。夜あけなば。その金とゝのへてかへし申べし。今暫し待ち給はれかしといふに。支配の者家よかへりて。主人へかくと告げたりければ。扨こそとて舌を巻きぬ。それより十日あまりを經て。金五拾兩を持ち来り。侘びて主人にわたし。我家に歸り。ひとりの女子をつれて。いづこともなく失せにけり。富家には打ちよりつゝ。人は見るによらざるものなりとて。爪むじきして謗れり。さあるに。その年も暮行くころ。煤拂する折しも。座しきのなげしより反古につゝみたる金五拾兩をうち落せり。みな〳〵こはいかにと打ちよりて。改め見るに。過ぎしころ。人に貸したる利の金にして。手習の師をうたがひたる時の金なりければ。豆に顔と顔とを見合せて。心得ぬことゝ。あつまり談合すれども。その師の行くへかつて知れざれば。是非なく。そのまゝにて過ぎ行きたり。かくて五とせをへて。東國より小刀鹿丁の類を仕込に来たる尾張の國の商人あり。堺の問屋が見せにて物がたりけるに。この地に手ならひの師を業として。猪飼何某といふ人ありやと問へば。家あるじの聞きて。それは五とせほどあとのことにして。流浪の後。乏しく富家何某がもとにて金五拾兩を盗みて。何處ともなく失せたる人なりといふ。尾州のあき人聞くよりとやく。否とよその金は。師が盗めるにはあらぬ。他の人の盗みたるなり。われらその師の娘にあひて。くむしくことのよしを聞きたりといへむ。問屋のいへるは。何處にて聞き給ふぞと云ふに。これ京にて宿の者に謗れ。島原にいたりしに。江口といへる大夫を呼びたり。二年をへだてゝ。上れるごとに行きけるが。この江口はかの師が娘にして。その時。富家へ返すべき金のために。身を費りたりといへり。左あらば人の難は。いかなる時にあるべきか。定めなき浮世にて。いともてかなきことなりと語りける。此事豪富の家の支配する者。かの問屋が方より聞きぬれば。主人にことのよしを告ぐるに。主人は聞くより大に悦びて。支配の者を招ぎて申をやう。その方いかにもして。京にのぼり。島原に至りて。江口といへる大夫が身受をもをべし。おかしまづ猪飼が行くへを尋ねゆき。師に逢ひて。わが行屆かざるをもよく〳〵わびて歸るべしとて。多くの金を持たせて江口がもとへ尋ね行きけるに。父は郡村といへるところに少しのゆかりを求めて。今は人の小作して。活計とせりとて。

泣々文したゝめてわたすに。支配の者よろこび。郡村に至り尋ぬるに。いとわびしき家あり。人の居らざりければ。あたりの者にとへば。野に出でゝをるべし。逢ひたく思ひ給へば行き給へとて。さし教へぬ。野に鋤を持ちて立居るものあるを。近よりてつく〳〵と見るに師なり。その有りさま在りし姿にかはりて。それとも思はれざりしが。よく見るにたがひもなければ。しか〳〵の事をかたりて。主人がいへる詞を述べて。その時かすめ給へるに。などありのまゝに仰せ給はざるやと云ふに。猪飼申すは。人の疑心は詞をもて解くべきことにあらず。我かく疑を受けぬるうへは。いかほどのことを申したりとも。許容あるべきことなきに。人情なり。その時の疑心。後には知るべきこと明かなれども。當意をいかにともせんすべなければ。ひとりの娘をうりて調達したり。士は不義の物をうけず。況や金錢に於てをや。その方これに逢ひたりとをべからず。とやく去るべしとて。再かへり見もせずして。畑を鋤けり。かゝれむ手代さま〳〵にて。金を戻さんとをれども受けず。ふひてそのことをいてず。その方の身のさゝはりとなるべし。とくゆけ〳〵と追ひれければ。是非なくひと先京に歸り。奈良屋何某といふを頼みて。さま〳〵にてなしけれども。娘が身受も。彼ら如きいやしき志しの輩にはゆるしがたしとて。聞き入れず。返しつる五拾金を手にも觸れず。生涯郡村に老を養ひて。終れりとかや

○子を見ること親にしかずといへり。奥州の秀衡に男子五人あり。兄錦戸太郎は。常によき馬を好みて。山野を乘ることを勤め。元良の冠者に女子を友として。遊ぶことをもてらこのみ。伊達の次郎は山川の漁獵を好みて。他のことをせず。泉の三郎に武具を好みて。よき物ある時は。もとめ來りて。みづから試み。刀劒なども作物は人にも譲りあたへて。よろしからざるはくじき折りては捨てたりとぞ。何れも文學の道をならはをるに。みな嫌ひて。只他の業のみを事とし。泉ばかりは夜を日につぎて。文學の道にこりてつとめけるがある時。秀衡は子どものこゝろざしをためし見んとて。秋の末つかた金花山へみな〳〵を伴ひ。山上に席をまうけて。山河の風景を眺望するをりから。子どもをあつめて申しけるは。何れも遥なるあなたの山の尾上に。ひと木の櫻あり。今をさかりと見えて。花の爛熳として開けること。雲かあらぬかみな〳〵の目にもさぞかし見ゆらんやと申しけるに。おの〳〵延びあがり立ちあがりつゝ見て。いかにも父が仰の如く。さくら花今をさかりと見えて。ふかもうるはしく見え侍るなりといふに。泉むかりは暫ながめつれども。櫻花の見えざりければ。父のかたてらはいたりて。仰に隨ひ見參らせ侍れど。わが眼には花ら